

二次元

60号まであと一歩!

cover illustration by
トモセシュンサク

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

立ち読み版

今号の特集
強制露出

大人気えっちマンガ&カラーマンガ

門の巫女 連載最終回!
無望菜志

超昂閃忍ハルカ
MISS BLACK

ばふえ / おおたけし
琴慈 / 夢乃狸 / e4

特別
付録

ピンナップポスター
トモセシュンサク
いつせー / いるまかみり

新連載小説

新たな変身!
ヒロイン誕生!



守護聖女
プリズムセイバー
空蟬×くまうち&船虫

大好評連載&読み切り小説

蒼井村正×或十せわか
狩野景×緑木邑
千夜詠×牡丹
Kyphosus×トモセシュンサク
山本沙姫×春夏冬工
愛枝直×パインバ

DIGITAL EDITION vol.59 2011 **08**



異世界からの侵略者に立ち向かう
変身ヒロイン新連載!!

守護聖女

prism saber

プリズムセイバー

乙女たちの散華

著者近刊
好評発売中!



「スレイブドール
紅眼の女特務捜査官」

第1話 発現

小説 NOVEL うつせみ 空蝉 挿絵 ILLUSTRATION くまっち & 船虫 ふなむし

原作 ORIGINAL Lusterise

世界史の教科書を読み上げる教師の音が、まるで異世界の呪文のように聞こえる。

「ふわ……あ〜」
 おりしも、昼食を終えたばかりの午後の晴天。初夏の爽やかな日差しが窓越しに頬に当たって、眠気を誘ってくれていた。

「……ルリナさん。睡眠不足、ですか？」
 「ん〜、斗真ちゃんが寝かしてくれなくて」

隣席。窓側二列目最後尾に座る友人の言葉が、そのものズバリ内容だったために、苦笑い。腰にまで届く長さの黒髪を指先で弄り弄り巻き取りつつ、ペロと舌を出し笑顔でごまかそうと試みる。

「……っ!? と、斗真君が……!?」

目をやれば、なぜか目いっぱい驚いた様子の親友の顔。茶がかったポプカットが今日もよく似合っている彼女は、どうやら見事な勘違いをしてくれたらしい。

一瞬だけ大きな声を出しかけてはつと口を押さえた親友に、改めて説明をする必要があった。

「斗真ちゃん『このゲームに勝つまで帰さない』って、夜遅くまでテレビゲームつき合わされて」

隣の家に住むゲームの腕前からきしな幼馴染みにつき合わされ、結局睡眠時間を削るはめになった。

そこまで説明してようやく、隣席の彼女の表情に安堵の笑みが浮かぶ。

口元に手を当てて、上品にクスリと微笑む彼女を見るたびに「敵わないなあ」、そう思われる。同性ですらドキッとするので。異性であれば言わずもがなだろう。

——神楽坂珠優。柔らかなショートヘアにほんわか笑顔がよく似合う彼女もまた、小学時代からの幼馴染みのひとりだ。

面倒見よく誰に対しても物腰柔らか。少々おっとりすぎる嫌いはあるものの、おしとやかで落ち着き

があり、協調性も上々。おまけに成績は学年でも常に上位をキープしている。元華族の由緒正しき家柄で、父親が地元企業を束ねる財団を経営していた。

直情的な自分とはなにもかも正反対な少女と、妙に気の合った友人となつて早十年。

眠気を誘う呪文が詠唱されている本日五時限目の世界史は、週に一度の選択授業。地理と世界史の選択制で、松組と藤組のふたクラス合同で行われる。地理を選択した生徒が松組の教室を使用、世界史選択者は藤組、という按配で、今日この日だけは十年来の親友——クラスが違う彼女と一緒に椅子を並べられた。

「ふあ……」

隣に珠優がいる。それだけで気が和らぎ、よけいに眠気が膨張してゆく。

「あの。辛いようなら保健室に……」
 落ち着いた珠優の口調が心地よくて、それがまたいつそう眠気を誘うんだもの——だなんて。告げたらきつと、困つたようにこちらを見つめて長いまつ毛を瞬かせる。想像たやすい光景を実際の前に再現してみようかしら。あくびを噛み殺した喉の奥にウキウキとした期待が湧き起こる。

(……たゆん)

視線の先。隣の机に乗っかるふたつのふくらみが不意に——自然と吸い込まれるように、視界に映り込んできた。

学園一の爆乳のぬしとして、クラスの男子の注目を一手に集めるダブル・チョモランマ。制服の胸元をこんもり押し上げるそれは、個々が珠優当人の顔よりも確実に、ひと回り近く大きい。

(ひよつとして。ひよつとしなくても、また大きくなった……?)

同級生の女子に言わせれば「贅沢な悩み」なのだそうだが——珠優が大きな胸と、ふくよかな体型を

気にしている、ひいてはその部分ばかり見られることにコンプレックスを抱いていると知っているから。だから、あえて本人の前では話題に出さない。

(私だつて胸の悩みに関しては、わかるもん)

珠優ほどでないにしても、学園トップ3に数えられる自身のふくらみを、下から手のひらで持ち上げてみる。たつぷりとした重量感。制服越しでも手に余る乳肉が、持ち上げた分ふつと軽くなり。胸に解放感が広がった。

自分でさえ、こうなのだ。より大きな胸の珠優は、相当の労苦を日々味わっていることだろう。

胸なんて大きくても運動の際に邪魔になるだけだ。走るとブラをしていても揺れて擦れて痛む。サイズが合わなくなればブラのワイヤーに締めつけられてやっぱ痛い。成長期には買い換える出費だつて馬鹿にならなくて、ただでさえ苦しい一人暮らしの家計を逼迫させた。

男子にからかわれたり、時にはあからさまにスケベな視線で見られもする。卑猥な話のネタにされるのを聞いてしまったことさえあった。

(本当、イイことなんてなーんもないんだから) なのに、なぜ。

「あの。ルリナさん? どこを見て……」

できるだけ見ないように心がけているというのに。なぜこんなにも珠優の胸は視線を惹きつけるのか。

一度目に入ってしまったら最後。ついむんずとわしづかみにしたい衝動に駆られる。無論、自身の胸に対しては一切感じない衝動である。

「生命の神秘ね」

(……?)

よくわからないといった風に、小首をかしげている。そこにまたキュンとさせられる。

(……そっか)

珠優の胸自体でなく、事あるごとに可愛い反応を

37

示してくれるその様が見たくて。ついつい構いたくなるのだ。

「そっか、そっかあ」

「え、えっと？」

やはり彼女との触れあいは、心地いい。ウブな反応が庇護欲と——悪戯心をも刺激するからだ。

ひよっとして。もしかして。男子たちもこれを期待してるのでは、と。少しだけ、連中が珠優に群がる理由がわかった気がした。

眠気もやや和らぎ、初夏の日差しと親友の様子に温められたハートがウキウキと躍りだす——はずだつたのに。

「——篠宮。次、読んでくれ」

絶妙なタイミングで先生のご指名を賜った。

「ひゃっ、は、はいっ」

ふざけていた後ろめたさと不意を突かれたせいもあり、返事は上ずり、教室のそこかしこで忍び笑いが漏れる。頬染めつつ視線を隣席へと向ければ。

「……二十四ページのここからですよ」

「さ、さんきゅうっ」

恩に着ます。ニコニコ笑顔をそつと拝んで教科書に目を通し。

「え、と……ん、んー。……読みます！」

周囲の忍び笑いをけん制するように、ことさらに大きな咳払いをして、気合も充填。親友に励まされつつ、どうにか読みきることに成功した——。

——キンコン、カンコン。

「心機一転！」

チャイムが鳴り終え、六時限目は待ちに待った体育の授業だ。本日のメニューは体育館でバレーボール。そしてこれまた引き続いての、松藤両組による合同授業である。

当然珠優と一緒にチームを組んでいた。

昼食後、しかも一日の終わりに体育なんて、何考えてんのと普段は思うところだけれど。五時限目の世界史での鬱憤を晴らすべく、今この時ばかりは張り切り度合いが違う。

（う……またブルマが）

体操服の上はそうでもないというのに。一週間ぶりに穿くブルマが、窮屈になっていた。

（お、お尻だけ太った？ それともウエストが）

「ルリナ、さん？」

「ん、んーん。なんでもないよ？」

寒気がするような想像を振り払い、不思議顔の親友に手を振って答える。頬を叩く代わりに腿に食い込むブルマを引っ張り、ばちんと鳴らして気合注入。一旦試合が始まってしまえば、食い込みなんて気にしてる暇もなく。

「そおれっ！ アタック！」

ずびしっ！ と小気味よい音を立ててバレーボールが相手コートへと突き刺さる。

（くううう痛快。やつぱり私って身体動かすほうが向いてるんだわあ）

この一点でマイチームが逆転に成功。後ろでひとつにまとめた黒髪おさげを手で梳いて、うなじと額の汗をぬぐう。

「キヤー！ やつたー！」

チームメイトからの祝福の声にハイタッチで応え。

「珠優ちゃん」

髪揺らしターンして——ぱちっ。最後に控えめにやつてきた親友を抱き寄せ、喜びを分かち合った。

「む、むぎゅう……く、苦しいですルリナさんっ」

「ああ。珠優ちゃんの身体が柔かいもんで、ついこれには見学していた男子連中から（男子は外でマラソンのはずなのに、さぼって見に来たらしい）やたら大きな歓声上がる。」

「お、おい。聞いたか？」

「ああ、柔らかい……んだな。やつぱ」

デヘデへとニタつく顔が非常にだらしがない。なぜか腰をモジモジさせてる子までいるのが不気味だ。

「はいはい。あつち向いちゃダメだよー」

「え？ でもそれじゃ上手くプレーが……」

我が身を盾に、首かしげる親友の視界から外野の男子連中をシャットダウン。声までさえぎるわけにはいかないけれど、幸いプレーが始まれば喧騒で掻き消えてしまう。

「……っ。き、きました……！」

そうこうしているうちに相手チームの放ったボールが、珠優の真正面に飛んできた。

「落ちていてやれば、だいじょーぶっ」

とりあえず落ち着くように声はかけたものの。ぼすんっ……。目測を誤った珠優のダブル・チョモランマにボールが激突。たつぷりとした肉感が見事にぶるんぶるんと縦に揺れて——。

「おっおおおおおう！！」

俄然盛り上がる外野席。

「やあんっ」

珠優が恥じらいながらしゃがみ込んだものだから、なおいつそう男子の歓声が大波のごとく体育館にこだまする。

おかげで気を取られた相手から易々追加点を取れはした。

「え、えっと。ナイス……レシーブ？」

「うう。恥ずかしいです……」

男子に背を向けしゃがみ込む親友の背をなでてやりながら。

（恥じらっているからだろうけど、男子にお尻向けるのは危険だぞ）

さりげなく彼女と男子の視線との間に身体を割り入れて、シャットアウト。

「くー、篠宮のやつ。邪魔だ邪魔！」

そんな声に、ンベツと舌を出して応えてやる。
 (まったく。毎度毎度懲りない連中)

日々こうして珠優の貞操はこの私を守っているの
 のに——。そんな風にひとりごち、また食い込み
 の気になったブルマを引つ張った瞬間。

「俺は断然ルリナを推すね。見る、あの張りのある
 ケツを」

(な、ななななな!!)

予想外の台詞が、風に乗り届けられる。顔が真っ
 赤に火照るのを自覚して、あわてて男子連中のいる
 方向に背を向け。

「ルリナ、さん？ 顔が赤く……もごっ」

「な、なんでもないよー、うん！」

感じたままに口走りかけた親友の口を抱き締めて
 ふさぎ、危うく胸の谷間で窒息させそうになる。

「確かに。取っつきやすい感はあるよな」

「神楽坂ちゃんほどでないにしろ、あの……アタッ
 ク決めた際に揺れるふくらみは捨てがたい」

(あーもううるさいうるさい！)

さつきまで外野の声が判別できないくらい騒がし
 かったのに、なぜ。都合の悪い話ばかり鮮明に聞き
 取れてしまうのか。

(おっぱいなら誰のでもいいのかあんたらはあつ)
 すっかり男子の視線の矛先が移り変わってしまった。
 そのきつかけを作ってくれたにつつき男子——
 幼馴染みの彼を睨みつける。

(斗真ちゃんのバカっ)

アッカカンペーしてやると、平気な顔して手を振っ
 てきた。

「うー」

本当、昔から変わらない。特に、あの邪な目は、
 小学校時代にスカートめくりの鬼と恐れられたこと
 と、これっぽっちも変わってない。

「ルリナ、ポールいったよー」

思い出に浸りかける間も試合は待つてはくれな
 い。再開を告げるホイッスルの音で強制的にコート
 へと意識が引き戻され——懸命にトスを上げたのが
 珠優であると認めた途端に、今しがたまで感じてい
 た苛立ちが綺麗さっぱり消失した。

世界史の授業で助けられた分。それがなかったと
 しても、得意な分野で助け合うのは当然のこと。
 (だからここは私が珠優ちゃんの分まで、ふたり分
 ……がんばる！)

アタックは相手にかろうじて拾われ、再度ポール
 がこちら側のコートへ舞い戻る。

「……珠優ちゃん、お願いっ」

「う、うんっ」

彼女がもし取りこぼしてもフォローできるよう身
 構え、注視しながら声をかけた。あからさまには
 なく、さりげなくフォローすることに努め、極力珠
 優にもポールに触れてもらう。

「あううっ」

「おっけ！ いっくよー！」

多少外れた方向へ上がったトスだろうと、それが
 親友から託されたポールだと思えば、少々の無理は
 押し通してみせる。

「ずばんっ！ 反り気味な体勢で打ち込んだ一撃は、
 相手コートの最後尾。ライン際へと突き刺さった。
 (これで……ゲームセット！)

「ルリナさんっ」

おたがいに全力を出し切った。だから珠優も萎縮
 することなく喜びを共有できるのだ——なんて小難
 しいことを考えていたわけもなく。

(ただ、そうしたほうがイイかなってなんとなく思
 っただけなんだけど。……ん、結果オーライ！)

「おたがいに全力を出し切った。だから珠優も萎縮
 することなく喜びを共有できるのだ——なんて小難
 しいことを考えていたわけもなく。」

「ただ、そうしたほうがイイかなってなんとなく思
 っただけなんだけど。……ん、結果オーライ！」

「おたがいに全力を出し切った。だから珠優も萎縮
 することなく喜びを共有できるのだ——なんて小難
 しいことを考えていたわけもなく。」

「ただ、そうしたほうがイイかなってなんとなく思
 っただけなんだけど。……ん、結果オーライ！」

「おたがいに全力を出し切った。だから珠優も萎縮
 することなく喜びを共有できるのだ——なんて小難
 しいことを考えていたわけもなく。」

「おたがいに全力を出し切った。だから珠優も萎縮
 することなく喜びを共有できるのだ——なんて小難
 しいことを考えていたわけもなく。」

結果的に最後の授業を最高の気分で締めくくることが
 できた。

「……かゆい。かゆいかゆいかゆい」

着替えて掃除を済ませて、ホームルームを聞き流
 した後の下校タイム。珠優と連れ立って帰路を歩み
 ながら、胸を掻する。

「あせも？」

「うん……」

体育で汗をかいたせいで胸の下が蒸れてしまい、
 あせもができてしまった。

「……男子がいなかったら、体操服パタパタして扇
 げたのに」

隣の親友も「は、はしたないですよ」などと言
 いつつも、うんうんと頷いてくれている。やはり、彼
 女は同じ悩みを分かち合える(巨乳)同志だ。

「スプレーが切れちゃったのがなあ」

発汗抑制用のスプレーが、まんべんなく吹きつけ
 る前に切れてしまったのが、そもそもの原因だ。

「私も持ち合わせていれば、お貸しできたのですが」
 元々汗をあまりかかない体質の珠優は、そもそも
 スプレー自体を所持していない。

「やつぱり新しいの買わないとダメかなあ。でも今
 月は家計が……あうう」

財布の中身の軽さを想像して、気持ちが悪む。

「あらかじめタオルを胸の中に入れておく、という
 のはどうでしょう」

「それ、よけいに男子の目についちやうと思う」
 気を使って提案してくれた相棒に、ツッコミを入
 れる。あ、そうですわね……なんて顔をしてる彼女
 は、結構な天然だ。

あせも対策を練りながら、時にじゃれ合い、キャ
 イキャイト。

「……ん？」

楽しく過ぎ行く帰路になにやら、地べたにうずく

「……ん？」

楽しく過ぎ行く帰路になにやら、地べたにうずく

楽しく過ぎ行く帰路になにやら、地べたにうずく

まっっている人影発見。

「あの方。どうか、されたのでしょうか？」

「行ってみよっか」

珠優を促し一緒にもう少し近づいてみると、うずくまるというよりも這うようにして、何か探し物をしている様子なのが見て取れた。

「ね。なにか、探し物？」

小走りに歩み寄って声をかける。すると――。

「……っ！」

びくッッ！ 背後から声をかけたのがまずかったか。やたらと驚いた様子で髪をなびかせ、小柄な少女が飛び退る。

「あ、ああ。ごめんね急に声かけちゃって。ただ、どうしたのかなあって、気になっちゃったから」

「……」

ストリートロングの長髪を彩るリボンと、おどおどした様子の表情が印象的な少女だった。

制服姿から、同じ学園の生徒であることは知れた。背丈の低さと見慣れない顔であることから、おそらく下級生なのだろうことも。

ただ、立ち上がったことで改めてその小柄な体格の際立つ彼女は、ひとことも発さずにじっとこちらをうかがってくる。

見るからに気弱そうだし、上級生相手ということによけいに萎縮しているのかもしれない。

（ん〜、こういう時は）

相手が言いたげなそぶりを見せている限りは、何かしゃべり始めるまで気長に待つべきだ。

チラと横見れば、相棒も同意見なようで、ニコニコ笑顔。いつものようにおなか辺りで両手の指を絡ませて、頷いている。

彼女が同意見なら、間違いない。自信を得て静かに、笑顔ふたつ並べて年下少女の発言を待った。

「……あ、の」

「うん？」

待つこと三十秒ほど。ついに少女は口を開き。

「大事な……キールホルダーを、なくしてしまつて」

おずおずと探し物について言及してくれた。さらに聞けば、親からもらったもので、十年近く大事にしているのだと言う。

「そっかあ。じゃ、私たちも探すの手伝うよ」

「え……で、でも」

「いいからいいから。どうせ帰つてもポテチかじりながらお夕食待たただけだもん。ね？」

「うん。そうそう……つて、私はお夕食前にポテチなんてつまんだりしません……」

ナイスノリ。内心で相方に賞賛を贈る。

「おんや。そうでしたかしら？ おほほほほ」

こいつは失礼、だなんておどけてみせたせいで、

「よしっ。それじゃ、ちやちやっ」と探しちゃおう。

熊のキールホルダー、だよな？」

気を取り直すべく咳払い。腕まくりをして、準備は万端。

「三人で探せば、きつとすぐに見つかりますわ」

珠優の声が落ち着くのか、涙ぐんでいた年下少女もコクンと相槌。

こういうところはやっぱり彼女には敵わない。ひとりごちつつも地べたに向かい、探索を開始する。

――そうして探索すること、約三十分。

「ん〜ないなあ。……おーい、そっちはどう？」

学園から少女と出会った地点までを限らず探したものの、いまだ目的のものは発見ならず。

「こつちも、ま〜だ〜です〜」

しゃがんだ状態から顔を上げて仰ぎ見た視線の先百メートルほど向こうで相棒が手を振って、彼女にしては目いっぱいの大声で、あちらも収斂なしであることを告げてきた。

「真白ちゃんのほうはー？」

珠優と真逆方向に身体を向けて、先刻名を聞いたばかりの少女に声をかける。彼女は力なくうつむいた状態で、小さく首を左右に振って応えてくれた。

「むー」

これほど探して見つからないとなると、すでに誰かに拾われてしまったか。さもなければ、側溝を引っぱがしてドブさらいをするしかないかも――。そんな風に考え始めた矢先。

（ん……？ あれっつて）

目端が、キラリと光る物体を捉えた。

（あの辺には、さっき見た時は何もなかったはずだけど……）

目を凝らしてみれば、輝いていたのは透き通ったクリスタル状の塊であることがわかる。

（宝石……にしては大きすぎるし。原石……つてわけでもないし。なんだろ……？）

日常生活ではまずお目にかかれない代物の出現に、否応なく興味を湧いた。さつそく歩み寄り手に取ってみると、予想よりもずつと軽く。手触りよく肌に馴染む。

「これも、誰かが落としたのかな」

年頃の娘の手のひらに余る塊を落として気づかない者がいるかは、少々疑わしくはあるけれど。一応は拾得物として交番に届けるべきだろう。

「どうかしました〜？」

電柱の陰にしゃがんで動かないでいたせいで、不審に思われたか。例によって揺れる胸の振動と衝撃を抑えるため、胸元で腕を組んだままの状態で、ととて小走りに珠優が駆けてくる。

「あ。見て見てこれ……」

そんないつもどおりの親友に、いつもどおりの調子で手を振り答え、クリスタルを掲げてみせた――その途端。

「唱えよ」

「へっ……？ え、ええっ……と、誰？」

「イノセントアクセラレーション」

「イノセント……アクセ、レーション？ つあ、あの、ちよ、ちよつとっ」

大人の、女性の声に釣られて謎の文言を復唱してしまつてから。ちよつと待って、なんて問いかける間もなく、全身が――掲げたクリスタルを中心に広がった輝きに包まれていく。

「ルリナさんっ……!?!」

口元に手を当て驚いた珠優が、危険を顧みずに身を光に突っ込ませようとするのを、まばゆさに閉じかけた目が捉えた。その肩越し遠くに、珠優以上に驚愕の表情を差し浮かべた真白の顔もある。

「わ、私、どうなってるの?! なにが、起こつて……なんだかボカボカ、あつたかいし……なんかぬるめの風呂にゆつたりと浸かつて、ウトウト舟を漕いだ時の心地よさ。気だるさにも似た感情が全身に巡っていた。

――やがて、収束してゆく光の中から五体無事な自身の身体が出現する。その様を、まばゆさに馴れ始めた瞳が目撃し――そしてすぐに我が目を疑うこととなった。

「な、なによこれえっ」

瞬く瞳に映し出されていたのは、先ほどまで纏っていたはずの制服姿でなく。

中世の騎士を思わせる肩当てに小手、具足といった金属製の防具類。唯一ニーソックスだけはそのままだったけれど、何より胴体を覆うドレスに目が惹きつけられる。

おまけに右手にはいつの間にか分厚い刀身の、身の丈ほどもある大剣が握られていた。防具も武器も、見た目よりもずつと軽く、肌馴染んでいる。

「――じゃなくて! なんぞっ? どうしてえっ」

腰に纏うマントを翻し、尋ねてみたものの。

「選ばれし戦士よ。健闘を祈る」

「え。ややや、ちよつと待ってよう……!」

謎の声は簡潔すぎて理解不能なひとことを残してそれっきり、聞こえなくなつてしまつた。

「え、ええつと……ルリナさん、ですわよね?」

「あうら……」

珠優の反応も無理もない。そう、髪を飾るティアラごと頭を抱え、輪をかけて困惑する思考を巡らせ。これではまるでコスプレだ。RPGの女剣士っぽい。

「どどどうしよう珠優ちゃん!」

「う……ん、困りましたわね……」

結局、混乱を終息させる方法は混乱頭脳に浮かばなかった。こういう時はマイペースな親友だけが頼りだ。

どうやれば、元の格好に戻れるのだろうか。

「あ……。変身? なさつた時のことをよく思い出してみたいかがでしよう?」

「ばむ、と拍手を打つて親友が言う。

「変身した時の……ん……と、そうだクリスタル!」

我ながら早々に気づいて、クリスタルを握っていた右手。天高く掲げたままの右手のひらを下ろすや否や覗き込んでみたのだけれど――。

「あ、あれっ? ないっ?!」

あたふたしていて気づかなかつたが、手にしていたはずのクリスタルがどこかへと消え去つてしまつていた。

「ふええんっ、どこ行っちゃつたのよお」

熊のキーホルダーもまだ見つからないのに、探し物が増えてしまった。この格好のまま探すと道行

く人々の注目、それも奇異の視線を独り占めだ。「それだけはダメえっ」

今はまだ幸いにも人影がない通学路で、声を大にして叫ぶ。今しがたの想像が現実のものとなれば、明日から平穏な日常生活が送れなくなつてしまう。

「……平穏な学園生活がそんなに大事か?」

「もちろん! ……つて真白ちゃん?」

振り向き、いつもの調子で言葉を吐き出した、次の瞬間。

「後ろ――危ないっ! そう叫んだつもりだったが、果たして彼女の耳には届いたのだろうか。真っ黒なとぐろを巻いた不気味な物体の中へ飲み込まれようとしていた彼女の耳に――。

「な、なによ今度はあつ」

グネグネうねり狂う、大人の背丈ほどもある漆黒の塊。蛇と見紛うようなヌルついた皮膚を持つそれは、目や鼻や口こそなかったけれど、ドクドクと荒く息づいていて、生命を感じさせた。

「……っ、真白ちゃんを助けなにとつ」

思った時にはすでに身体が動いていて。手にした分厚い刀身を、叩きつけるように異形の塊へと振り下ろす。

――ブシューウウウツツ!

「わぶっ……」

返り血――というにはあまりに黒く粘り気の強い、臭みのある汁を浴び、臭みと気味の悪さに嫌悪感が渦巻いた。得体の知れぬ生物相手に恐怖を覚えつつ、えずきとともに込み上げる負の感情を必死にすることで押し殺し、半開きの瞳で異形の塊の裂け目の奥を――小柄な下級生の姿を探す。

(あつ……!)

脈打つ漆黒の只中に、白く小さな手が垣間見えた。目端で捉えたのと同時にそれを掴み、引っ張り出すと力を込めた。

「……気安く触れるな」

響いたのは、想像だにもしなかった、音色。暗く沈んだ、苛立ちまぎれの不協和音。

「っ?! ……きゃあつ」

握った手を振りほどかれ、反動で尻餅をつき。

「ルリナさんっ」

そうして駆け寄ってきてくれた友人に助け起こされながら。ふたり揃って、目を疑うモノを目撃する。

「まったく。ふん……貴様ごときが軽々しく触れていいボディではないのだぞ?」

食虫花のごとくあぎとを開いた漆黒の触手群から、浮き上がるように小柄な肢体が出現した。

黒の群れの中に浮かび上がるなお暗きマントに、ブーツ。鮮血と見紛うほどに赤い鉤爪を両の手に装着した彼女は、真白と寸分違わぬ顔形をしている。

「真白、ちゃん……なの?」

「で、でも」

はつきり彼女だと断定できなかったのは、これまたファンタジー世界から抜け出したかのような衣装のせいでも、先刻聞いた耳を疑いたくなるような暴言のためでも、髪型がツインテールに変わっていたせいでも、ない。

——目だ。小柄な肢体をボンデージのように暗く輝く生地とガーターベルトを始めとした妖艶な装具に包んだ彼女の瞳が、まるで世のすべてを憎むかのように吊り上がり、煌めいている。不敵な笑みを湛えているせいもあり、背格好と不釣り合いな艶と凍えるほどのおぞましさを感じさせられた。

「くっくっく……真白のことより、自分たちの身を心配したほうがいいんじゃないか?」

ニイ……と歪められた唇が、不穏な台詞を吐いた直後。

——しゅう……づるるううっ……!!

「きゃっ……ア……!!」

「珠優ちゃん?! わきゃあつ……」

不覚をとったのは、触手を足場に高みに立つ彼女に気を取られたせい、とばかりも言い切れない。今しがたまでの、のたうつような鈍さが嘘のように、異形の群れが足元へと突進してきたのだ。

「くそおっ。来るなっ……来ないでつてばあつ」

異形が分泌しているらしいぬめり気のせいでも脚に踏ん張りが利かず。振り下ろした刀身は浅く触手の幹に食い入っただけに終わる。

——ぶびゅ! にゅぢゅる! ぢゅづるるる!

傷つけられた異形は目に見えて激しく震えて、すぐさま標的を一点に——刃持つ右手へと定めてきた。

「このっ……もお、しつっこいっ!」

柄はおろか刀身にまで、漆黒の触手が巻きつき、引つ張るようにして武器を取り上げようとする。斬り裂かれることを恐れていないのか、それともそれほど腕がなくと見くびられているのか。

後者だとするならば、その予想は不意ながら的を射ている。

「鈍い貴様らにありがたく教えてやる。この子たちを操っているのは……この私だ!」

早くも膝丈の高さに達した異形群を止めなければ私を攻撃しろ、と。少女は暗に示してほくそ笑む。

「そんな、こと……」

できるわけないよ! ——叫んだつもりで唇と喉は、濁りだしてまともに言葉が吐き出せない。

「いやあつ! やつ、ああ……っ。気持ち悪いっ」

「……珠優ちゃんっ!」

手を伸ばせば届きそうで、なのに異形の波打つ勢いにさえぎられて、ほんのわずか届かない。そんな目と鼻の先で、親友の制服に、スカートに、ぬめった触手が大半し、たかっていた。

(しまった……!!)

間近の標的に夢中になるあまり、珠優の周囲への

気配りがおろそかになってしまった。

ネットつく心地悪さに震え、這いずる不気味な感触に怯えて。親友の目に大粒の涙が浮かぶ。ぬめり気を浴びて透けた制服のブラウス越しに、白のブラウ紐が覗いている。

「やめてっ! やめなさいよおっ!」

真白を助けようとした時のように、万全の体勢ならば。たやすく異形を裂けるはずの武器を手にしていながら。どれほど振り回そうとも、すぐ傍にいる友達を助けることすら、今の自分には叶わない。

(悔しいっ、よ……!!)

ただただ己の無力ぶりが情けなく、悔しさだけを噛み締めて。それでも泣き出したいのを懸命に、唇を噛んで我慢する。

さっきまでは楽しくおしゃべりをして通い慣れた道を歩いていた。いつもどおりのありふれた、小さな幸せを満喫していられたのに——そんな風に考えると涙を堪えられなくなりそうだったから。

だからよけいなことは考えないようにして、ただ目の前で助けを求める友達の手を取ることだけを念頭に、遮二無二剣を振るい続ける。

「……つまらん」

(……っ!)

冷めた真白の声が頬に触り、思わずキッと睨みつけてしまう。その瞬間。一瞬だけ彼女の表情が弱々しげな本来の彼女のものに戻った気がした。

(やつぱり……あの子なんだ)

助けないと——珠優も、真白も!

「……ふん」

決意を秘めて再度見上げた先で。宙を駆けるように、触手が形作る橋を伝って見る間に接近してきた少女が、無慈悲に両の手の鉤爪をなぎ落としてくる。

——がぎっ! イインッ……!!

「んくっ……うあ……っ!」

「んくっ……うあ……っ!」

「んくっ……うあ……っ!」

「んくっ……うあ……っ!」

「んくっ……うあ……っ!」

両手の指に血管が浮くほどしっかり握っていたはずが、軽々と剣は弾き飛ばされ、暗き触手の波の中へと埋もれていった。

小柄な体軀からは想像できないほどに少女の攻撃は重たく、鋭く突き刺さり、一度受け止めただけで両腕がしびれ使い物にならなくなった。

異形に半ば埋もれる形で、踏ん張りの利かない両脚がみつともなく震えだす。

「聖女に選ばれし戦士が、聞いて呆れるな！」

居丈高に鼻で笑われても、言い返す言葉がない。聖女というものも、よく理解できなかった。

(そんなことより、早く珠優ちゃんを……)

自身が嘲りの対象になることなんて、どうでもいい。それより一刻も早く友人を助け出さなければ。

「……この真白様を無視するか。上等だっ！」

——ザシユ!

「きゃああっ！」

そんな態度を無視と受け取ったらしい少女の巨大鉤爪にながれて、右肩から鎖骨にかけての衣服が浅く裂かれる。

(ファンタジー世界の服なんだから、もつと頑丈にできてよおっ……)

誰が作ったのかもわからない衣装に文句を言ったところで、現状が劇的に変わるわけでもない。ズキリと裂かれた部位に痛みが奔る。服だけじゃ、ない。「……ふん。下品なデカさの乳ぶら下げおつて」

衣装の裂け目から右の乳首まわりが露出し、その上方からは鮮やかな赤が滴り落ちる。

皮一枚ほどだが、肩口を裂かれていた。

「きゃああああっ！」

痛み自体はたいしたことなかったが——刃物で斬りつけられた。そのことに対する純然たる恐怖が胸を占め、気づけば頰引き撃らせ叫び声を上げていた。いつ人目があるかもしれない公道で、素肌を露わ

にしている。先ほどまでは誰か通りかかって一番に電話してくれないか、なんて考えもしたけれど、羞恥と恐怖によって萎縮した身体が、前かがみになつて胸を相手の視線から覆い隠した。

「へ、変態っ！ スケベっ！」

自身、言葉の少なさに辟易しながらも、とりあえず思い浮かんだ言葉を片っ端から頭上の少女へと半ば恐怖をごまかす思いでぶつけた。

「そんな卑猥なものをぶら下げているほうが悪い」

「ひ、卑猥っ……！」

あんまりな言い様にさすがにカチンと来て、視線を上げる。

「貴様だけみつともないんじやかわいそうだから、あつちの女も同じ格好にしてやるか」

足場の黒触手が台座を形作り差し出すや否や。当たり前のようにそこに尻を下ろした少女。彼女の喉

が蠢くたび、侮蔑と嘲笑とがばら撒かれる。珠優も同じ目に——そう聞かされた瞬間。羞恥心と痛苦を恐怖が上回り。剥き出しになった胸元を隠すのも忘れて上体を起こし、声の限りに叫んでいた。

「やめてっ。どうして、そんなこと言うの!？」

さつきまで、一緒に探し物をした。最初は控えめ

だった彼女のほうからもぼつぼつと話してくれるようになって、仲良くなれたと思つたのに——!

「どうして? 楽しいからさ。貴様みたいな牝豚が、無様に喘ぐ様を見るのが」

悪辣な言葉の数々は、きつと忌まわしい触手どもに吞まれたせいで。先ほど「触手を操っているのは自分だ」と言っていたが、もしかしたら逆に得体の

知れない異形に操られているのかもしれない。

どのような目にあつたとしても。ただだどしく探

し物のことを話してくれた彼女の姿こそが真実なの

だと信じていたかつた。

珠優も、剥き出しの憎悪が己に向けられていることに悪い、怯え、群がる異形から身をよじり抗いながらも、その瞳はやはり本来の真白を信じて揺るがないでいる。

(ふたりを助けなきや……)

今この場でそれができるのは自分だけなのだ。固い決意を胸に両手を触手の波の中へ突っ込み、掻き分けるようにして歩を進める。

まずは周囲の触手群。脚に絡み進行を阻害する異物を、排除する必要があつた。

(でも、どうすれば……っ、この、動いてよお!)

不測の事態に焦りばかりが増し、思うようにならぬ我が身への苛立ちも募りゆく。焦りから注意力は散漫となり、またよけいに苛立ちが募つて。悪循環のスパイラルにはまり込む。

——にゅぢゆるるるっ!

「ひっ! や……あ!」

明確な対策を講じられないでいるうちにも、異形の群れは波間に浮かぶふたつの肢体へとヌタヌタよじ登り、悪寒と恐怖とを染み込ませようと蠢動する。

「だっ……ああ、入つて……こないでえっ」

「珠優ちゃん! 待つて、今行く……からあつ」

さつきも同じことを考えた。あれから何歩。前に進めたか。焦燥に駆られる胸をむしる手間すら惜しんで、か細い悲鳴を上げた親友の胸元へ目を向ける。

蠢く異形の頭がいくつつか、こんもり盛り上がるブラウスの隙間から、無理やりに内側へと潜り込もう

としていた。

プツ、と異形の圧力に負けたボタンが飛ぶ。そう

して隙間が広がった途端、ズルズルと耳障りな音を響かせて、黒の群れが鮮やかな肌色の地へとなだれ

込む。その様を、ただ見ていることしかできない己

への無力感にまたも打ちのめされる、間にも。

「やつ、あ……!! 気持ち悪い、ですっ……っ」

「やつ、あ……!! 気持ち悪い、ですっ……っ」

果然とした様子の真白の声音が聞こえたけれど、そちらを気に留める余裕もなく、親友の拘束を解くこと。それだけに意識を集中させていた。

「目覚めたばかりで力の使い方も知らないやつに。真白の可愛い子たちがやられる、だとオ……」

「待ってて……もうすぐ……ひやうつ!!」

標的にぶら下がりが、ふたり分の重みで珠優の拘束を引きちぎろうと試みる。爆発的に力が弾けた感覚のあつた当初ほどでないものの、苦戦したこれまでが嘘のように異形の肉を裂いてゆけた。

「ル、ルリナ……さんっ……」

「うん……っ」

弱々しい声とともに視線を重ねた親友を安心させるように、異変に見舞われて以降初めてとなる笑顔も、無理やり作った笑みを彼女に向けた。その間も、ぶつり、ぶつりと拘束が一本一本剥げ落ちる。

（あと、もう、ちよつと……!）

もう、残り数本だ。あと少しで珠優を救出できる。期待に胸膨らませた直後。汗の浮いたその胸先に、ヌルリと心地悪い感触が張りついてきた。

「ぶざけるのも大概にしろっ……!」

眉吊り上げ怒りの形相を露わにした少女の声に気を引かれ、それから己の胸元へと目を落として。気味悪い感触の正体が、黒触手であることを知る。

「これでもまだ他人のことを気にかけるつもり?」

「無理でしょと言いたげに、少女の唇がほくそ笑む。涙の浮いた瞳を向けて声をかけてくれようとした親友の唇に、群れを成して黒光りする異形が殺到し、ねじ入って、ふさぐ。」

「珠優ちゃんっ!」

息苦しそうに鼻で呼吸をしながら、こちらを安心させようとわずかに目で合図をくれる。ピチピチと口端から飛び出た異形の胴が、この上なくおぞまし

く、それだけに親友の献身が身に染みた。

（く、うあ……ヌルヌルが、こびりついてえつ）

底冷えするような悪寒が胸先から身体の内まで突き抜けていく。この気持ち悪さを、今まさに親友も味わわされている。おまけに悪臭のするぬめりに、口の中までも汚されているのか。

「くう、ううう……! 今、助ける……からあつ」

一刻も早く。助けてあげなくては。

（私なんかよらずと泣き虫で怖がりなんだから、あの子……!）

親友の手首を拘束する触手群にかけた指先に、力を込める。脚を触手に引かれても、決して放すまいと、強く、強く願いを込めてしがみついた。

——ミリ。

（もう、少し……!）

太い触手の根元に、裂け目が入った。あと少しで引きちぎれる。——そう、思ったのに。

「ほんつと、目障りな……牝豚だな貴様っ!」

にゅぢゆるるるるる! ぎちつぎゅちちイイッ!

「あくうあつ!? つ……あと、ちよつとなのにい!」

腰に巻きついた極太触手によって引き剥がされ、地べたの触手群の波間へと落とされて、尻餅ついたその身を間髪入れずがんじ搦めに拘束される。

「ぐ、くうううっ!」

きつい締めつけによって縛られた四肢、腹部にネトついた汗がにじみ出るそばから染んで、よりいっそう心地悪い。特に剥き出しの胸に、念入りに汁を擦り込もうと、異形が殺到していた。

「そこらでもお友達の姿は見えるだろう?」

「じつくり、見てやるといいわ。言っって背を反らし、高笑いを響かせる。その様は無理をしているように見えて、むしろ哀れみを誘う代物だったけれど。」「つ、くう! この、ほどこきなさいよおつ!」

失望感と怒り。そして。

——にゅぢつ、ぬぢゆりゆるるつ!

「いやあああああつ……!」

胸の谷間を我が物顔で這いずる黒い異形の、不気味な動きと不規則な鼓動と、併せて嘔きつけられる湿った粘液。それらのもたらす嫌悪感に、意識を支配されていた。

「や、あ、うう……ダメ、だつてばあ……つ」

ぬめりは異形の締めつけや摩擦を緩和して、奇異な感覚を柔肌へと刻んでくれる。くすぐったさとも、むず痒さとも微妙に違うもどかしい感覚。初めて知る感覚に惑い、乱れ、脱力する己の身体に、苛立ちまでもが募りゆく。

「ふふんっ」

真白が髪を掻き上げ、また、鼻で笑う。

にゅりゅづつ……ぶぢゅうううつ!

まるでそれが合図だったかのように、剥き出しの両乳首に、同時に異形の突端が吸い付いてきた。

「ひあッ!? つや、放しつ……つア……!」

口もないのにびつたりと張りついて、強烈に吸引された乳房がつき立ての餅のごとく引き伸ばされる。

「ひや……うつ!」

ピリピリと電撃めいた感覚が、ついにまれた乳頭から胸の奥のほうにまで響いてきて、思わず上ずった声が無漏れ出てしまう。

「ふふ。なに、変な声出してるんだ?」

小馬鹿にしたような声が、妙にばやけて聞こえた。（む、胸がジンジンっ、なにこれ……なんどっ?）

先ほどのむず痒さに似た感覚と同様、やはり初めて味わう類の感覚だ。おまけにむず痒さ以上にもどかし、胸掻きむしりたい衝動に駆られる。けれど両手は胴ごとがんじ搦めに再拘束されていて、ただじばたばたもがくことしかできず。よけいに焦燥に駆られ、意識は自然に乳首へと集中する。

（や、だ……なんだかわかんないけど、このジンジンするの……いやあああつ！）

とにかく何か行動なり思考していないと、乳頭部分が気になって仕方なく、与えられる刺激に対してよけいに過敏な反応を見せてしまう。

「あうっ！ んっ！ んん！ ツァ……も、もおやあああつ……はアツ、う……放してえええつ」

珠優のほうはさらに酷い有様で、すでに濡れて肌に張りついた制服の内側にまでみっちり。黒く光る異形が侵入して、蠢く様が透けて覗く。

剥かれたはずの豊乳も触手に包まれてしまっていて、巻きつく幹と幹の隙間よりわずかにムニユリと肉がはみ出して見えるほかは、その形状すら判別できない状態だ。

「も、もう、す、吸つちやダメ、ですうっ。そこはあつ赤ちゃんの、つや！ つふあああんツツ！」

同じように胸先を吸われて——いや、すでに吸われ始めて時間が経つのか。「もうダメ」と口にした親友は肩震わせてのけ反り、振り払いたくてもできない指先を頭上でわななかせて、甘く、ふやけた声音をほとばしらせている。

「み、珠優!? だいじようぶつ……!?!」

「だいじようぶもなにも。あんなに気持ちよさそうに喘いでるじゃないか。……あつちのほうが大きいのに、感度いいんだな」

気持ちいいから嬌声を漏らしている。吊るされた状態で腰をモジつかせながら、目尻を下げて涙を浮かべ、口元を緩ませ甘く鳴いているのだと、真白が懇切丁寧な説明をくれる。

「そんな……こと。ふアツ……あるはずないよ！」

想像もしていなかった発言内容にあっけに取られ、即座に否定の言葉を口にした。こんなに気味悪い化け物相手にありえない。眉をひそめて考える。

「そうか。じゃあ貴様も身をもつて味わうといい。

……たつぷり、可愛がってもらうのだな」

にゅ——ぞぶりゆるるるる！

「ひあつ！ やっ、この……!」

きつく、きつく胸元を黒い胴に絞り立てられた。そうして乳頭をより強調させられた上に、吸い付かされている突端——乳首への吸引はより強く、リズムカルな起伏をつけた刺激へと変化して。

ぢゅぢゅつ、ちゅづるるる！

「ひや、ああうう!?!」

胸の芯を突く甘辛い衝動に押し出されるかのようにまた、煩悶の表情を浮かべ、上ずった情けない声を漏らしてしまふ。

「ドキドキするだろ？ 胸の先つぽが硬くツンと尖つてきて、奥のほうが必要な」

「ち、が……っ。これ、はっ……!」

「なにが違う。貴様の腰は物欲しそうに動いてるぞ?」

言われて初めて気づく。異形の波間に浸かる尻が、喘ぎ喘ぎもつれる声音に呼応するように、知らず知らずユラユラくねっつてしまっている。

「もどかしいんだろ？ もっと、強くして欲しいんだろ?」

「ぐっ……!」

口を開けば甘く上ずった声がまたこぼれてしまいうで、あわて囁み縮め。

（違う！ そんなんじやない。私も、珠優ちゃんもそんなエッチな女の子じゃないもの……!）

透けて覗かれる心配のない心の中でだけ、否定の意思を示すことができた。

「さ、先つぽがジンジンしますの……おっ」

親友の甘い鳴き声は、まだ止め処なく響いていた。

「搾つても、なにも出ない……んだからあつ……!」

我ながら何を言っているんだらうと思いつつも、同じ刺激を受けている友人の嬌声の余韻と、我が身の

内に蓄積する感情を打ち消したくて、声を張る。

肩口の破れ目から、衣装の内側にまで触手たちが潜り込んできていた。ヌチャヌチャと音を立て、脈を刻む胴体から染み出た粘液を擦りつけては、また悦楽を示す脈動を響かせる。

（気持ち悪い、の……ど、どう、してえ……）

異形の蠢きに合わせて、腰が揺れる。くすぐったいから。あるいは気持ち悪くて敵わないから。どちらとも違う。

触れられた部位が熱を持ち、じれったくなって、我慢できなくなりそう——怖い。未知の感覚は、恐怖を呼び込み反撃の氣勢を削いでいった。

「強情張らずに、身を任せてしまえ。牝豚らしく、鳴いてみせるがいい」

「いやっ……絶対に、嫌よっ!」

暴れるたびギチギチと、四肢を、腰を、胸を縛る拘束がきしむ。その都度異形の触手は体液をにじませ、ますますヌルヌルと全身、生臭い汁のヌメリ気に包まれる。

「つく、うう……絶対に、諦めない……っあ! や、ああはあつ!」

そのヌルつきがまた、もどかしさに拍車をかけ、触手の動きを助長して、密着感を高められた素肌に過敏な反応を取らせていた。

「ふふん、口ではどうとでも言えるな」

冷酷な声がまるで最後通告のように響き——。

にゅむうっ!

「や、あつ、さ、触らないでっ……!」

瞬く間に接近されて、背後に回り込まれ。巻きつく異形により強制的に立たされた腋下を通り抜けた小さな手のひらに、両の乳房をわしづかみにされた。

「こうやって、やんわりこねたり……」

「くふっ、う! う……やああ……やめて、っ!」

触手に搾られた状態の乳房の周辺を、円を描くよ



うにして真白の指がじわり、じわりと登ってくる。
「ちょんちょんって先っぽついたりすると……」

——びくんっ！ びく、びくっ……！

もどかしさを助長するじれったい動きに翻弄され、また腰がくねり動いて、背後の少女の腹部に押し当たる。動きに気づいた彼女に、冷たい——それでいて妙に火照った目で見下されてしまった。

(な、んで……ゾクゾク、するの……?)

蔑まれた。馬鹿にされているのに。胸からせり上がってくる熱が頭の芯に飛び火したように、ぼうっともやがかった状態の思考が悦びに震える。

——混乱、しているのだ。だから。そう結論つけようとする間にも、少女の指は新たな快感を植えつけるべく蠢き続け。

——ぎゅう！

「痛っ！」

強く下乳をつまんだかと思えば。

「やつ、あ、ああ、ふっ……」

再びやんわりとした手つきに転じて、痛みを甘みの中に溶かし込む。

「くふふ。女同士。弱いところは丸わかりだぞ？」

れる、と触手の隙間から覗いた乳肌をなめしゃぶられた。

「あつちのほどには、腹に肉はついてないか」

同時に空いた手のひらで腹部をなで擦られ、見比べ、確かめるように、服の上から腹をつねられる。

「あぐ！……つくう、ううっ」

痛みはたいしたことがない。けれど直後に与えられるやんわりとした乳房への愛撫。痛みの後に必ず加わる甘い刺激が、抗いようのない快感となって胸の芯にまで響いてきてしまう。

(がっ……我慢っ！ しないと、うう……！)

懸命に言い聞かせ、唇を血がにじむほど噛まねば耐え切れぬほど、切なく、心が惹きつけられる。

「あふ……うう。……やつ?! おなかは嫌っ……」
珠優の制服内部で這いずり蠢く触手が、あるじの命にかけていた親友は。ぼつちやり体型を常々気にかけていた親友は。

「も、許しっ……つや、あああああつ！ ふあ、あうううつ、やアア……っ！」

泣き喚きながら乳首をつねられ、吸われるたび蕩けた喘ぎを頻発する。その際肩が震え、ブラジャーという覆いを失いこぼれた大きすぎる胸肉が、縦にブルブル。巻きついたままの触手ごと揺らぐ。

(ダメ、だよ。そんな顔、したら……)

見たくない。なのに、顔を背ければその隙により酷い目に彼女が見舞われそうで、視線を外すこともできなかつた。

「さて、どっちがイクのが先か? 競争するか」

「つ、ア……イク……?」

聞いたことのない単語に疑問を覚え、また鼻で笑われた。甘苦しいしびれに全身侵されて、頭の中がぼやけている。

——ぢゅぢゅうっ……!!

「ひぐっ! か、噛んじややつ……!」

歯なんてないはず——なのに確かに鋭い犬歯を突き立てられたらしい刺激が、ズクリと甘く胸の先端を貫いていった。

背後からしつかりと抱き締められた身体は、暴れたくても暴れられない。ただ、悶え、喘ぎ、足掻くことでのみ、抵抗の意思を示すことができた。

(痛いのにつ、嫌……なのにつ、なんでっ……!?)

腰がうずきながら煙撃する。真白と触手の支えがなければ即座に前のめりに崩れ落ちるであろう膝が、壊れたようにカタカタ震えていた。

「それじゃそろそろ、こつちも……」

「だっ……」

ダメ——。そう、静止の意思を紡ぐ暇すら与えら

れず。

くちゅうっ……。

「んやつあああはっ……あやあああつ！」

先ほど、膝が震えるのに合わせて感じた股根の心地から、薄々気づかされてはいた。けれど、決して認めたくはなかつた事実を、晒されてしまう。

「あはははははははっ! もう、ショーツもぐつちよりお漏らししたみたいになつてるぞ！」

「う、ううつ。い、言わないでよおつ……」

わざと羞恥を煽る言葉を選んで、反応を愉しんでいるのだ。わかつていても、恥ずかしい——生理的なその感情は、押し殺せるものではない。

「これなら……すぐか?」

ふむ、と考え込むそぶりを見せた真白が、ニヤリと口端を歪め邪悪な笑みを差し浮かべる。

「な、なにつ……? あ、アやあつ……掻き混ぜ、ちや、あつ! つは、やつ、ああつくううう！」

何が、すぐなのか。尋ねることさえ許さないというように、少女の細指がミニスカート奥のもじつく股根を、下着の上からなで擦り始めた。

そつと触られているだけのはず、なのに——胸の奥に果食う衝撃が乗り移つたみたいに、腰の奥までもがジンジンと、甘く濃んだ衝動に浸つてゆく。

「ふあ! あつ、あああああ! やつ、あ、も、お、やあ、だつ、つぶ、あア、ツアア！」

変になる。そう連呼しながら、頭上では珠優がおとがいを反らし背を震わせていた。

すでに制服はほとんど端切れ状態でぬめり気により肌にあらずかに張りついているだけ。吊るされた白く透けるような美肌の九割方。顔面以外のほぼすべてを黒い異形に覆われ、犯されている。

唯一剥き出した顔の表情は、ついぞ見たことがないほどにトロリと腫瘍け、視点が定まっていな

見るからに、正常な状態ではない。

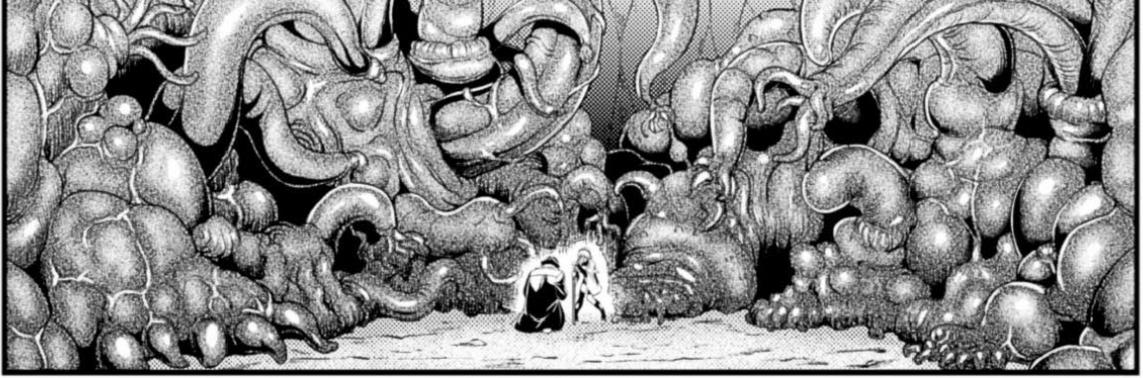


神とアルティナ様に
捧げましょう

この命

かんぬきのみこ
後編
閃の巫女
なもななし
無望菜志
漫画 COMIC

怒涛の最終話!!









あああああ

!!!

アッアッ

はッ
はッ

これ...は

アッアッ

アッアッ

アッアッ

アッアッ

彗星戦姫 Comet Princess LEESHA

流星姫

やまもと さき
小説 **山本沙姫**
NOVEL

あき ない え
挿絵 **春夏冬工**
ILLUSTRATION



流麗なスーツに包まれた肌が
汚れた男達の目に晒される——!

「い、いやっ！ 来ないで……」
赤みがかった満月が不気味に輝く空の下で、か弱い美女が嗚咽を上げる。歩道に尻餅をつき、ズリズリと後ずさりしながら。

「でへへ、そんな顔するなよ〜ほら〜」
痩せ型で、顔色の悪い奇妙な男が彼女に迫る。その体躯に不釣り合いな股間の巨根を晒し、大きく波打たせて。

（もう、だめ……誰か……助けて……）
絶体絶命の危機に全身が鳥肌立ち、ガクガクと小刻みに震わせる哀れな乙女は、思わず目を閉ざして奇跡を願う。「そこまでよっ！」

その時、二人の間を疾風が吹きぬける。カナリアの囀りのように可愛らしく、それでいて凛々しい叫び声と共に。シュンッ！ スタッ！

はるか天空からサファイヤブルーのポニーテールを靡かせて、一人の少女が舞い降りた。

「なっ、何だ、お前は！」
行く手を阻む乱入者に向かって、暴漢は眉間に皺を寄せた厭（いと）い表情で凄んでみせる。

「黙りなさいっ！」
だが彼女は怯まず、ルビーのような真紅の目をキッと吊り上げて睨み返す。桜色の薄い唇を開いて放った、怒りの雷鳴が静まり返った夜の空気をビリビリと震わせる。

しかし声の主は、氣迫に満ちた態度に似合わず実に可憐だ。
頬から顎にかけての緩やかな曲線を

描くラインと、低めの可愛らしい鼻が醸し出す、初々しいあどけなさ。

さらに、耳に付けたインカムから伸びる、ブレード状の白いアンテナがウサギの耳を彷彿とさせて、容姿の可愛らしさを一層引き立たせていた。

「うぬう……」
威嚇したつもりが逆に度肝を抜かれ、たじろぐ暴漢の前で彼女は背筋を伸ばし、白いブーツでキュッと引き締められた長い足を軽く開いた力強いポーズを取る。そして手にした、中世の騎士の剣を彷彿とさせるステッキを、ピシッと彼の目の前に差し向けた。

派手な腕の動きに釣られた、九〇センチ近くあるロケット型に美しく形の整った乳房を、大きく波打たせて。

「聞けいっ！ 邪な欲望に操られる愚か者!!」
怯んだ敵に反撃の隙を与えないよう、救いの使者はさらに追い討ちをかける。身の丈一七〇センチ近い体躯に纏っているのは、胸元が大きく開いたレオタード型のオレンジ色のスーツ。

アンダーバスのラインやウエストの括れ、さらに縦割れの小さな臍まで浮き出るほど肉体に密着し、ボディペインティングのよう。

程よく引き締まった洋梨型のヒップまわりに、ぐるりと巻きついたフリル状のスカートが、セクシーな衣装に可憐な少女らしさという華を添える。

「不埒な横暴は、この彗星戦姫リーシャが許さない！」

「リーシャ……お、お前が噂の……」
あらわれたのは、一年前に悪しき宇宙人を追って地球にやってきた戦士。

その勇ましい戦いぶりと可愛らしさが、ネットやマスコミで多々取り上げられる時の人である。

「あら、知っているなら、おとなしく帰った方が身のためじゃなくて？」
怯える暴漢に余裕の笑みを見せながら、彼女はからかうように問いかけた。

「んっ、ぐ……ぐう〜生意気な奴め、邪魔するならお前もやっちまうぜ〜」
しかし小娘にバカにされたのが気に食わず、男は怒りと共に肉欲の矛先を変えて襲いかかる。

突き出した両手の、厭らしくくねらせた指が胸元まで伸びてきた。
「たあっ！」
だが指先すら触れさせず、二つ名の通り彗星並みのスピードで素早く背後へ回り込み、背中にステッキを叩き込む。

「ブライトショックッ！」
パチッ！ バババパチッ……。
掛け声と共に爆竹のような破裂音が響き、青白い稲妻が暴漢の全身を覆いつくす。

「あぎぐぐぐうっ!!!」
強烈な電撃を食らった悪党は、固い路面に仰向けでバツタリと倒れ込んだ。

「おあいにくさま。操り人形にやられるほどヤワじゃないわ。しばらく反省する事ね」
萎れたペニスを晒しながら横たわる

男を見下ろして呟くと、傍らで座り込む美女に微笑みかける。

「ケガはない？ 今のうちに逃げて」
「あっ、ありがとう、ごさいます……」
優しい言葉に恐怖心が少し解れた彼女は、おどおどした口調で礼を言う。ゆつくり立ち上がり、一礼してから足早に立ち去った。

「さて、と……」
被害者が無事に逃げたのを確認すると、リーシャはキョロキョロと辺りを見回す。真の敵を探して。

「……！ そこにいるんでしょ!!! 出てきなさいっ！」
やがて邪悪な気配を感じ取った彼女は、ステッキを差し向けた街路樹を言葉の矢で貫く。

「まーったく、お仕事してるといつも邪魔しに来るな。お前は……」
すると大木の後ろから、奇怪な大男がズイッと歩み出てきた。背中に担いだ、後頭部とチューブで繋がった円筒形のタンクを、右手の親指でコンコンと小突きながら。

スキンヘッドにゴーグル、そして黒いビキニパンツ一丁という、競泳選手のような身なりのマッチョマン。

しかも全身メタリックブラウンという、地球人離れした肌色をした彼こそ、はるか銀河の彼方から彗星戦姫が追ってきた宿敵。

「宇宙商人デスゾロー！ 今日こそお前を倒す！ 覚悟しなさいっ!!!」
妙に人をおちよくった態度であらわ

れた悪党に鋭い口調で言い放つと、リーシャは武器のステッキを真横に構えて斬りかかる。

「その台詞、聞き飽きたわあっ！」

すかさず禿男は右の握り拳を突き出し、その先端からソフトボール大の青白い光の球体を放って応戦した。

バシユンツッ！

「食らえいっ！ 破壊光弾っ！」

「そんなもの、通用しないわっ！」

バキッ！

余裕の口ぶりで返しつつ、美貌の戦姫はまっすぐ目の前に飛んできた光弾をかまし、素早くステッキを横一文字に振った。地上から宇宙へ向けて、一つの彗星が飛んでいく。

「くうー見事なバツティングだねえ。だが、これならどうだっ！」

夜空を見上げて自慢の光弾を見送ると、デスゾローは左右の拳を交互に素早く繰り出し、破壊光弾を次々に打ち出してきた。

「無駄無駄無駄無駄だあっ！！」

バシツ、バババババシツ!!!

連続攻撃に焦りもせず、リーシャは縦横無尽にステッキを振り回し、光の玉を次々と夜空へと打ち上げていく。「あらあら、今日は随分と景気がいいわね？」

筋肉の巨漢が発射する光弾は、背中のタンクに貯められたエネルギーを一旦体内に取り込み凝縮したもの。それは彼にとつて、財産を捨てるのに等しい。

「なーに、今日の下僕はかなり溜まっていたおかげで、在庫はたっぷりあるのだよ」

余裕の憎まれ口を叩くリーシャに、負けじとデスゾローも偉そうな口調で切り返す。彼が持つ、他人の欲望を肌で吸収して破壊エネルギーに変える能力は、とりわけ男の性欲を強力なエネルギーに作り変える特性がある。

ゆえにより多くのエネルギーを得るため、性欲を滾らせた男を見つけてはその心を操り、欲望を解き放させていたのであった。

「そんなの自慢にならないわっ！」

憎々しい笑顔で威張り腐る宿敵に、勇敢な彗星戦姫は呆れ顔で挑発しつつ攻撃を撥ね除ける。

しかし内心穏やかではいられない。

（奴の懐に飛び込まないと……）

彼女が使う武器、バトルステッキにも破壊ビームを打ち出す装備はあるだが、エネルギー変換体質のデスゾローに対しては、効き目はないに等しい。ダメージを与えられるのは、打撃系の直接攻撃だけ。

しかし対する宇宙商人も、余裕のある素振りは見せかけだけではない。（しかしここまでやるとは……あれを使うしかないか……）

そろそろタンクの残量が気になる。

「おっ！ ここかー」

「すげー。俺、本物のリーシャとデスゾロー見るの、初めてだぜ」

するといつの間にか、周囲に見物人

が集まっていた。

日頃、戦いが始まるとその様子がネット上にアップされ、野次馬が来るのはよくある事。それが地球で繰り広げられる彼女の戦いに世に知らしめる原因であると共に悩みの種でもあった。周りに人がいては、戦いにくい事の上ない。

「危ないから、みんな離れて！」

つい対峙する宿敵から目をそらし、背後のギャラリイ達に呼びかける。

「今だ！ こいつを食らえいっ！」

その瞬間、デスゾローはゴーグルを外し、目から七色の光を放つ。

「えっ！ きゃあっ！」

バシユンツッ！ ババババ……

反射的に突き出したステッキに光線が当たり、握った手に軽い痺れが走る。

「……？ 何ともないじゃない？」

「ククク、それはどうかなあ」

意味不明な不意打ちに拍子抜けするリーシャに対して、デスゾローは腕組みしてふんぞり返った余裕綽々のポーズで言い放つ。その一瞬、攻撃がやんだのを彼女は見逃さない。

「たああああっつっ！」

ステッキを上段に構えて、油断した宿敵めがけて一気に駆け出す。そして天高く舞い上がり、頭上から縦一文字に振り下ろした。

「おっと危ない」

間一髪、バックステップでかわした筋肉の巨漢は、重そうな見た目に反した軽快な動きで、続けざまに来る攻撃

をよけ続ける。

「こっ、このおっ！ 逃げるなあっ！」

「へへーんだ、当たらないよおー」

まるで鬼ごっこを楽しむ子供のよう、無邪気に逃げ回る悪党への打ち込みは、あと一歩届かない。ブンブンと虚しい風切り音が響くばかり。

「おおーっ、いいぞいいぞー」

「もつと大きく振ってみせてー」

すると急に、下品な声援がビュビュと甲高い口笛と共に、そこかしこから湧き上がり始める。

（いったい何が……ええっ?!）

彼らの声で初めて気付いた信じ難い事態。コスチュームの一部が消失し、ツンと上向きに尖った薄桃色の乳首を頂いたバストが丸出しになっていた。

「きゃあっ!! どっ、どうして?」

咄嗟に両手で隠すものの時すでに遅く、あちこちで携帯のフラッシュが瞬いている。

彼女がその身に纏っているのは、厳密に言えば服ではない。特殊合金製のナノマシン、すなわち目に見えないほどの小さなロボットが結合した、柔軟性のある鎧であり、簡単に破れたりするような代物ではなかった。

「わらんかな? そいつは我が奥の手、ウイルスビームに侵されているのだあっ！」

不安げな表情のリーシャに向かって、デスゾローは彼女が手にしたステッキを指差しつつ自慢げに言い放つ。

バトルステッキは武器であると共に、

コンバットドレスをコントロールする重要な役割もある。その機能に異常が起されればナノマシンの結合は途切れ、煙のように消えてしまう。

「ひっ、卑怯よ！ こんなマネして……正々堂々……勝負しなさいよっ！」

星々の平和を守る戦士とはいえ、一皮剥けばうら若き乙女。大勢の男達の前で肌を晒すのが恥ずかしいのは当然。左手で両胸を隠し、右手でステッキを差し向けつつ挑発しても、次はどこが消えるか気がでない。自然と太腿をビタリと閉ざし、だんだん腰が引けていく。

その間も、ドレスの消失は止まらない。腋の下から背中に向けて、恥ずかしさで朱に染まった柔肌が晒された。

「おっ、また消えたぞ」

「そのうち、全部なくなんじゃね？」

見物人達の心ない野次が、耳の奥をねちつこく撫で回す。

（こつちの気も知らないで……）

「さーて、お喋りはこれぐらいにして、バトル再開といこうかいっ！」

恥辱に唇を噛み締め、身を固める彗星戦姫に追い討ちをかけるべく、宇宙

闇商人は嬉々としてエネルギー光弾を打ち出し始めた。

パシユンツッ！ ババババツッ！

「えっ！ やあっ！」

慌ててバトルステッキを振り回し応戦するものの、身体を隠しながらの体勢では防戦するのがやっと。とても攻め込む余裕はない。

（このままじゃ、勝てない。でも……）
すぐにでも逃げ出したい思いを押し殺し、少女は悪しき巨漢に立ち向かう。

なぜなら、今奴を逃せば手にした大量のエネルギーが取引相手の宇宙テロリストに渡り、どこかの星で誰かが不幸な目に遭わされるから。

「今度はお臍が出たぞ！」

「あのまま下まで消えれば……」

しかし自分達に被害がないせいとか、周囲の地球人達は徐々に脱がされていく彼女を囂気に見物するばかり。

（何言ってるのよ!!）

不愉快な反応を見せるギャラー達ではあるが、それでもリーシャは彼らを巻き添えにしないよう、懸命に光弾を打ち返す。平和に暮らす人達を、理不尽な不幸に遭わせたくないから。

だが、健気に戦う乙女をあざ笑うが如く、尻を覆うナノマシンが崩れ、お月様のようにまん丸な穴がポツカリと開いてしまった。

「いよっ！ ついにお出ましかー」

「可愛いねー、桃みたい……」

「えっ！ やああっ！」

咄嗟に路面にペタンと尻餅をつき、剥き出した双曲の谷間を隠す。

「いやー、とうとうお尻丸出しかい？

そんなんでもまだ戦う気かねえ？」

今にも泣き出しそうな彗星戦姫の前に、邪悪な筋肉男は攻撃の手を止め余裕の高笑い。

「とっ、当然よ！ んっ……あ……」

しかし憎き男の挑発に負けまいと、

ステッキを杖にしてリーシャはヨロヨロと立ち上がる。

「さあっ！ 勝負はこれか……ら……」
消えかけた闘志を呼び起こし、再び立ち向かおうとした彼女は出鼻を挫かれる。スカートの端から消え、臍まわりの穴も広がりはじめた。

（い、嫌……このままじゃ……）

神聖なる乙女の秘所が晒される瞬間が、刻々と迫る。

「何をしておるのだ？ ステッキの機能が生きているうちに、奴に接近戦を仕掛けぬか」

その時、高飛車な口調の甲高い声が、インカムから耳に響いてきた。

「わかっているわっ！ でも、どうすれば……」

非常事態にもかかわらず神経を逆撫でするような物言いに、リーシャは少々キレ気味に言い返す。しかし恥ずかしさと不安に、言葉の端々が震える。

「奴も男だ、隙なんてすぐできるぞよ」

だが、通信相手は彼女の態度を気にする様子も見せず何か含みのある口ぶりで告げると、一方的に無線を切った。

（奴も男って……!）

最後の言葉に、何かが閃く。

「こうなったら、もうヤケよっ！」

顔を真っ赤にして金切り声を上げる

と、ステッキを斜に構えてデスズローに殴りかかる。

「おわっ！」

いきなりの不意打ちに焦ったのか、筋肉の巨漢は光弾で応戦する暇もなく

真横へ飛んで太刀筋をかかず。またもステッキは空を斬るが、怯まずリーシャは二の太刀三の太刀を打ち込む。

「やあっ！ えいっ！ たあーっ！」

ブオンツッ！ パシユウツッ！

一打ちごとに、周囲の喧騒をかき消すほどの風切り音が響く。

無論、コンバットドレスの消滅は止まっではない。攻撃のたびに左右に揺れるお尻の部分に開いた穴は、縦筋ばかりか蟻の門渡り切りまでが露出するほど広がった。

股間のデルタゾーンにまでウイルスの影響が及び、肉のクレヴァスを覆うスベースが痺の如く狭まっていく。

（あうっ！ こっ、これぐらい……）

ヴィーナスの丘がキリキリと引き絞られ、秘園の奥に鈍い痛みが走る。それでも彼女は攻撃の手を緩めない。

「きゃっ!! 危ないっ!!」

とはいえ、さすがに最後の皆だけはキツチリと守っている。スカートの捲りかければ、咄嗟に手で押さえたり。

「こっ、このおっ！ 生意気な……」

一方でデスズローは丸太のように逞しい両腕で、ステッキの乱打を払い除ける。だが、様子がおかしいのを百戦錬磨の彗星戦姫は見逃さない。

（なるほど、こいつも男だわ）

斬りかかるたびに、乳首が円を描くように揺れる柔らかな乳房。走ればはためくスカートから顔を覗かせる、張りのある太腿に、邪な男の視線は釘付け。自然と動きが鈍くなっていく。



刑事 柏木 遼子

晒された美肉

漫画
COMIC

ぱふえ



好評発売中!

単行本
墮天使たちの狂詩曲



確保!

もう逃げられ
ないわよ!
観念なさい!!



狙われる女刑事!



はいこちら
柏木

久しぶりだな
柏木 遼子
突然だが
俺と遊んで
もらおうか

誰だ?

ある場所に
爆弾を隠した

先輩!
大変です!!

署内
倉庫

お前が爆弾を
見つけ出せば
自首してやる
できなければ
…ドカンだ

命令に従えば
ヒントをやる
まずは贈って
おいた物を
つけるんだ

それから

いつも通り
白い下着が
よく似合う

でも昨日は
縞々だったか
惜しいな
昨日にした
かったぜ

ふふざけ
ないで!

金曜より
土曜…?
?

言う通りに
したわよ
早くヒントを
教えなさい

あ

あ

美味そうな乳
隠すなよお

どこかで隠れて
見ている…?
それとも
隠しカメラが

な…!!

そう急ぐな
とりあえず
外に出な

お散歩と
洒落込もうぜ

わ…

エロい下着
拝ませる

く…

あ…い



ま気にした
としても

堂々として
いれば誰も
気づかんさ



く…
見られてる

真つ昼間から
乳放り出して
歩いてる女が
刑事だなんて
思わねえよ

大丈夫…
落ち着くのよ

この程度
水着と思えば
別に…

あれ…?
あの人って

なんだよ
アレ
痴女?

おい…
うわっ
なに…?



みんな
見るぜえ
視線を感じ
てるだろ?

な…い…

おっばい
でけー♥
エロ…

AVか?
恥ずかしく
なんか…

だったら
頼んだら
やらせて
くれるかも



カラオケとか
繁華街か?

ヒントー
爆弾はガキの
集まる場所だ

公園?
□ぶりから
すると高校生も
含みそうね

わかった
わかった

ももう
いいでしょ
早くヒントを
よこしなさい



そんな...
ことないわ

クク:
焦ってる
ようだな

声が
上ずってるぜえ



なぜ
わざわざ

2F
?

向こうの
コンビニだ

おっと
そこじゃない

まあいい
それじゃあ
次の命令だ
絆創膏でも
買ってこい



それとも注目
されて興奮
してんのか?

そっすう趣味の
ヤツ結構いる
らしいからな



ま——いらっしやい



やはり——
隠しカメラを
仕掛けて
いたか——

あの店で都合が
悪いのなら



ヤツは尾行
してはいない
どこかで
映像を見ている



くそ……
見るなっ
スクヘどもめ



視線が
手になって



262円に
なります

あ！
財布……

ククク……
ど……にかして
売ってもらっ
しかねえな

あなた……
最初から



触られてる
みたいだわ



私のオナニー
見せあげる♥



躊躇していると
ドカンだぞ

ねねえ♥
お財布忘れ
ちゃったの

あとで払う
から今は…



おやおや
交渉成立
だな

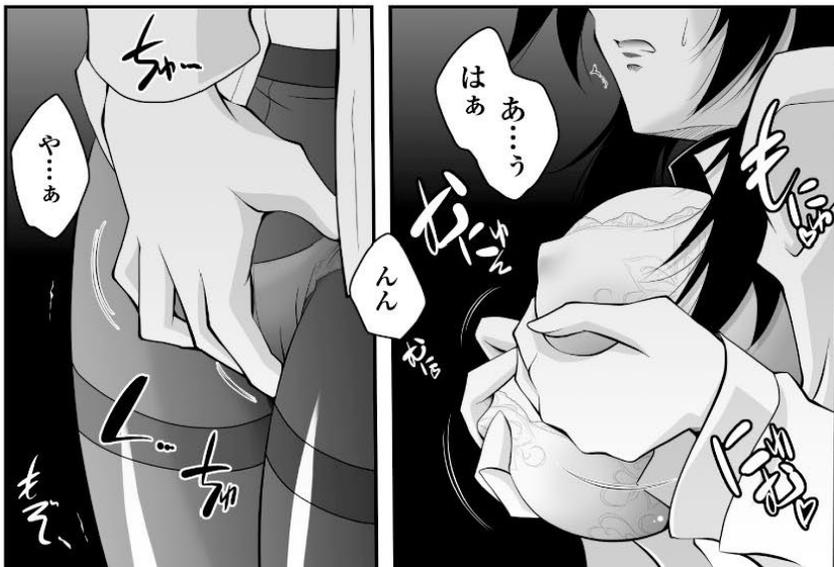
ママジ
ですか？
そりやウチは
構わないスよ

な…



ババカ！
何言うのよ

よくできた
音声合成だろ



はあ
あ…う

んん

や…あ



さの
あ…

ほう



感じ…すき
ちやう…う

緊張してる
せい…かしら



えー
今さらそれは
無いっスよ

も…いい
でしょ？



ひ…
♡



く…ん
そんな近くで
見ないで…よ

なあコレって
AVの撮影？

それとも
お姉さん
誰かの奴隷
ってヤツ？

信じられない
こんな所で
シてるなんて

手伝ってやる
から最後まで
見せてよ！

う
うんご
気が散るから
黙ってて…

将軍王女
ディーナ
痴辱の戦争裁判

小説 / **Kyphosus**
NOVEL

挿絵 / **トモセシュンサク**
ILLUSTRATION

気高い女軍人がプライドと衣服を剥かれ、
大衆の前で恥辱を晒す!!



硝煙と赤錆の臭いが染み付いた戦場の一角に、野戦服姿の男達に取り囲まれるようにして彼女は立っていた。男達とは系統の違う軍服の彼女は、帽子やベルトの紋章から、別の国家に属していることが分かる。

衣装そのものも、男達の実用本意の戦闘服とは違い、彼女の軍服は良質な生地を用いた高級将校用だ。膝まであるコートの下からはブラウスとミニスカートの覗き、朱色のネクタイが色彩を引き締めている。

異国の軍隊に取り囲まれているにもかかわらず、彼女は堂々と胸を張り、不動の体勢で立っていた。長い髪が僅かに風になびき、軍服の上からでも分かる見事な胸は規則正しく落ち着いて上下している。青みがかった高貴な色を宿した瞳は、男達の蔑みと悪意、好色の混じり合った視線にも構わず、ただ正面を見据えていた。

一方、男達は、半分は彼女の背中側に少し離れて群がり、残りも左右に並ぶ。正面には、軍服ではなく仕立ての良い背広姿の瘦せた男が一人。前後には映画撮影用のカメラが回っている。それは、戦場ででつち上げられた即席の裁判所に見えた。

「それではこれより被告、『連合王国』ディーナ將軍に対する、『帝国』軍事法廷を開廷する。まず、告発人」

最初に口を開いたのは背広の男だった。劇を演じるかのように、大きな仕草とゆっくりとした口調だ。

背広の男の嘲るような視線に射られ、中央に立つ美女、ディーナ將軍はこれから受けるであろう恥辱を思っただけに身体を強張らせる。

「くっ……こんな茶番劇で、この私が、王国の王女が貶められるなんて……！でも、耐えななきゃ……私さえ、この悪趣味な意趣返しを我慢すれば……」

彼女は軍服の下、均整のとれた見事な肢体を少しでも隠そうとするかのように、身を竦ませた。そんな彼女をよそに、カメラはカラカラと回り、裁判劇は進行していく。

「はい、宣伝相閣下……じゃない、裁判長。被告ディーナ將軍は戦闘中、あのエロい身体で我々帝国軍を誘惑しまくりました……これはとんでもない犯罪ですよ！ 自分は興奮しすぎた隊長殿に何度も掘られそうに……ううっ」

彼女の右手に立った下士官の一人が、馬鹿げた告発をした。三文芝居以下のその内容はしかし、主役を強制されたディーナの屈辱感をかえって掻き立てる。どんなに侮辱的な脚本であっても、彼女に降板は許されないのだ。

「では弁護人。意見はあるかね」
背広姿の二世裁判長が、今度は左手の男達に呼びかける。

「裁判長。告発人が襲われたのは被告の責任ではなく、彼の上司がただの同性愛者なせいではないでしょうか？」

弁護役の眼鏡の士官が、妙に真面目くさった態度で言うのと、件の上司らしき男が怒りの声を上げた。

「あ?! 貴様つ、ふざけんなっ!」
「ですので、ここは証拠物件を隊長に見せて、エレクトロするかどうかを確認するべきと思います」

弁護人は表情を崩さぬまま、悪意の籠った仕草でディーナの胸元を指す。裁判長はそれに頷き。

「ふむ。なるほど。では被告、ディーナ殿下は証拠を提出したまえ」
「な、何でしょうか、証拠つて……」

カメラと視線が合ってディーナはおぞましい予感を覚えた。それは単なる記録用カメラではないのだ。裁判長役の男、帝国宣伝相がこんな茶番に出演しているのは、国民を煽動するための映画を撮るためである。今から彼女の受ける屈辱は、遠からず帝国じゅうで上映される予定になっている筈だ。

「一体……私は何をさせられるの?」
不安を固唾とともに呑み込んだ彼女に、裁判長がおもむろに命じる。
「胸と腰を証拠として開示したまえ、殿下。軍服の前を開け、下着を取るように。下はスカートを外す。ショーツはまだいい」

「なっ……そんな馬鹿なっ……いい、いくら虜囚の身とはいえ、連合王国王女のこの私が、人前でそんな辱めつ……断じて、こんな茶番は……っ!」

未だ男を知らない身体を獣のような兵士達に見せると命じられて、ディーナは愕然とし、それから強く一歩踏み出して背広の男に拒絶を叫んだ。

「お、非協力的態度だぞ、この戦犯」

「おっばい、早くしろおっばい!」
下品に野次る男達を、ディーナは睨みつけてたじろがせる。だが、強気はそこまでだった。宣伝相が割り込む。

「静粛に! 殿下、これは本法廷の決定である。それとも、ご自分の部下まで戦争裁判に掛けたいのかね?」

「……っ!」
逆らえぬ理由のある敗将は、裁判長の冷酷な指摘に息を呑み込んだ。

「くっ……わ……分かりました……」
掠れ声を喉から絞り出すと、白手袋の指を軍服の前におさおすとあてがった。周囲には百名を下らない裁判員気取りの将兵達。カメラも乗り出して、手元を覗き込んできている。

「くっ……こ、こんな馬鹿馬鹿しい茶番に、この私が……辱められて、笑われるなんて……部下のためでさえなければ、奴と相討ちですでも……っ」

震える指でボタンを一つ外すたびに、男達の視線が肌に突き刺さるような気がした。そしてシャツの前を開き、ブラが見えた時点で手が止まる。
頬を真っ赤に染め、目の前をきつく睨み、ぎりぎりと歯ぎしりする。胸の中で憤りと羞恥心が高ぶり、命令と拮抗しているのだ。そんな彼女に、宣伝相は面白そうに目を細めて論じた。

「ディーナ殿。いいかね、これは必要な犠牲だよ。憎つき連合王国の將軍王女様が、兵士達の前で裸身を晒し、盛りのついた雌犬のごとく恥辱に塗れる……こうでなければ、我が国民の怒

りを慰める役には立つまい？ 貴方の部下達の処刑ショーの代わりに、ね」

今大戦で、『連合王国』は強力なカリスマ指導者を得た『帝国』に圧倒されていた。前の戦争で連合王国が帝国から戦利した領土のほとんどは占領され、通商は壊滅状態に陥っていた。

連合王国の将軍である王女デイナーも、善戦空しく投降を余儀なくされる。そして、捕虜となった彼女は部下達とは別に、一人呼び出されていた。

彼女を待ち受けていたのは、帝国の舌、総統の右腕と言われる男、宣伝相だった。瘦身を仕立ての良いスーツに包んだ彼の表情はにこやかで、口調は穏やかだが、目は氷のように冷たい。

「デイナー殿。残念ながら、貴方の部下は全員戦犯として処刑せざるを得ない。無論、貴方もだ」

彼はいきなり理不尽を言い放つ。「なっ……そんな馬鹿な……っ！いえ、私は構いません……ですが、部下達は……部下達はどんな戦争犯罪を犯したのですか？」

デイナーは思わず詰め寄ろうとして、護衛の兵士に取り押さえられた。だが宣伝相は微塵も動ぜず続ける。

「……犯したとも。先代女王、つまり貴方のお祖母様が、ね。先の大戦で貴方が我が国に押しつけた、莫大な賠償金、経済封鎖……塗炭の苦しみを味わってきた国民は恨み骨髄ゆえ、ここで捕虜に何もしなければ、国中で暴

動が起きてしまう」

「ぐっ……そんなっ……何とか、何とかできませんか……私は……どんな死に方でも構いません。だから……」

冷酷な政治決定を前に、デイナーは震える視線で宣伝相を見据えて叫び、せめて、自分の犠牲で部下達の命を安堵できるなら、と。すると。

「ほう。殿下にそこまで覚悟がおありなら、話は別だ。実を言えば、他にも国民の憤懣を晴らして、貴方の部下を助ける方法はない訳ではないのだ」

「ほ、本当ですか？ 宣伝相殿」
一縷の希望を見いだしたと思ひ、身を乗り出す王女。だが男は、獲物を罠に掛けた猟師のような顔で笑った。

「本当だとも、ご期待あれ。これこそ私の宣伝相としての腕の見せ所だ。ま、デイナー殿下にも一肌脱いでもらうことになるが、ね」

「さて、司法取引といこう。部下と引き換えに、裁判を止めますか？」
「ううっ……そんな取引……くっ……分かりました……続け……ますっ」

裁判長の言葉に拮抗を崩された王女は、脱衣を再開した。美しい顔を怒りに歪め、歯を食いしばる。裸体を人前に晒すだけでなく、誇りを顧みようともしないこの男に、馬鹿げた茶番で愚弄される恥辱が堪え難かった。

視界を歪ませる涙を必死で堪えつつ、スカートを外し、下半身を隠すパンスととショーツをさらけ出す。

（駄目、駄目よ……耐えなければ……私さえ耐えれば……みんなが……）

そして今度は、指をブラのホックにかけ、躊躇い、震え。

一思いに外した。解放された乳房が勢い良く飛び出し、肌色のプリンのように震えた。汗がきらりと光る。

（あぁっ……わ、私、とうとう……）
吐息とともに、痛烈な羞恥と疼くような何かが彼女の体内を駆け抜けた。

「ほおお、これがあのデイナー將軍の証拠……見事なシロモノだな」
「じつにけしからんおっぱいだ」

帝国將校達の下卑たざわめきが耳に入り、デイナーの身体は制御できないほどがくがくと震えた。汗が吹き出し、心臓が破裂しそうに高鳴る。

（見られているっ……私、身体を……男達に見られて……こんな、屈辱っ）
突き刺さる無数の視線に、肌、乳房が、至る所でじりじりと疼くようだった。胸奥に羞恥心の塊が膨れ上がり、切なく悶える。彼女は思わず手で隠しそうになるのを必死で堪えた。

そこに、裁判長が更に指示を下す。「デイナー殿、後ろの陪審員達にも見えるよう、そのまま一周したまえ。凱旋パレードのように、ゆっくりとな」

「ううっ……はぁっ、はぁっ……」
居並ぶ男達の前を、乳房とショーツを晒したまま歩かされたデイナーの胸は大きく上下し、羞恥と憤りの汗に濡

れて肌は光っている。

だが感情とは裏腹に、過剰興奮により、彼女は身体の制御が効かなくなっていた。ひとまずの終わりに膝の力が抜け、思わずへたり込んでしまう。

「ふむ、まずはそんなところか。それで隊長、どうかね証拠物件は？」
「はい、裁判長殿、もうビンビンであります。ご覧になりますか？」

呼ばれた隊長は向き直り、やおら己のズボンの前をまさぐった。
「やめたまえ、隊長。私はそんなモノを見る趣味はない」

眉を顰めた裁判長に弁護人が言う。「裁判長、殿下にご確認頂いては？」
不意に名前を呼ばれ、囚われの將軍王女は悪寒を覚えた。

「なるほど、名案だ。ではデイナー殿、隊長の男性器がどうなっているか確認し、報告してくれたまえ」

「え、ええっ……ひっ!!」
座り込んだデイナーの前に、大柄な隊長が立ち塞がる。無精髭の浅黒い顔に卑しい笑いを浮かべ、やおら腰を突き出してきた。汚れたズボンの前は、奇妙に盛り上がっている。

「ぐは、ははっ、それじゃ殿下、俺のがどうなっているか、じゅくりとご確認をお願いしますよ……よっつと」

じじゅりっ……ぶるんっ！
隊長がファスナーを下げると、まるでプービートルアップかのように、赤黒い何かが勢い良く飛び出して来た。「……ひ、ひいっ！ これ、これっ

ふははは！
愚かな人間共め…
俺達ノイズ種の音を
理解出来んとは…

ふふふ…
この素晴らしい音を
理解するまで
聞かせ…

そこまでよ！
今日も悪さしに来た
アンタ達！

正義の
アイドルヒロイン
シエル

魔法の
歌姫登場！！

おまじないを唱えてみるわー

シエルのパートナー
ミール

アイドルデュオ
歌姫二重奏
シエル・ミール
~墮落のミュージック~

そんな壊れた音ばかり
垂れ流してー!!!
アタシ達 歌姫二重奏
「シエル・ミール」が
許さんーッ!!

漫画 夢乃狸 COMIC

みんなっ!!
急ぎなさい!!

シエル
ミール

ちッ
邪魔が入ったか…
アブホーラ様に
至急連絡だ…

は…

待てえッ!!

それは
させないッ!!

ズン
ズン
ズン

…ミツ
ミールツ!!

淫魔
アブホーラ

ひ…
卑怯な…ッ!

ああん?
今のアンタは
そんな事言える
立場かしら?

ごめんシエル…
いきなり後ろから
不意打ち受けちゃって…

フフフ…
油断していたわね
シエル・ミール!

さて
どうしようかねえ

この娘を無傷で
返してほしくば…

私の代わりに
アンタに人間の男の
チ●ポ汁を集めて
もらおうかしらねえ…

アレは私の美貌を
保つのに必要不可欠
なんだよねえ

はッ?
はあッ?

あゝら…
いいのよ?
別にやんなくても

その場合この娘は
私の使い魔に
孕まされちゃう結果に
なるんだけどねえ

私達は二人で初めて
力を発揮できる二重奏…
大切なミールを
失うわけには…

く…
仕方ない…
どうすれば
ミールを…!

なあに…
簡単よ

アンタには
ソロでライブを
してもらおうわ…

そ…それだけ…?
そんな…

ただし
いつもと
違う条件を
ひとつだけ…

パチッ

なッ!

ふ…服が…
短くなつたッ!?

ちよ…

ちよっと…
これで人前に立つ
なんて絶対無理…

アウッ

ハンツ…
アンタ何も聞いて
なかったの…?

言ったでしょ?
アンタは私の為に
人間から精液を搾取
してもらうって…

ちようどアンソコが
よさそうね…

ほら
行くのよ…
シエル…

そ…も…
イキナリ…ッ?

…くう…
仕方ないわ…
こんな事でも
ミールの為…

すぐに
終わらせて
やるんだから…!!

んーッ!
けどやっぱ
恥ずかしいーッ!!

ははあーい!
みんなあーッ
ちゅうもーつく!!

まあ
続けるしか…

えーッ!
ななんかパンツ
なくなってるじゃんっ!!

じ実は今晚のライブに
先駆けてシエルが単独で
スペシャルライブを
やることになりました！

どどう
したんだ?

今日の
シエルちゃんの
衣装きわどくね?

か風
ふかねえかな…

やだあ：
みんな肌超見てる：
ほんとは恥ずかしくて
火噴きそう：

聞こえるシエル？
やっぱりチラ見せ
だけじゃ射精まで
到達しないわねえ

アブホーラからの
通信…ッ



もう少し露出して
もらおうかしらねえ
シエル…脱衣して
もらおうかい

ヤバ…
千〇ホモン…
超エロヤキ…
シエルたん…

出来るわよねエ？

という事で
…今日はなんか…
皆の視線が熱いから
いっぱいサービス
しちやおうかなあ…

あは…
あはは…



く…
くっそお…ッ！
おほえてろよ…ッ！！

や…やば…
なにこの獣みたいな
熱いまなこ…

かしこいねえ…
じゃとつとと楽器
演奏しなさい…

あああーっ…
もう超恥ずかしい…

僕らの憧れの
アイドルおっぱいは
綺麗な乳首してたんだ…

しっ…シエルたんは
うっすらまん毛が
生えてるんだね…

うおおお…
シエルちゃんのお
ま■マラインツッ!



うう…すっく
いやらしい目で見てるよ…
おっぱいとかがアソコとか
じっと見つめちゃってるし…



ええええッ!?
おちん…ち…?

やだやだあ…
やめてよ…
そんなエッチな事したら
力ぬけちゃうよ…

ほ…本当に
アタシの体見て興奮
しちゃってるワケ…?

その楽器が放つ音色を
聴いた者が性的興奮を
抑えられなくなる様に
私が魔性のスパイスを
しこんでおいたのよ

そうよ…でも
欲望のスパイスを
入れたのはアナタ…

それで自我を保てず
皆次々と欲望を解放
していつてるのさ…!!

シエルたん
シエルたん!!

あッ…

ち…
近くで…

可愛いよ!
おっぱいも
おま…こも全部!!

やっ…♡

シエルちゃんの
赤らめた顔…
僕のオカスだ…
うおおおッ!!

換身の騎士

アルベルト

淫靡な魔女と入れ替わった肉体

第二話 恥辱の女身

かりのけい
小説 狩野景

みどりぎむら
挿絵 緑木邑



絶え間ない女としての肉欲に
抗う騎士、アルベルト

登場人物紹介



アルベルト・メリン

ネオン王国白鷺騎士団に所属する騎士だったが、魔法の策謀により身体を入れ替えられてしまう。



ナスタロヴィカ

他人の肉体に乗換えてゆくことで長い年月を生きてきた魔法。享楽的で飽きっぽい性格。

トバイアス

ネオン王国白鷺騎士団に所属する、アルベルトの同僚の騎士。

前号までのあらすじ

アルベルトは苦戦の末に人々に害をなす魔法・ナスタロヴィカを捕らえるが、不意を突かれて身体を入れ替えられてしまう。感じすぎた豊富な女性に戸惑う彼はそのまま自分の身体に犯されてしまい、魔法には逃げられてしまう。そして、そこに現れた同僚のトバイアスに弁解するのだが信じてもらえず、そのまま捕らえられてしまうのだった。

「おいっ、起きろ！」

「あぐっ!! なにを、する……ッ」

いつの間にか疲れ果てて眠ってしまったらしい。いきなり頭を蹴飛ばされて目が覚めた。魔法の根城である洞窟の入り口付近に設けられた陣営に、野晒しで拘束されている。元の身体ならばこの程度の野宿などどうということはないが、いまの肉体には硬い地面の寝床は過酷だったようだ。節々の痛みには硬き身を起こすと、手足にはまった魔封じの枷から頑丈な杭へ伸びる太鎖がジャランと鳴った。

「そうか、私は魔法と身体を換えられ、軍に捕らえられて……ッ」

溜め息を吐く。その声が男の物ではない甲高きで甘く切なげな響きを孕んでいた。俯き見ると騎士の鍛え上げられた胸板ではなく、肉感的な膨らみが二つ押し合う様が目に入る。扇情的な鏡の胸当てというよりは乳当てと称するのが相応しいカップに収まりきらず、僅かな身じろぎにも揺れ弾む。

（こんな、物が……。私の胸に……ッ）

男であるのに、王国の騎士であるのに。男の劣情を刺激する乳房を持つ身体になってしまった。

束縛された両手で横座りに上体を支えると、細く

括れた腰が意図もせぬのに、くねつと蠱惑の曲線を描いていた。しなやかに長い両脚を崩して、むつちりと肉付きを増した尻尻を地面にべったりつけると、舐め回すような兵士の眼差しが、しどけなく開帳された股間で止まる。

つい昨日までは男性としての証であるペニスと睾丸があつた箇所。通常取り立てて意識することもなく、座するときも力強く両脚を開いていたそこが、いまはもつこりとした質感溢れる膨らみもなく、妙に淫靡さを醸し出す曲線に彩られた、つるりとなだらかな丘に変わっている。

腰鏡からの垂れ布は捲れ返り、鼠蹊部が見えてしまふほど面積の少ない股当てに隠されているその奥粘液に濡れた肉襲が柔らかに割れ開いた女陰の存在を感じた。男性器の漲る感触とは全く異質な、常に疼きを覚えていた心許ない感触。

申し訳程度とはいえない下着に隠されている。直接その秘部を見られているのではないのだが、兵士の眼差しはますます熱を帯び、息が荒くなってきた。

「寝てる間もそんなにたつぶりの男汁、腐れまんこの中に溜め込んでやがったのか。淫乱女めっ!!」

兵士に嘲られ、慌てて股間を確かめ見る。

「ひっ!!」

魔法に誘惑され膣内へと怒張を突き込み、たつぶりりと放つた精液。魔法に奪われた自分の身体に犯され、たつぶりと放たれた白濁。

子宮と膣をいっばいに満たしていた自分自身の牡汁が、まだかなり中に残っていたらしく、寝ている間に溢れてしまっていた。

「み、見るなああっ!!」

アルベルトは慌てて両手で垂れ布を掴むと、股間を隠しながら汚れをゴシゴシ拭いた。

（くうっ、私の、ものがあ、膣内からッ!!）
いままで経験したこともない恥ずかしさに、顔が

真っ赤に染まる。無防備に広げていた両脚を怯えたように窄めてしまう。まるで本物の女のようなだ。

折角の淫らな眺めを遮られ兵士が舌打ちするなか、

「ぬあっ!!」

股間を拭く手が強すぎたらしい。下着の中の敏感な部分をぐりんと引つ掻き、息が詰まるような熱い痺れが脳天にまで駆け上がった。

（く……あ、あ、なんだ、いま……の。あの、程度で……。こんな……、敏感、すぎる、この身体あ）

背中が激しく打ち震え、身体中から力が抜けた。すべての細胞が喜びに染め上げられ、甘く気怠い疼きに支配される。男の身体とは何もかも違う。

あまりにも感じやすく、それでいて快樂に弱すぎる。このままずっと、この身体でいなくてはならないのかと、改めて途方に暮れていると、一部始終を見ていた兵士の呆れ声が冷たく投げかけられた。

「股ぐら濡れ濡れでお目覚めかと思つたら、今度は自慰でご満悦かよ。丁度いい、お前にいい物持ってきてやつたぜ」

「ト、トバイアスっ、聞いてくれっ、私はっ!!」

兵士の言葉に不安を覚えつつ、その傍らに屈強な百人長の姿を見つけてすがり寄る。

とにかく自分がアルベルト・メリンであり、魔法ナスタロヴィカの魔法によって、肉体を入れ換えられてしまったことを信じてもらわなければならない。

「やれっ!!」

だが彼の口から放たれたのは部下へと命じる、怒りの籠もった一言だけだった。

「くあっ、や、やめ……。なにをっ!!」

杭につながれた鎖が外され、俯せに這いつくばらされる。枷をはめられた手足で四つん這いに身を起こした目前、兵士が手の中の物を見せつけてくる。

「――そ、それは!!」

アルベルトの背筋を寒気が走り抜けた。

両サイドを紐で止める方式の女性用下着。その紐にあたる部分が頑丈そうな革ベルトになっていた。

「貴様のアジトから見つけ出した物だ。どう使うかは自分が一番よく知っているだろう?」

自分は魔女じゃない。知るわけない……のだが、その形状からすぐに察しがついた。いま穿いている扇情的な下着に負けぬほど、面積が際どい股当て部分の内側。そこから異様な突起が生えている。

指三本を纏めたくらいの太さで、その表面は節くれ立ってゴツゴツしている。微妙に反り返って伸びたその先端で、傘を開きかけた茸のように膨らみを得た箇所が狂おしい雰囲気醸し出していた。

そんな物が二本前後に並び、いまにも脈打ち始めそうな生々しい形状を誇示している。

「こんな……ものを……!?!」

「ああ。穿いてもらおうか。何をそんな怯えた顔してやる? どうせいままでで自分でも試してみたことあるだろうが!」

ナスタロヴィカ本人がどうだったのかは知る由もないが、少なくとも自分はこんなもの試す気にはない。こんな異物が内側についている下着など。

「魔封じの枷を外すわけにいかねえからな。おい、お前ら手伝わてやれ!」

だが這いつくばった身体を、百人長に命じられた兵士に押さえつけられた。

「ふあっ!! な、なにをするっ! は、放せっ!」
たった二人の男に両肩を軽く押さえ込まれただけでさっぱり身動きできない。それどころか露出した脇腹を直に押さえられると、くすぐったいような心地よさを覚えて、惱ましい吐息が溢れる。

「うは、すげえ肌すべすべだ!」

「触った途端、汗ばんでしっとり粘りついてきたぜ!」
任務中は女つ気とは無縁になる。貴重な女身の触り心地に、まだ若年の歩兵が喜びの声を零した。

「それにしてもすげえ下穿きだな。でっかいケツが殆ど丸見えじゃねえか!」

その生肌を晒す尻肉に興奮の吐息を吹きかけながら、兵士が下穿きを脱がす。

「や……める! 私に触れる、な、ひあ……!」
白く濁った濃密液の糸を幾筋も引いて、ぬちゃやあと陰部にへばり付いた布地が剥がれる。

「く、こ、んなアツ。く、そ、お……っ!!」

熱く蕩けた体液に濡れた敏感粘膜部に、冷たい外気が触れて身が凍むような感触に見舞われた。

「うわっ、こいつの股ぐら、もうドロドロだぞ。こんな汁たつぷり漏らして、下着ぐちよぐちよ!」
溢れくる精液にふやけた花弁はねっとり綻び、薄紅に色づく秘裂の内側を何から何まで晒していた。

開きっぱなしの膣口が、小刻みに打ち震える。その度、穴奥から白濁がこぼこぼと垂れ零れた。

「チッ、どうしようもねえ淫乱だな。際限なく汁の量が増えてきやがる。そんなに急かさなくても挿入してやるぜっ、お望みどおりになっ!」

縦に並んで備え付けられた生々しい形状の張り型。その先細った先端が、膣穴と肛門、前後二つの入り口にずつぷりと埋まり込む。

「やめろっ! そんな、とこっ、挿入るなあっ!!」
異物が股間の内側に侵入してくるとい感覚が耐えられない。挿入を許してしまう穴が、自分の身体に生じてしまった事実がたまたまなくイヤだ。吐き気を催す嫌悪に苛まれる中、男たちの手に押し込まれる疑似陰茎は、お構いなしで女肉に埋まる。

「ぬううううっ!!」

強烈な刺激に息が詰まった。
（ああっ、挿入……るうツツ!! なぜ、こんな、簡単……にっ! いや、だあっ、くるなああっ!!）
股間の内部を犯されるおぞましさに寒気が走った。

なのに先端部を咥え込んだ前後の穴門は、耐えがたい感触を味わおうと激しく窄まる。

その締め付けを、たつぷりすぎる潤滑でほぐしながら、前後同時に硬竿がめり込んでくる。

ぬぶっ、ずぶっ、ズツ、ずぶぶっ!
「はわ、あアツ、やめっ、やめえ、りよッ!!」
以前は睾丸の付け根だった部分が無理矢理押し広げられた。灼熱の極太が身体の中へと埋まり込んでくる感覚に戦慄が、ヌルヌルの粘膜裏が竿肌に擦られた途端、甘い衝撃に脳裏を支配された。

（うわあっ、またッ、この感触うっ! なんて、こんなっ、くそ……お、イヤ、だ、あああっ!!）
異質の甘美に抗おうと歯を食いしばり、溢れくる嬌声を堰き止めた。騎士たちが見ているのに、だらしなくよがる姿など晒したくない。だが激烈な膣穴の挿入感に加えて、後ろの排泄穴にもう一本の張り型がめり込んできた。

「ぐうっ!! そんな、とこ……にっ! やめ、んむううう!!」

排泄の穴を強引に逆走してくる異物に、身体中が緊張を強いられた。太さは前穴を埋めてくる物と同じ程度なのに、何倍にも大きく感じる。

ぐちいつ、むりりイ、ぬちっ、ぬぶっ、ずぶ。
ところどころにほぐれた膣穴と違って、柔軟に欠ける直腸はガッチリと窄まり、押し広げようとする鎌型にも抵抗を示す。更には異物感への緊張が菊門を窄めて硬竿との密着を強め、いっせ受け入れてしまった方が楽なほどに異物感を高めた。

「あっ、あアツ!! 挿入っ、きてしまっ!! せんなどこっ!! ああっ、前もツツ! やめっツ」

だがどれほど窮屈に締まっても、穴が開いている限り先細った剛直には潜り込まれてしまふ。膣から溢れかえった潤滑蜜が後ろ穴にまで流れ込み、浮き立つような擦れ感だけを残して摩擦を和らげる。

「あっ、あアツ!! 挿入っ、きてしまっ!! せんなどこっ!! ああっ、前もツツ! やめっツ」
だがどれほど窮屈に締まっても、穴が開いている限り先細った剛直には潜り込まれてしまふ。膣から溢れかえった潤滑蜜が後ろ穴にまで流れ込み、浮き立つような擦れ感だけを残して摩擦を和らげる。



ぬぶつ、ずぶうつ、ずぶずぶ、ぬぶぶんっ!!

「やめッろおつ、こんなものッ。こん……な、ふぬうッ! はっ、はうッ!! あうッ、挿入れる、なッ!」

「膣穴だけでも狂おしいのに、肛門まで満たされたらどうにかなうッてしまおう。」

「すげえな、もう半分以上上唇えんじまいやがった。ほら、遠慮しねえで全部味わいなッ!!」

兵士が張り型の残りを一気に押し込んだ。

ぬぶうぶずぶんッッッ!

「へぎいっつ!! はぐうッあはあああッ!!」

子宮と腸奥がガツンと弾き上げられ、問答無用に意識が跳ね上がった。

(ひああ、なにか、ク……ルッ! だめ、だ、これ……ええ、イヤ、だ……ッ)

柔らかな濡れ肉に密着して、硬くふてぶてしい極太が存在感を誇示していた。鏃の返しのように張り出たエラが牝器官の髪を捲り返して食い込み、嫌でも快感を湧き上がらせる。懸命に堪えようと気を張り続けるが、肉体がその刺激を欲してしまう。

軽く反り返った硬くて太い異物に、股間と尻の内側をみっちり満たされている。その感触を意識させられるだけで、もう身体が戦慄して仕方ない。

トクトクと速いリズムで脈打ち続ける奥の熱壺が、ただ一度、ドクンと大きく打ち震え、辛うじて堰き止めていた甘美の塊を一气にはね上げた。

「おあああッ! んあ、あ、はああああッ!」

ガクガクと震える背筋を弓なりに反らし、巨乳を地面に押し下げながら突っ伏す。

ぶじよっ! びゅじよじゃよばああ——ッ!!

堪えようと思う暇もなく、尿口から激しい飛沫が噴き出して下半身をぐっしり濡らす。

「うへ、小便漏らしたぞ、この魔女」

「しかしたつぷりと垂れ流しやがったな。臭くてたまんねえ」

甘く饅えた匂いを立ち上らせる牝液に顔を響め、兵士が丈夫な革製の下着をきちんと穿かせる。

深々と埋まった張り型ごと尻と股間が包み込まれると、魔導の仕掛けが頑丈な革ベルトを固定し、脱げないようにしてしまった。

「ふあッ、ああ、は……んうううッ!!」

「さすが愛用品。サイズびつたりだな」

膣穴を入り口から奥までみっちり満たされている。それだけでも気が変になりそうだというのに、肛門まで硬く太い異物を挿入され、強烈な便意が押し寄せているような焦燥感が渦巻き続ける。

「この淫乱女がアルベルトを殺ったのか?」

「ああ、しかも奴を慰み者にしやがったらしいぜ」

「女も買わねえほどくそ真面目な奴だったのに。こんな下衆魔女が最初で最後の相手かよ!」

いつの間にか顔見知りの騎士たちまで集まってきた、周りを取り囲み侮蔑の眼差しを注いでくる。

「くう……う、ち、違……うッ!!」

自分がアルベルト本人であることを証明したいが、官能に思考が乱され説明できない。異物の感触に尻をくねらせ、ただ視線だけで訴えようとする。

(う、あふ、仲間があ、見てる。ああ……。こんな、ンッ! 姿、をお……ッ)

無様な四つん這いをこれ以上晒すまいと身を起すと、拉げていた乳房がぶるんと弾む。

(くう……う、女、胸え。こんな、物があ)

一斉に注がれる視線に、恥ずかしさが込み上げる。隠そうとしながらも直接触れるのをはばかり腕を前に漂わせながら、へっぴり腰の膝立ちでよろめく。

扇情的な露出も台無しな無様な仕草に失笑が起こり、情けなさが更に込み上げた。せめて喘ぎ声だけでも堪えようと唇を噛んだその途端、

「あッ、あああッ、なんだッ、これえッ!」

(なん……だ……!? なんて……え? あうふッ、んむおおおッ!! 太す、ぎい、んぐう、まだ、大き……くう……ッ! あ、ああ、無理いッ!!)

双穴内で陰茎型の硬い異物が、更に太さを増して刺激に蠢く襞壁を容赦なく押し広げていた。

膣口から子宮に至るまで過敏な刺激が限界まで拡張され、疼痛に近い快感が強烈に逆巻く。ますますその過剰感が辛くなるというのに、膣壁が一層窄まり、太さを増しゆく幹を締め付け密着度を高める。

「くあッ、あ、ああッ、抜いて、くれえッ! こんな、こんなのッ!! ふあッ、抜けッッッッ!!」

直腸内の異物感には限界を超えていた。壮絶な排泄欲に気も狂わねばかりなのに、圧倒的な質量を追い出すことが叶わない。堪えようと意識を集中しよう

にも、前後で異なる刺激が同時に襲ってくるのでこちらにも立ち向かうことができなくなる。

いきなり膣と直腸内で張り型が大きさを増した。痴態を指さし訝しむ騎士たちを、見ないでくれと懇願するような眼差しで見回す。

引きつった美貌が、一人の兵士の手元を凝視した。片手に収まる大きさの石版のような物を握っていた。表面に小さなツマミが二つ並んでいる。

その片方を男は先ほどと逆側の細い陰茎を表すアイコンが描かれた方へと回す。

すると双穴を張り裂かればかりに膨張していた極太が、あつという間に元のサイズよりも細く萎んだ。

「……ッ、ふあッ! なにを、した……? んあ」

意識が飛びそうなほどの激悦が瞬時に和らぐ。強張らせていた身体を緩め安堵の息を吐く。

(遠隔……操作ッ!! そんな、物があ!!)

「い、じるなあ、そんな……ものおッ!」

萎えた両脚を踏ん張って、忌まわしい操縦機を奪おうと手を伸ばす。そのアルベルトをちらつと一瞥

「い、じるなあ、そんな……ものおッ!」

ただで、男は手に入れた魔導具に興味を注ぐ。
二つ並ぶツマミのほう片方を、陰茎の両側で波線
が震えるアイコンが記された方へ目いっぱい回す。
——ブイイイイ~~~~ンツ!!

「ほわああああツツツ!!」

ぐもつた振動音が鳴り響いた。途端に立ち上がりかけていた脚から一瞬にして力が抜け落ち、アルベルトは再びへたり込んでしまった。
「やめろっ! やめ……ッ、やめ……ろお、くああああ~~~~~~~~ッ!!」

ヴァギナとアナルの中で、デイルドーが激しく振動しながらぐねぐねとのたうち、鋭敏極まりない粘膜壁を滅茶苦茶に掻き乱している。
「動いてるう! 私の、中ああッ!! やめろッ、だめ、だめだッ、ああ、こんなの——ッんああッ!!」

抗いようのない快感が脳裏を埋め尽くす。
「この、身体ッ、ああああッ! なんて、こんなッ!! ふああッ、感じッ、すぎるッ!!」

痛みならどれほど激しくても耐えざる自信があったが、こんなのどうにもならない。頭がぼんやり蕩けて少しでも気を緩めると何も思考できなくなる。
「すげえな!! 挿入つてるヤツが中でぐねぐね動いて掻き回してるんだろ?」

「あんなスケベな顔になっちゃって。もう俺たちのことなんか眼中ねえって様子だな」

「——!! そんな、顔に? く、ああああッ、だめだ、こんな刺激……っ、こらえきれないツツ!」
穴全体を振動で掻きざりながら、ねじ曲がる幹肌が、ごりん、と壁壁をランダムに抉る。

その都度アルベルトは、身体を仰け反らせながら尻を迫り上げてはまたガクンとへたり込む。

「くあッ、動く、なッ。こんな、邪魔な……ものっ。んえああああッ!」

弾みまくる巨乳房を大人しくさせようと自分の両

手で抱え込み、指が食い込む甘美にまた喘ぐ。

「クソ魔女のくせに、色っぽい声張り上げやがって」「どこまで淫乱なんだよ。スケベな身体持てあまして、いつもそんなので慰めてるのか?」

その様を眺めながら、男たちが次々と自分の陰茎を握り締め、小気味よく抜き始めた。

「私の、身体を見て……!? く……うッ!」

情欲の対象にされている。あたりまえだ。こんな扇情的な肉体で、はしたなく乱れているのだから。

「あんな、もので……私をッ」
いま股と尻の穴をすぼすぼ掻き乱している張り型の代わりに、彼らの肉竿が代わる代わる自分を犯す様が思い浮かぶ。

「冗談じゃ、ないっ!! 私は、男……ああああッ」
途端に甘美が子宮を打ち震わせた。

「こんなでかい乳してどこが男だ、雌豚魔女っ!」
「ちんぽ直に見たら、悶えるのいきなり激しくなりやがったくせによっ!!」

「作り物なんかじゃなく、俺らの生勃起挿入で欲しくて仕方ねえんだろ。とんでもねえ淫乱魔女だな」

「——!! ち、ちが……ンひッ! 男の物など、私はッ、ああ~~~~~~~~ッ!」

騎士たちからの侮蔑が、悔しくてたまらない。
「なんで……この、身体、こんな、敏……感ッ。ああ、動いてるうッ、ずつと、中でッ、ぐりぐりされてっ!! くッ、ううッ、うう~~~~ッ!」

シコシコと男たちの扱く勢が増すにつれてすべの勃起竿が一段と膨張した。カウパーが溢れかえり指と怒張の間でぐちよぐちよと粘る。

「ああッ、あんなに、汁ッ出てる。私を、見て……みんな、あんなに……」

「ッ、な、なにを考えて、私は……ッ。ああ、だめ、だ、もう、感じ、すぎて、頭が、うわ、あ、ああ、はあ、ああああ……」

穴刺激が濃度を増すほどに、淫裂の上端が灼熱の

疼きを滾らせ、小さな粒突起を充血させてゆく。

「ああ、ここ……もの凄く、疼くッ。ああ、むず痒くて……切なくて、たまらないっ!!」

ペニスが勃起する感覚に似ているが、疼きのもどかしさが比較にならないほど強い。

「だめだッ、こんなところッ。絶対に……ッ。ああ……で、でも……」

触れたら最後、何もかもが瓦解する。危険なのは重々承知のはずなのに、我慢しきれず自分からその小粒へと指先を押し当てて抉るように捏ね回した。

「ひわっ!! —— ツツ!!」
指先に触れる硬く強張った粒を、円を描くように転がすと淫裂を満たしたたつぷりの愛液がぶじゅぶじゅと下品な音を奏でて掻き混ぜられる。ヌルヌルの感触が鋭敏な器官への刺激を何倍にも高め、計り知れぬ快感がちつぽけな肉粒から生み出された。

「おおお、あ、ああああ——ッ!!」
熱波が一気に脳へと押し寄せ理性を呑み込む。

「こん……な、あ……。ここ……こん、な……敏……感ッ。あ、ああ、溶け、る。脳、溶ける……ッ」

禁断の秘粒を自爆した後悔に苛まれるがもう遅い。
「張り型じゃ足りなくて自分でも弄り始めたぞ」
「どうしようもない淫乱魔女だなッ!」

「ち、ちが……う、身体、が、勝手、に……いッ!!」
騎士たちの罵声に言い返そうとするが、言葉は惱ましい嬌声になるばかり。

ただ気丈に、嘲笑う男たちを睨み付けるが、
「見ろよ、このスケベ魔女、イキそうだぜ!!」

「——イ、イクっ!! 私……がッ、んほおおうっ!」
絶頂を意識させられた。途端に膣と腸がぎゅうんと硬く窄まり、張り型を目いっぱい締め付ける。

「はうううンツ!! ツはうああ——ッ!」
幽を食いしぼり、込み上げてきた衝動を気力で抑え込んだ。眉根を寄せた切ない表情で、熱い吐息を

静かに吹き零すと、

「イキヤがった、クソ魔女。スケベな面してッ」
男たちの嘲る声が耳を打った。

「なっ!? 違うっ、わ、私はイツってなんか……」
くっ、うう……っ。ふ、うう……っ

慌てて否定しようとするが、大きく声を張り上げたらその衝撃が子宮に響いて本当に絶頂しそうだ。ただ身を強張らせ悔しげに歯を食いしばるその様に、兵士が生唾を飲んだ。

「くおっ、お、俺も、もう、出るっ！」
「なっ?! 待てっ、はうっ!!」

手淫が狂おしいほどに勢いを増し、どっぴゅううううっ!! びゅっ、びゅびゅっ!! ぶびびゅっ!! どびゆ、ぶぶびゆるびゆるッ!

瞬時に膨張を極めた肉太の先端から夥しい量の濃白濁を、魔女めがけて一斉にぶちまけた。

べちよ、ぐちゅっ!! ぶちやべちよべちや!
「くあああッ!! き、汚いっ。そ、そんな物ッ、かけるなああッ! うぶっ、おあああッ!!」

露出過多な鏡を貼り付けた殆ど半裸の淫靡肢体はもちろん、顔にも髪にも、全身まんべんなくスベルマがへばり付く。粘度が高い雫は、なかなか流れ落ちずにいつまでもぶよぶよとした感触で肌を汚し続ける。しかも男たちの興奮に加熱され、気色の悪い生暖かさが嫌悪感を掻き立てた。

その熱に熟成されたのか、脱力の腐臭が饅えた牛乳のように強烈さを増し、息を止める間もなく鼻腔にだれ込んで吐き気を催させる。

意識が何度も点滅し快感だけが脳裏に渦巻く。
「こんな……物を……。汚らわしい……ものを、よくも、私に……。う、うううう……」

生真面目な騎士の成れの果ては、尻餅をついた股ぐらをビクンビクンと打ち震わせながらも、気丈に精液への嫌悪を呟いた。

「へっ。その割には、身体うずうずさせさせてやがるじゃないか。汚らわしい汁浴びまくって、嬉しくてたまらないってツラしてるぜ」
「ひよっとして中にたっぷり射精でもらえなくて、ご不満なのかあッ!」

なにを言っても、汚らわしい魔女の淫乱な戯言としてあしらわれ、悔しさがアルベルトの胸を満たす軽蔑の眼差しを精液まみれの女身へ注いでくる取り巻きの中へ、これまでただ一人自慰に加わらなかつた歴戦の百人長が立ち上がって歩みくる。

「ふん。男の精液まみれで満足そうだな魔女め」
抑揚なく冷淡に吐き捨てると、股当ての中から勃起していなくても申し分ない逞しさの逸物を引き出す。その先端を正面からアルベルトに向けると、

「ト、トバイア……ス、なにを? や、やめろっ、やめ……ッ、あああッ!」

じよぼっ、じよぼぼぼっ、じよばじよぼぼぼっ!! 勢いが激しい小便を頭から浴びせかけた。

「あああッ、そんなッ!! あぶっ、ぶああ、は、あああッ!! なぜ、こんな、こと……おっ!!」

絶望的な悲しみが胸を抉る。これ以上ない屈辱が、騎士の誇りを粉々に打ち砕いた。

生臭い栗花臭に加えて濃密なアンモニア臭に鼻腔が満たされ、口の中にも塩気と苦みが強い飛沫がたっぷりと飛び込んでくる。

「ぐぶっ、げぼっ、がはあッ、あぶっ、あがあ」
ぐびりと反射的に飲み込み、噎せて咳き込みながら身を振る。その元の姿の面影すらないアルベルトを冷たく睨め付け続けながらトバイアスはようやく大量の放尿を終えて陰茎をしまい込んだ。

「く……う、あ、は、ああ……」
小便と精液にまみれぐちよぐちよで身を震わせる。

「出立だ! 魔女を連行し、王都へと戻るぞ!!」
ついでとばかりにその汚れた美貌へ唾を吐きかけると、強面の百人長は部隊へ命を下した。

元の身体に比べて歩幅が狭い。それに加え快感に萎えさせられた足は思うように動かない。だが騎馬につながれた鎖に容赦なく手枷を引かれ、アルベルトはたおやかな女体をよろけさせ必死に歩き続けた。

「ためえのためにこんなゆっくり移動してやっつるんだ。しつかり歩け、のろまっ!!」
それでもいまのアルベルトには息が上がるほど過酷で、引きずられるようになっていくのがやつとだ。歩兵が槍の柄で小突いてくる。

「うぐっ!!」
ならば緊縛して馬の背にくくりつけ運搬してくればと思うのだが、彼らは、生真面目な騎士アルベルトとその部隊を死に追いやっつた忌まわしい魔女に少しでも多く苦痛と辱めを与えたいらしい。

膣と直腸を目いっぱい満たされていたのでは、刺激が凄すぎて姿勢を保つことすら困難だ。へっぴり腰で何度も転び悶え懇願した挙げ句、彼らも無理と悟り、魔導パイプを小さくしてくれた。

中にあるという感じは続いているが狭穴を押し広げられる感触が消え失せ、気をつけて動く分には苛烈な甘美が弾けることもない。しかしサイズが縮小されたのはその直径のみ。双穴の奥を気がおかしくなるほど突き上げた長さは依然として変わらず、疑似男根の先端は相変わらず子宮口とS状結腸に密着して落ち着かぬ快感をウズウズともたらし続ける。

(また、漏れ……てっ。脚い、垂れ落ちている) 強い刺激ではないがずつと奥底に接触されているため、子宮汁が滲みつばなしになっていて膣口から内腿へと溢れ落ちてくる。

腸内の方もやはり奥へ当たり続けている感触に、粘液がじゅくじゅくと湧き続けていた。

177

日差しの下で生臭い腐臭を強め、ゴビゴビに乾きかけた白濁まみれな身体を清めることも許されず、どれだけ歩き続けたらだろうか？ 子宮と腸奥の触感を常に意識させられながら一歩一歩足を踏み出すうちに、一行は小さな町へたどり着いた。

中央では名も殆ど知られていない、農村に毛が生えた程度の規模。活気がなく静まりかえった通りを一行が進みゆくと、屋内から様子をうかがっていた住民たちが血相を変えて飛び出してきた。

「魔女ッ!!」

まだ幼い少年が声を張り上げ、石を投げつける。

「くっ!」

アルベルトの脇腹に命中した。

「なん……だ……? うっ」

驚いて振り向くと、子供だけじゃない。老若男女すべての人々が集まり憤怒の眼差しを叩き付けてくる。

「ついに捕まりやがったか! 悪魔の売女がっ!!」

「殺せっ、そんな奴!! 火あぶりにしろッ!」

「俺の女房をよくもっ!!」

「うちの娘を返せっ!」

殺気だった罵声が、魔女の身体に換えられた騎士へと降り注ぐ。

「くっ、こども、魔女の犠牲となった町カッ」

投げつけられる石つぶてに顔を伏せながら、彼らの心中を想い胸が締め付けられる。

ナスタロヴィカは中央からの目が届きにくい辺境の町や村から人間を掠い、邪悪な魔導実験を行っていた。さすがに話が王都にまで届き、白鷺騎士団が討滅を命じられ、アルベルトの部隊が赴いたのだ。

「く……う……。耐えなく、ては……」

この無様な姿を罵って人々の怒りが少しでも晴ればと思うが、女にされた身体を大勢の目に晒しているかと思うと恥ずかしくて惨めでたまらない。

しかもこの被虐の切なさにも、まさに淫乱極まり

ない肉体は甘美へと変換して、子宮壺から零れる熱雫をたっぷりに増やす。

「はうっ、また……漏れて、くるっ」

括約筋を窄めると子宮と腸奥の感触が格段に跳ね上がるのかつに力めない。町人の中には年端の

いかない子供もいるというのに、その無垢な視線の前で股ぐらからとろとろ淫乱な雫を滴らせる。

「うわ、小便漏らした!! いや違うぞ。妙に糸引いてやがるっ!」

「この魔女っ、こんなときにもスケベなこと考えて股ぐら濡らしてるのかよっ!」

「どこまで俺らを馬鹿にすれば気が済むんだっ!!」

ヌメリ汁が伝う感触に腿を擦り寄せへっぴり腰で尻をくねらせた。その仕草が余計に彼らの目を引く。

「ち、違う……これは……。身体が、勝手にッ」

羞恥のあまり、つい言い訳めいた呟きを零す。

「魔女ッ!」淫乱魔女っ!!「くたばれっ!」

途端に耳をつんざく怒号が押し寄せ、アルベルトの足を竦ませた。どのような強敵よりもこの民衆が怖い。女体に換えられた自分を魔女と信じて疑わず、

憤怒をぶつけてくる人々が恐ろしい。

「まずまず降り注ぐ石つぶてを、騎士団は止めるどころか自分たちの身を護ると同時に民衆が狙いやすいようにとアルベルトから距離を取る。

「どうせだから、愉快な姿をもっと見てもらえ」

離れ際に馬上からトバイアスが低く呟く。その手の中に遠隔操作の魔導具を持つ。

「……!! 待っ」

顔から血の気が引いた。追いつがろうとするが萎えた足がもつれる。険しい表情をした百人長の指が、

二つのツمامミをいっぺんに最強へと回す。

「や、やめっ、やめ……ろッッ、お、おあつ!」

肛門と膣内で爆発が起こったのかと思った。

蔓草程度に細まって疑念陰茎が、一瞬で最大に膨張して濡れ穴が強引に拡張される。

その目いっぱい張り詰めた肉管が、うねり暴れる剛棒にぐりぐりと捻られる。肉襲の間に溜まっていた愛液が膣口から、腸汁が肛門から、ぶじゅつと飛沫を散らして押し出された。

「あひっ! また、変な汁ッ!! こんな、物ッ、抜いて……くれ……へあああッ!」

爪先立ちに飛び上がってバランスを崩し、両足をつなぐ足枷のせいで躓き転倒した。起き上がろうとするが四つん這いになるのが限界で、上体を突っ伏し尻だけをブルブル打ち震わせて迫り上げる。

巨乳が地面に押しつけられ、強張りっぱなしだった乳首が圧迫され痺れが走る。

「はあああッ、だめ……っ、民が見ている前でッ、

このような、淫らな、浅ましいッ、くっ、ううっ」

呻きが漏れぬように唇を噛んで堪えた。

「なにやっつてんだ、あの魔女」

「ケツ突き上げて、俺らを誘ってるのかよ?」

色白の美貌を羞恥の忍耐に悩ましく歪ませ、スベルマのこびりついた肌を汗ばませる。

「く……うッ! 見てるッ、見るから、みんな……あ。子供、まで……ッ。だめだ、感じ、たらっ」

潤滑汁のヌメリに任せて粘膜壁を捏ねるディルドーに、艶めかしく身がくねるのを止められない。

「くあああッ! ふ、太おっ!! だめだあッ、な膣内ッ、尻もおおっ! ふあッ、動いて、るッ。みんな見てるッ、みんな……ッ、はううッ!!」

そんな破廉恥な姿に突き刺さってくる人々の視線に、女体が背徳の興奮を昂らせる。耐えがたい恥辱が、淫蕩な魔女の悦びに押し退けられた。

生殺しの刺激にもどかしい思いをしていた子宮が待ち望んでいたかのように身震いする。途端、

ぶじゅうッ、びじゅじゅ!! ぶしゅ……ッ!



刺激で掻き混ぜてくる。

「ふんっ！ おあつ、あ、は、うっ!!」

気持ちよいと認めずに意地を張り続けるのが困難だった。それでも気丈に歯を食いしばっている。男は止めどなく滲み続けるヌメリ液を、ことさら音が響く乱暴さで思いきり吸り込んできた。

じゅるるっ、ずじゅっ！ ずるじゅるじゅるずじゅじゅずじゅじゅじゅるる〜〜〜ッ!!

「ひいっ！ 吸うなっ!! 吸うな、そんな、とこッ、ふあ、ああはあああッ!!」

膣内を真空にされるような勢いに、意識が飛びかけた。牝汁を一滴も残すものと割れ目の粘膜をしやぶりまくる舌の快楽に腰がうねりまくって、直腸を犯す怒張の感触をますます苛烈に味わう。

舌先がクリトリスを掠めると、気持ちよくてすすり泣きそうになった。無理矢理開帳されていた足で、思わず男の頭部に絡み付きももうずつと舐め続けているように引き寄せようとしてしまう。だがその寸前、男の顔はあっさりとして女陰を離脱した。

「ふあッ!!」

残念そうな顔になるアルベルトを小馬鹿にしたように笑い、蜜液でべっとりになった口元を拭う。

「どろどろ喉に絡み付いてきやがる、こいつの愛液。俺はもつとさらつと飲みやすい方が好みだな」

「勝手なことを、言うなッ！ 好きでこんな物を……ッ、く、ううッ」

あまりに言いぐさに怒りを覚えるが、自分の身体からいやらしい女の液汁が溢れたことを、なおさらに意識して動揺する。膣穴の疼きが狂おしい。

（うう、舐められた、から……。尻に挿入られてる、からっ！ う、ああ、膣内あ……）

欲望に負けたくない。こんな身体にされようとも自分は、王国の騎士なのだから。けれども、

「挿入するにはよさそうな愛液だな。試してみるぜ」

牝汁の味わいに不満を述べた男が、正面からアルベルトのヴァギナへと怒張を押し込んできた。

ぬぶんっ！ ずっぷ、ずぼ、ぬぶぶぶずぶっ!!

「ふあえええッ!! んあはあつ、イイ……ん、く、あああつ、違……、はあつ、ふあ、あああつ!!」

熱を帯びた硬肉がヌルヌルの潤滑に導かれめり込んだ途端、喜びに胸が弾んだ。感極まった髪がキュウウと窄まって肉幹を締め付け欲待する。

浮き立つような擦れ具合がたまらない。本当は男なのにとか、魔女として憎まれながら犯されているとか、重要なことすら脳裏から霞むほどに強烈な甘美に翻弄される。

「入れている最中なのに、吸い付いてくるっ、こいつの膣穴ッ。く……ッ、はあつ、たまんねえッ!!」

絡み付くヴァギナの心地よさに興奮を昂らせ、奥まで届ききらないうちにストロークが始まる。

「ああッ!! んう、おおっ、動ッ、動くなあ、あああッ! ふああ、中でッ、んお、すご……イッ!!」

作り物の男根とも、尻穴を犯す怒張とも感觸の違う、節くれ立ちの激しい竿肌膣壁が研磨された。

直腸よりも柔軟性に優れた性器として完璧に仕上がった髪管の中で、突き込んでくる度にそのゴツゴツした極太が浮かれはしゃぐように大きくのたうッ。

「ひいっ! ひうっ、ひっ、はあああッ!!」

感度の高すぎる穴を波打たせられ、息ができない。その苦しきまでもが、奥壺が窄まるほどの甘美を沸き立たせる。理性では堪えなくてはと思うのだが、

悦楽を得る器官として熟成した濡れ穴からの刺激は強烈すぎた。トロトロに煮蕩けた柔らか髪を硬い感觸が摩擦するだけで、勝手に声が甘く媚びる。

「ひうっ、ああっ、後ろお、いきな……りっ!」

尻穴を抽送する極太まで膣内の怒張と競うようにテンポを速め、アルベルトを悩乱へと追い詰める。

「動かした途端、ちんこに絡み付いてきやがった。

スケベなケツ穴だぜッ!!」

「あゝあ、なんてツラしてやがんだ。もう少し抑えられねえのかよ!! ヨダレまで垂らして、アホみたいに気持ちよさそうにしやがってっ!」

「ふえッ! ち、違ふッ、ん、んうッ!」

男に罵られ、知らぬうちにそんな淫らな表情になつていたのかと慌てふためく。顔を引き締めようと試みるが、二穴を同時に突き穿られる激感には抗えず、どうしても鼻腔が膨らみ、目元と唇が緩んだらしない媚笑にしかならない。

「おまんこ締め付けまくりやがって! どこまでも淫乱にできてやがるッ、この発情した雌豚女ッ!!」

力んだ勢いが膣壁に集中する。まさに男が言うとおり、身体が淫乱極まりない。どのように抗おうとしても淫らな行為しか取れないようにできている。

（く、そ、お、お……。くうああッ、また、一段と、激し……イッ! ふあうッ!!）

ぬぶっ、ずぼっ!! ずっぷずっぷ、ずぶんっ! ぬぢいっ、ずぶじゅっ! ぐっじゅ、ぬずぶッ!!

「ひぎっ、ふぎいッ!! くあッ、中で、二本ッ!」

膣壁と腸壁を挟んで硬竿同士がゴツゴツとぶつかり合い、その衝撃がすべて女体化騎士の胎内に響く。

「えへあああああッ!」

頬が緩んでたつぷりのヨダレを纏った舌がだらしなく唇から零れ出た。どうにも抑えられない快感に目尻が下がり、えっへらと頭の悪い笑顔のようにはしたなく表情が崩れた。

「なんてスケベな顔してやがるんだ、この魔女!!」

「捕まって神妙なツラしてやがったと思つたら、ちんこ挿入られた途端、この様かよ!」

そんな表情になつていたのか。でも自分でももうどうにもならない。尻も乳も、熟れた肉房が振動に合わせて暴れ弾む。

前後から男の胸板に挟み込まれ、抱え上げられた



魔法陣から華麗に登場!

どうしたんですか?
なんだか急...

...はや...

お二人...共
待って下さ...

お...

にっ!?

エマさん
あれ...

え?
あの...

聖なる鈴の 啼くセカイ

第12話 墮ちる者達

漫画 ことし 琴慈



な……

アンタ
どこから…!!



小汚い
皆のアイドル
お姉様の愛人

お待ち致し
ましたですう♡

キユーティ☆
キルマちゃん
ここに参上!

誰も待っていないし
どろがキユーティ
なのよっ

大体アンタ
何なの?
猫耳とか
あざとい格好の
くせに!!

はあ!?
ふざけんな
ですう
これは崇高な
悪魔の角
ですう!

これだから
低能は!!

キ

あの…

今までは
頭の悪い

愉快な仲間達の
やる事だと思っ
て見逃して
きたですが……

こんな奥まで
到達するとは
思わなかったです

まおかげ様で
キルマもあの扉を
突破出来ました♡

キルマ

邪魔な
者達には……

そろそろ

……っ!!

やっぱり
アンタも
「聖鈴」を!?

キルマさんの
魔力が凄く
高まって――

……っ!
私の防衛呪文で
……!!

「落ちて」
もらおうです

!!
危ないですっ
アイリさん!

エマさんっ

カッ!!

手遅れですう

もう

……!?

—!!
お兄ちゃ…!

何して…!?

…あ…





……っ！

おち ちん
ほし……い……♡

ほし……
はあ
はあ

アイ……
……り……

フリ

フリ
フリ

んんん……
んんん……
んんん……

アイリ……

エマ……っ

私……
このように
淫びな……

するい……
ですよ
アイリさん
……

わたし……♡

……は……
はあ……♡

んんん……

お兄ちゃん……っ

お兄ちゃん
ほし……い……♡



「聖なる鈴」…
名前は
気に食わない
ですが



この世で
もつとも
素晴らしい力は
、純粹魔術、

その力を
持たない人間は
滅びるのみ



思った通り

なんて
耐性の無い
奴らですう



手にするのは
この
キルマですう



ふ…♡
…あ…♡

うわら

うわら

うわら

うわら

うわら

呪詛喰らい師の今度の相手は恋愛ゲーム?
疑似空間でとっとう咲妃の処女が……!!

呪詛喰らい師

カーズイーター

小説
NOVEL

あおいむらまさ
蒼井村正

挿絵
ILLUSTRATION

あると
或十せねか

封の二 オレの恋人がこんなに淫乱なはずがない!

封の三 淫虫跋扈

瞬きもせず画面を見つめながら、咲妃は無感情な声で告げる。

「咲妃お姉ちゃん、すごい……」

瑠那が上げた感嘆の声にも反応せず、半ばトランス状態でプログラムをチェックしていた呪詛喰らい師の目に、表情が戻った。

「ふう……。結論から言おう。このゲームそのものに、危険なもの含まれていない」

「やっぱり、ただのネガティブキャンペーンだったか？ まあいいや、ゲームそのものはなかなか面白いから、もう少し遊んでみるよ」

「しつかりハマってるじゃないですか」

有佳が少し呆れ顔で指摘する。

「いつ、いや、ほら、オレは何にでもハマりやすい性格だからさ、あはははは……」

照れ笑い混じりに言い訳する信司であった。

「都市伝説の検証をしないのなら、私たちは早めに帰らせてもらおうと思うのだが……」

「ん？ ああ、そうだな、オレはもうちよつとここでゲームを続けてから帰るよ」

恋愛シミュレーションにのめり込んでいる少年を一人残し、咲妃たちは部屋を出ていった。

「ンツ……あつ、あ、あ、あ、あ、くふう、ンツ、ひあ、んんんつ……あはあん……」

明りを落としたベッドルームに、咲妃の甘く悩ましげな喘ぎ声が響く。

「咲妃さん、もつと気持ちよくなつて下さい。ああ、咲妃さん」

「お姉ちゃんのオッパイ、美味しい。これだけでお腹いっぱいになっちゃいそう。んふ……ちゅぽ」

真ん中に横たわった咲妃のメリハリの効いた裸身に、添い寝した有佳と瑠那が優しく、そして濃厚な愛撫を施して、呪詛喰らい師の異名を持つ少女に、

絶え間ない悦びの声を上げさせていた。

左右の乳首を同時に吸われ、恍惚の表情を浮かべた仰け反った咲妃の股間では、二人の少女の指が競うように蠢いて、クチュクチュという止めどない蜜鳴りの音を立てている。

「ふあ、あ、イクッ！ ひあ……イク……ッ！」

甘く引きつった声を上げて仰け反った咲妃が、喜悅の頂点に舞い上がろうとした瞬間、ベッドのサイドテーブルに置いていた携帯電話が着信メロディを奏で始めた。

「う……あ……はい」

エクスタシーにお預けを喰わされた咲妃は、気怠げな草で携帯電話を手取る。

「信司が……信司が倒れちゃったのよ！」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、悲痛な響きを帯びた鮎子の声であった。

「何だつて?! それで? ……ああ、わかった。すぐに行く!」

信司が緊急搬送された病院に急行した咲妃たちは、待合室で鮎子と落ち合った。

「会議が終わったあとで、信司に電話したら、今、呪いの隠しナリオをダウンロードしたつて言つたの。その直後に、何か悲鳴のような声が聞こえて、倒れる音がして……。精密検査したけど、身体に何の異常もないのに意識が戻らないのよ!」

「そんな……まさか、あのゲームで?」

「常磐城さん、あなた、信司に、ゲームに危険なものが入っていないって断言したのよね?」

鮎子が詰め寄ってくる。

「ああ。言つた……」

「じゃあ、どうして信司は倒れたの!? ねえ、答えてよ! 呪いのシナリオつて、何なのよ!」

「會長……落ち着いて下さい」

「ごめんなさい。つい、取り乱しちゃつて……ねえ、常磐城さん、あなたの力なら、信司を目覚めさせることができるんじゃないの? ……お願い、信司を助けて……お願いッ!」

有佳に取りなされて平常心を取り戻した鮎子は、呪詛喰らい師の異名を持つ少女にすがりつくようにして懇願する。

「判つた。淫夢神の力を使って、信司の意識に潜つてみる。しかし、その前に、人払いをしておく必要があるな……」

腿に装着したホルダーから赤ペンを抜いた咲妃は、病室の出入り口に接近回避と印象希薄化の呪印を手早く描き込んだ。

「これでよし……ちよつと、隣に寝るぞ」

不安げな表情で見つめてくる鮎子の視線を気にしつつ、呪印使いの少女は信司に添い寝する体勢になり、緩やかに上下している少年の胸に手を置いた。

「上手いくように、祈つていてくれ」

手のひらに伝わってくる心臓の鼓動に、自らの生体リズムを同調させた咲妃は、その身に封じた淫夢神の力を駆使して信司の意識へと侵入する。

黒い霧のようなものを突き抜けた次の瞬間、呪詛喰らい師は、学校の教室のような場所に、制服姿で立っていた。

「侵入は成功……。通常の淫夢とは、少し感覚が違う。信司の意識に直接ダウンロードされたゲームデータと、私の意識が融合してしまつたのか?」

周囲を見回した咲妃は、状況の把握にとめつつ、自分のいでたちに目をやる。

制服の下には、いつもと同じ革帯ボンテージの退魔装束を装着しているようだ。

「もつとエロエロな格好をさせられると思つていた

が、外見は意外と普通だな。この先、どういう展開になるのかは判らないが……この身体、どうやら未完成の淫神らしいな」

自らの肉体を検分していた咲妃は、肉体から発する神気を感知して複雑な表情を浮かべる。

「いつもなら、私の肉体に神体を迎え入れるのだが、今回は逆に、神体に私の意識が取り込まれたか。さて、この状況から神伽の戯を行なうのは、なかなか厄介だぞ……くう……ンふううッ！」

身体の奥底から込み上げてきた疼きに、呪詛喰らい師は、制服姿の肢体を抱き締めて呻く。

「こっ、この飢餓感……未完成の淫神が、精気を求めているのか？ んふう……はぁあんッ！」

悩ましげな声を上げた咲妃は、制服のシャツ越しに豊乳を揉みこね、ムッチリと肉感的な太腿を擦り合わせながら、切なげな喘ぎを漏らす。

「ああ、堪らないッ！ 身体がこんなに疼くのは、初めてだ！ ガマン……できないッ！」

全身をジリジリと炙り焼かれているような欲情に耐えかねて、制服のスカート越しに股間をまさぐる。マシユマロのような弾力で指を押し返してくる恥丘を手のひらで包み込んで押し揉み、中指を激しく屈伸させて、革帯に守られた秘裂を刺激する。

間接的に愛撫された生殖器が熱く潤み、膣道がグネグネと卑猥に蠢く感触が、腹腔の奥底から伝わってきて、咲妃の顔を切なげに歪ませた。

「ひぁあ！ あふううう……身中で、疼いて……ンッンッ……あ、くふうううんッ！」

凜とした美貌の退魔少女は、教室の床で膝立ちになり、乳房と股間で指をせわしなく蠢かせ、甘く艶めかしい喘ぎ声を響かせて自慰快感に身悶える。

「ダメ……だ。自分で……しても、全然治まらない……はぁあう、あつ、あんッ！」

自慰行為によって生じた快感の波動は、乾ききつ

た喉に一滴の水を落としかたのように瞬時に吸収され、飢餓感がより強まってしまふ。どうすれば……？

「ひう、ンッ、あんッ！ こっ、このままでは……疼きに呑み込まれてしまふ。どうすれば……？」

鼻に掛かった呻きを漏らしながら、虚しい自慰に耽る咲妃の耳に、教室のドアが開く音と、人の賑やかな話し声が飛び込んできた。

「あ、エロエロ美少女、ホントにいた！ うわあ、もう、オナニーしてるぞ！」

「あれが噂の……すげえ美人じゃん。オッパイもかくって、色っぽいなあ」

口々に言いながら、十人余りの少年たちが入ってきた。全員が既に一糸もまとわぬ全裸で、股間では淫情の血潮を送り込まれたペニスに恥ずかしげもなくそそり勃っている。咲妃を取り囲んだ少年たちの顔は、全て信司のものであった。

「くう……ンッ、お前のスケベ顔、十個も集まると呆れるのを通り越して不気味だぞ」

欲情の喘ぎを抑えた神伽の巫女は、眉を顰めて言いながら、少年たちの霊的な波動を探っている。

（この少年たちは、昏睡したゲームマーたちの思念いわば、生き霊の凝縮体か。私の精神と淫神が同調したせいで、最も縁の深い信司の容姿が前面に出てきているのか……。すぐくやりづらいな）

「ねえ、早速だけど、セックス、しようぜ」

「もうすつかりエロエロモードじゃないか。オレにも目いっぱいエロいことしてくれるんだろ？」

信司の顔と声で口々に言った少年たちは、床に跪いた咲妃に群がり、制服に手を掛けてくる。

「ビィッ、ビリッ、ビリビリッ！」

少年たちの手に引つ張られた制服は、まるで薄紙でできているかのようにあっさり引き裂かれ、芸術的な曲面を見せつける革帯ボンデー爆乳が、ポリウムたつぷりに揺れ弾みながらまろび出した。

「ふあ！ あ……こっ、こういう趣向か……ますます悪趣味な……くふうンッ！」

「わあ、制服の下に、SMみたいな格好してる！……これが餅肌つてやつなのか？」

「おつ、おいつ！ オレにも触らせてくれよ！ んお、すげえ爆乳だ！ たまんねえ！」

四方八方から手が伸びてきて、あらわになった乳肌が好き放題に揉みこねられる。

「く……うっ、そっ、そんなに強く揉むんじゃないっ！ はぁあんッ！ ふあ、あんッ！」

信司の顔をした少年たちに寄ってたかつて鬨られながら、咲妃は肉体の飢餓感がわずかに和らぐのを感じて小さな安堵の吐息を漏らす。

（男の指から、自慰とは比べものにならない精気が流れ込んでくる。これならば……いける！）

「くうん……ンッ、全員が信司の顔なのが気に入らないが、神伽の戯、参るッ！」

凜とした声を上げた呪詛喰らい師は、仮想空間という未知の戦場で、神伽の戯を開始した。

「まずは、正攻法でいかせてもらおうぞ」

先を争うように爆乳を弄んでくる少年たちに囲まれながら、咲妃は、はち切れんばかりにそそり勃ったペニスに指を絡め、手淫奉仕を仕掛けた。

「んっ！ くふううう！」

ほんのりと冷たく滑らかな指に勃起を擦られた少年は、快感の呻きを漏らして肉茎をヒクつかせる。

（信司の早漏もコピーされていれば、神伽も早く終わるだろうが……果たしてそう上手くいくかな？）

数回の淫靡なストロークで摩擦快感を送り込んだ咲妃の指は、スルリと解けてお預けを喰わせ、次の勃起へと移っていく。花から花へと舞い飛ぶ蝶のように、神伽の巫女の白くたおやかな指は林立するペニスを渡り歩き、繊細にして濃厚な愛撫を施した。

「こんなに硬くして……フツッ、もう溢あふれているじゃないか。ここ、気持ちいいんだろ？」

ウズメ流の技巧を極めた少女の手は、硬く反り返った肉茎の根本から先端までリズムカルに扱き上げ、滑らかな手のひらで亀頭を包み込んで撫で転がす。鈴口から溢れ出る男の愛液が、ヌチユヌチユと卑猥な音を立ててこね回され、少年たちの鼻に掛かった快感の呻きが、教室内に高く、低く響く。

（このまま、愛撫の主導権を取って神伽を続けられ、この肉体に狂わされずに済む……）

神伽の巫女は、積極的な愛撫で少年たちの身体から喜びの波動を絞り出して吸収してゆく。

「んお！ 手コキ、超気持ちいいッ！」

性愛技巧の粋を極めた白い指先が、勃起の胴を撫で上げ、裏筋を摘んで揉み上げ、滑らかな指の腹で鈴口のワレメを強弱交えて擦り上げ、亀頭冠をくすぐり、陰囊を包み込んで優しくこね回す。

しばらくの間は、咲妃の繰り出す手淫責めに少年たちが勃起をヒクつかせて喘ぎ、悶える一方面的な状況が続いた。

教室の床には、手淫奉仕によって絞り出された男の愛液が糸を引いて滴り落ち、下腹にめり込みそうに充血したペニスは、先汁に濡れまみれてテラテラと艶めかしく照り輝いている。

「オレたちばかり気持ちよくなってたら悪いよね」

愛撫されるがままになっていた少年たちが、示し合わせたように動き出した。

「余計な気遣いはいい、んっ、んふううう！」

唇が強引に奪われ、ヌルリ、と舌が入ってきた。くちゅ、くちゅくちゅくちゅ、じゅるっ、ずちゅるるるるっ、ぐちゅぐちゅぐちゅるるっ……

いつもキスしている有佳や瑠那の柔らかく優しい舌とは正反対の、荒々しく硬い味覚器官が口腔内を掻き回し、戸惑う舌に絡み付いてきつく吸い上げて

くる。

（この身体、キスだけで燃え上がっている!! まずい、これ以上愛撫されたら……!）

攻撃的なキスに翻弄されている咲妃の乳先と股間を覆っていた革帯ボンデージがあつさりどずらされ、左右の乳首と秘部が露出させられた。

「んむううう！ んきゅふううう！」

剥き出しになった性感帯に、少年たちの熱い吐息が吹きかけられただけで、全身がさざ波のような痙攣に包まれる。

「咲妃の身体、どこもかしこもエロいなあ。この乳首なんて、特にエロエロで美味しそうだ」

剥き出しになった乳首が、左右同時に吸われた。 「んぐううう！ ひうううううんッ！」

ディープキスで塞がれた唇の奥からくぐもった声を上げる呪詛喰らい師の乳先で、刺激に反応した乳頭がムクムクと尖り勃ち、ざらついた舌に舐め転がされてさらに硬度を増してゆく。

（信司の記憶から、名前まで知られてしまったか？ うああ！ 乳首に舌が絡んで！ 融けるッ!）

「咲妃のおまんこ、ツルツルのパイパンなんだね。いっぱい舐めてあげるよ。ああ、柔らかいなあ」

「お尻の穴、全然臭くない、ミルクみたいな匂いがする……こんなにきれいな色なんだ……」

熱い舌が、前後の秘めやかな部分を貪るように舐め始めた。

「ひやああああんッ！ なっ、舐め……ヒッ！ イッ！ あ、ああ……ッ!!」

キスを振りほどいて甘い悲鳴を上げた咲妃の肉体が、ギクギクギクンッ！ と喜びの痙攣を起こす。

「何？ もっと舐めて欲しいの？ 言われなくたって、いっぱい舐めてあげるよ。美味しい……」

ムッチリと肉感的な尻たぶを割り開いた少年は、恥ずかしげに引きすぼめられた放射状の小皺を一本

一本味わうように舌先を這わせ、唇を吸い付かせて、小刻みに吸い上げてくる。

「はああ、こんなにエロい身体なのに、おまんこはロリっぽいツルツルなんだね。柔らかくて、濡れて、ヒクヒク動いている。すぐエッチだよ」

無毛の秘裂にむしゃぶりついた少年は、ツルリと滑らかな大陰唇に唾液を塗り込み、柔らかなワレメ全体を口に含んで、鼻息も荒く食った。

「んむううんっ！ ふあ、かつ、嘔むなあ！ アヒンッ！ んっんっんっ、くふうううんっ！」

キスで口を塞がれ、秘裂と肛門を欲望剥き出しの舌使いで舐めしやぶられた退魔少女の身体が強張り、膝がガクガクと震える。

ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ、ぴちゅ、ぴちゅ、ぴちゅ、ちゅばちゅばちゅば、ちゅるっ、じゅるっ、ちゅぶちゅぶちゅぶ……

身体各所が吸いしやぶられ、舐められる音が次第に湿っぽさを増し、不自然なつま先立ちの姿勢で翻られている咲妃の足元に、唾液混じりの愛液が滴り落ちて淫らな水溜まりを形成してゆく。

「咲妃のお尻の穴、ヒクヒク動いて開いてきた。もっと奥まで欲しいんだね？」

「アナルに舌を這わせていた少年が身体を起こし、唾液に濡れまみれてヒクついているすぼまりに亀頭を押し付けてきた。」

「お尻の穴に、オレのチンポ、挿れてあげるよ」

ぬぶ……ずにゅうううっ！

どうせ、この肉体は淫神のものだから、と、半分

開き直り気味にアヌスの緊張を解くと同時に、熱く

猛った亀頭が、括約筋を押し開いて侵入してきた。

「んはああ……ああああんっ！」

神体の受け入れ口として、常に清浄に保たれている直腸内部を男の器官に満たされた神伽の巫女は、凛々しい美貌に恥じらいと恍惚の入り交じった表情

を浮かべ、熱い吐息を漏らす。

「くうううっ！ 常磐城さんのお尻、すごい締め付けだよ。中も温かくて、チンポが蕩けそうなんだ！」
 歡喜の声を上げた少年は荒々しく腰を使って、立位の体勢でアヌスを犯す。

「ひぁ！ いきなり激しすぎる、あつあつアツッ！
 ふうあ、ソツッ！ くはあああああんっ！」
 強烈な悦波に貫かれた咲妃の膝が崩れ、床にへたり込んでしまいうる。

「挿れただけで腰が抜けちゃった？ 仕方がないなあ ほおら、抱っこしてあげるよ」
 床にあぐらをかいた少年は、咲妃の腰裏に手を掛けてグイッ、と抱え上げ、後座位の姿勢で少女の身体を揺り動かす。

「ひぁ！ あつ、あつ、ヒツ、いつ、奥ッ！ 突き上げられて……くあ、はああんっ！」

熱く、硬く猛った肉杭で尻穴を掘り返される快感は、現実とまったく違わぬ甘美な衝撃で少女の身体を火照らせ、切れ切れの喘ぎを教室内に響かせた。

「常磐城さん、髪、使おうよ」

興奮した声を掛けてきた少年が、艶やかなロングヘアの黒髪をベニスに巻き付けて手淫に耽りながら、紅潮した耳や細く引き締まった首筋に亀頭を擦り付けてくる。

「ひやう！ んっ、ヒツ、アツ、あんッ！」

耳や頬に擦り付けられるぬめった亀頭の感触や、アヌスを掻き回す牡槍の荒々しさに喘いでしまいがらも、神伽の巫女は、信司の顔をした少年たちに積極的な愛撫を仕掛けてゆく。

「おっ、お前は……こういうのも好きだったな？」

反撃に転じた咲妃は、順番待ちしている少年のベニスに美脚を伸ばし、足コキで責め立てた。

「あはああ、そつ、それ……いいッ、気持ちいいよ。もつと、タマも踏んで……くはああ！」

熱く硬く猛った肉茎が、滑らかな足裏でグリグリと踏み貫められ、強制的に先走りの粘液を絞り出されながら圧迫されると、マゾ快感に襲われた少年は、だらしなく喘ぎを漏らして腰を突き上げ、さらにハードな足コキ愛撫をねだる。

「フフッ、信司のマゾ性格までコピーされたか。それでどうだ!?」

足指を器用に動かして亀頭を揉み廻り、男の急所である二個の肉玉を踵で踏み転がしてやると、すすり泣くような喜びの声を上げた少年は、機械仕掛けのように腰を跳ね上がらせた。

勝ち誇った笑みを浮かべていた咲妃の口元に、先汁まみれの亀頭が突きつけられる。

「オレ、口で……咲妃にフェラして欲しい」

上ずった声に視線を上げると、見慣れた信司の顔が、満面のスケベ笑いを浮かべて見下ろしていた。

「う……調子に乗るなッ！」

思わず口走ってしまつてから、呪詛喰らい師はハッ！ と我に返る。

（こいつは信司の顔をしているだけで、実際はアイツではないんだ！ 私の身体も、自分のものじゃない。恥じらいを捨てて、神伽のことだけを考えろ！）

自分に言い聞かせた退魔少女は、異様な恥じらいをこらえつつ、先汁の雫を盛り上げさせた亀頭の先端をバクリと啜え込み、舌を使う。

「んふ、んっ、くちゅ、ちゅばちゅば……はふう……んむ、くちゅ、くちゅ……ちゅううっ」

「うあ、常磐城さんって、フェラチオすげえ上手いんだね。ああ、そこ、もつと舐めて……くうう、気持ちいいッ！」

スケベつたらしい笑みを浮かべる少年の顔を見ないよう目を閉じた巫女は、顔を紅潮させながらも、フェラチオ奉仕に没頭してゆく。

「はふ……んぶ……もつと、感じさせてやる」

羞恥心を振り払って責めモードに突入した咲妃は、今にも弾けてしまいうるに張り詰めた亀頭を焦らすように舐め回し、敏感な鈴口のワレメに舌先を挿入して、鮮烈な快感を送り込む。

（このまま、限界まで快感を溜め込ませて、一気に射精させれば、大量の精気を吸収できるはず……）

左右から突きつけられた二本のベニスを同時に舐め上げて、フェラチオ奉仕に没頭していた咲妃の身体がいきなり持ち上げられた。

「オレ、一番オイシイところをいただくよ」

「えっ!!」

驚き見下ろした視線の下には、床に仰向けに寝て、ベニスを垂直にそそり勃たせた少年の姿。

身体がゆつくりと下降し、割り開かれたヴァギナに、亀頭が触れてくる。

「まつ！ 待てッ！ そこは……ッ！ そこだけはダメだッ！ 止めるッ！ 信司ッ!!」

引きつった制止の声を無視して、身体が一気に下ろされた。

ぐちゅ、ジュブウウウッ！

硬く熱い牡槍の穂先が、未開の膣口をこじ開け、禁断の領域を貫いて、膣の奥深くまで抉り込まれてくる衝撃に、全身が硬直する。

「くあ！ あ、ああ……ッ！」

大きく目を見開いて見つめる咲妃のヴァギナに、信司の顔をした少年のベニスが根本まで埋め込まれた。アヌスに挿入されるのはまったく異質な異物感が、少女の引き締まった下腹をギクギクッ！ と緊張させる。

（膣に……挿入、された!!）

いきなりの膣挿入にショックを受けた呪詛喰らい師は、ヴァギナを貫いた肉柱を呆然と見つめている。（落ちて着け！ これは私の身体ではない！ だから……落ちて着け私ッ！ 取り乱すなッ！）

「咲妃のおマンコの中、すごく温かくて……キユウ
信司の顔になった少年が、恍惚の表情を浮かべて
声を掛けてきた。

「おや？ もしかして、初めてだった？ オレも初
めてだから……ウツ、動くよ！」

処女の証を引き裂かれる苦痛もないまま、牡器官
の挿入を許してしまい、困惑する咲妃のヴァギナと
アヌスで、ペニスの挿入が始まる。

「ふあ！ うつ、動くなッ！ はああんッ！」
制止しようとした咲妃の声が、甘く裏返る。
(こつ、これが……腔の快感……なのか?)

猛った肉棒で掻き擦られるヴァギナから発した快
感、疑似体験だとはとても思えぬ、快美で鮮烈な
ものだった。張りだした亀頭冠が、腔壁の粘膜髪を
プルプルと掻き擦りながら抜き挿しされるたびに、
アナルセックスとはまったく波長の異なる快感電流
が、上下に揺れ弾む肉体をビリビリと痺れさせて駆
け抜けてゆく。

「ダメだっ！ こんなのは……ふああ！ やめ……
ろっ！ ……抜いて……ひやはうらうらッ！」

「嫌だ。こんなに気持ちいいこと、止められないよ！
ああ、チンポが蕩けそうなんだあ！」

童貞少年とは思えぬパワフルで緩急つけた腰使い
で攻められたヴァギナの奥から、信じられないほど
大量の愛液が分泌され、ピストン運動を繰り返すペ
ニスの胴を伝って滴り落ちた。

「ひあ、あああう、んっ、あつ、アツ、アツ、あひ
つ、はあん、あ、あああ、きゅふううらうらッ！」

奥まで突き挿れられたペニスの先端が、腔奥にぶ
つかり、子宮を突き上げる衝撃が、息を呑むような
悦波となって、呪詛喰らい師に切れ切れの悩ましげ
な喘ぎを上げさせる。

「お尻とおマンコ、同時に犯されるのって、気持ち

いいだろ？」

アヌスとヴァギナを貫いた少年が、声をハモらせ
ながら問い掛けてくる。

「んあ、はああうっ！ やつ、やめ……ろっ！ 抜
いて……抜けええッ！ ひあ、やはああん！」

薄い肉壁越しに擦れ合いながら抜き挿しされるペ
ニスがもたらす快感は、ワnstロークごとに少女
の理性を削り取り、欲情の炎で焼き尽くしてゆく。
(このままでは、快感に吞まれる……ッ！)

「くあ、あんっ！ まっ、待て！ 前は……ヴァギ
ナはダメなんだ、抜いてくれ……頼むッ！」

危機感に襲われた神伽の巫女は、震える声で、腔
ストロークの中止を申し出る。

「オマンコズコズコされるの、嫌なの？ オレはす
ごく気持ちいいのに……」

騎乗位でまたがった咲妃の豊乳を下から持ち上げ
るようにして愛撫しながら、少年は残念そうな声を
上げた。

「うっ……く……信司の声と顔で、しゃ、しゃべる
なッ！ はあう、くは……ああんッ！」

不満げに唇を尖らせた表情も、少しトーンを落と
した声も、鮎子や咲妃に提案を却下された時の信司
そのもので、背徳的な快感と強烈な羞恥心を増幅さ
せてしまう。

「ねえ、オマンコに挿れられるの、嫌なの？」

「いっ……嫌……だ……」

データ化した淫神と融合した神伽の巫女は、残る
理性を総動員して拒絶の言葉を絞り出した。

「そう？ 本当に嫌だったなら、抜けど、ホントに
いいんだね？ 二度と挿れてあげないよ？」

未練がましい声で念を押しながら、女体の本丸を
占拠していた熱く硬くたくましい牡槍が、ゆっくり
と抜け出ていく。

ぷりゅっ、コリッ、くぶぶぶぶっ……張り詰めた

亀頭が腔壁を掻きくすぐりながら出ていく感触が、
息を呑むような女悦の波紋となって、制服姿の退魔
少女をわななかせた。

「う……あ……ああ……ッ！」

無意識のうちに引き絞られた腔粘膜が、猛った肉
茎を締め上げ、それ以上の撤退を封じた。

「んっ！ くうう、締め付けがきつすぎて、痛いよ。
どうしたの、抜いて欲しいんだろ？」

亀頭が抜け落ちる寸前で静止を強いられた少年は、
顔をしかめながら文句を言う。

(私は……何をやっているんだ!? このまま抜けば
いいものを……身体が勝手に……!?)

仮想世界とは言え、生まれて初めての腔ストロ
ーク快感に陶酔した淫神の肉体が、神伽の使命に燃え
る意識を裏切ろうとしていることに、咲妃は恐怖に
も似た戸惑いをおぼえている。

ドクンッ！ びゅくっ、びゅくんっ！
少女の忍耐をあざ笑うかのように、腔内のペニス
が力強く脈動した。牡器官に密着した媚粘膜が、狂
おしく切ない疼きに包まれる。

「ひぐうっ！ ……いっ、嫌……じゃ、ない」

しばしの葛藤の末、自分でも信じられぬセリフが、
羞恥の震えを伴って紡ぎ出された。

呪詛喰らい師の精神が、肉悦に餓えた淫神の肉体
に流され、理性を侵食されようとしているのだ。

「じゃあ、もつとしていい？ 咲妃のおマンコ、オ
レのチンポで奥まで掻き回していい？」

ヴァギナに挿入した少年が、信司の顔と声で問い
掛けてくる。

「も……もつと……して……奥まで……挿れてもい
いぞ。いっばい、掻き回して……欲しい」

目を伏せ、声を震わせながら、初めて味わう腔の
快感に屈した少女は挿入の再開をねだつてしまう。

「奥まで欲しいんなら、自分でオマンコに呑み込ん

見よ!

今こそあやつら
大罪人共を
滅ぼす好機!!

フィラエルよ
今一度天罰を
あたえるのじゃ!!

で...でも
長老...

リアリエルはすでに
穢れつくしておるわ!

天使の魔 リアリエル

中篇

選択を迫られる
天使は

この世界より
旅立たせ

お前の望み通り
きやつらの魂を
この苦悶から
救済するのじゃあ!!



漫画
COMIC

おおただけし





うわー
またあれ
やるつもりだよ

何とか
とめないか
……

とめるったって
アンタさあ……

ゴト……



う……

おい……
兄者!?
兄者じゃ
ないか!

おお……
お前なんで
こんなトコロに……!?

肉人形作ってたら
天使に殺されたと
思ってたんだが……

か……



どこだ
どこ……

うん……

ゴト……

一体何が
おこったんだ……?

エグザニエルの
ヤツだわ……!

アイツ
天使がまきちらした
魂全部に
受肉してたんだ……!

人間界を創ったって
マジだったの!?



わーわー

ママが
いなくなってるの
いつしよにさがしてー



……！



チャーンズ

あいつら
魔界のリストで
見た事あるわ
感謝してるよ



おじちゃん

兄者兄者
今はそれ
どころ
では……



さっきまでいた
メスガキ
どこへ行ったんだ
もうちょっと
だったのに



はいはい
おじちゃんたちに
まかせてねー♥

じっとしてれば
すーぐママ見つけて
あげるから
ね♥

反応
早っ！

やっぱり
こいつら
外道すぎる

ド

ド

ド

ド



おじさんたち今
ちーちゃんが腫れて
困ってたんだよ

おくちでウミを
吸い出してくれたら
ママ探してあげるよー♥



ホ…ホント？
これしたら
ママいっしょに
さがしてくれるの？



おうおう
おじさんたちに
まかせて
おきなさい…

…ふううっ
肉いじりの
途中だったから
たまらんな…

ヤダよ
何か出て
きた…

んっ
ん…

だ…だめだ
一度出すぞっ

ちやんと
吸い出すんだぞっ



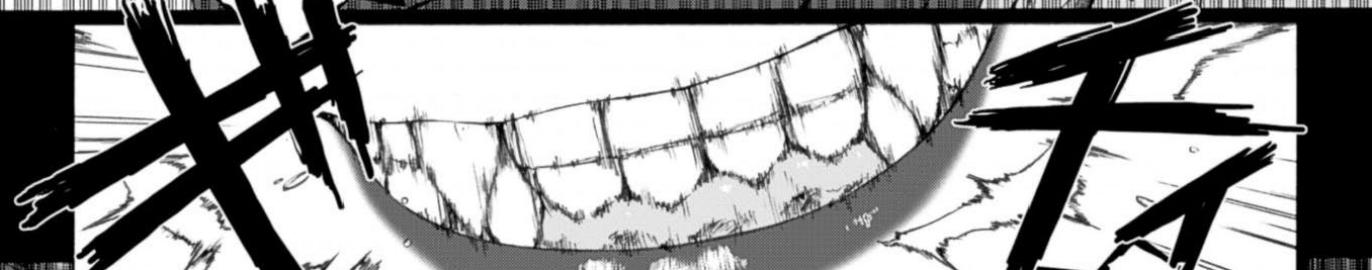


はアははははは！

ぬかしおる！

外法印を砕き
ノロイを討った今となっては

妾如きに
負ける道理はないと？



逃がさぬだと？



凶に乗るな上弦！

四道封者
桔梗太夫
ききょうだゆう

アリス



映月「葛麻 式」
MISS BLACK
原作/アリスソフト

©ALICESOFT



あなたを

ぶっ飛ばします





ああ！

主どの！
司令を



フ

皆消耗しているが
幸い深手は無い
：下手に動かず決着を
見届けるが上策か

くそ：医務室までは
とでも行けないぞ
折角ハルカさんが
スキを作ってくれたのに

110
110



ズズ...

大事無い
淫力が尽きて
ごまかしが利かなくなった
だけの事



うっ

スパル！



無論

：ハルカさんは
勝てるだろうか

正義を示す必要も

民心を慮る必要も無い

過程は問わぬから

ただ相手が死ねばいい

となれば

「忍」は手段を選びはせぬ





奴隷王女

エルシリア

～失墜の肛姦調教～

探し求めた弟の手がかりを見つけた時
無垢な王女は肛悦の女奴隷に墜ちる――



小説
NOVEL

あいえだなお
直枝愛

挿絵
ILLUSTRATION

パインパ

跳ぶ。

石畳の上にエルシリアは音もなく降り立った。麻袋を担いで夜の街を駆け回っていた三人の男達の前に立ちはだかる闇になお輝く金糸が、一拍遅れて細腰の上に収まった。

「中身は、人ですね？」

愛らしい音色の、しかし完全な発音の音が凛と響く。サファイアの大きな瞳を、険しく細めて男達を見据えた。

「……なんてめえは！」

女神の降臨でも見たかのように呆けていた男達の先頭が、粗野な口ぶりで誰何する。少女は一つ溜め息をつくとき、背負った棍を抜き、男達に突きつけた。「私の質問にだけ、答えて下さい」

一方的な物言いに再び男達は激昂しかける。しかし、素肌を晒す瑞々しい太股や、くびれた腰、すらりと細く伸びやかな手足に月の冴えに浮かび上がるきめ細かな白い美肌――。

美しい全身を目で犯すようにねっとり眺めると、間を置かず揃ってにたにたといやらしい笑みを浮かべだした。

「そうだ。ご明察って奴さ。この街にもう用はねえ。トンズラこく前にいい土産もんを見つけてよ。付けて攫ってこの通り。上玉だ。あんたほどじゃないがな」

先頭の男はひけらかすようにべらべらと喋る。

「……あなた達のような人がいるから……！」

双眸が険しさを増す。男達に怯んだ様子は無い。ただ小馬鹿にしたように嗤うだけだ。

それもそのはず、エルシリアはなよやかな乙女であった。

誰もが見惚れるスタイルとは裏腹に、黒目がちなまろい瞳、蔷薇色の頬と、その顔立ちが覗み付ける表情さえ可愛らしく見えるほど幼い。

三人の男を相手に、立ち回りを演じられる豪の者にはとても見えない。それどころか、異性に触れられただけできやつと叫び、顔を赤くさえしそうだが、

しかし、思わぬ幸運に舞い上がっている男達は理解していない。瞳と同じ空色に染められた半甲冑が、静まりかえった夜の中に、僅かな物音すら立てないのは、一体何を意味しているのかを。

「中の方を解放して、おとなしくして下さい」

「そいつあ逆だ。女が棒きれ振り回して暴れるもんじゃねえ。俺がうっばらつて金に換えてやるよ。あんたと一緒にな」

男達がにじり寄ってくる。

一つ大きく息を吐いた。愛らしいかんなばせから、一切の表情が消える。

「おお怖い怖い」

侮りも露わに、男が間合いに踏み入った。ゆつたりとした動きで袈裟懸けに棍を振る。

人攫いは安易にそれを受け――。
「危ね――え……？ あ……ああああ

ああ！ なんだあああ!! いてえよお おおおお！」

グシュと嫌な音を立て、手首が砕けた。軽やかに振られた得物が、必ずしも本当に軽いつとは限らない。

「鋼の棍を空手で受ける者がありますか」

抜いて返し今度は足をすくい上げる。男は二度宙で回り、軽業に失敗した芸人のように、石畳に叩きつけられた。

残りの二人が絶句する。顔を見合わせ、麻袋を置くと、脱兎のごとく逃げ出した。

「あ……？ おい……！ あいつらあああつ！」

痛みと怒りで喚き散らす男に棍を突きつける。

「安心して下さい。必ず彼らも捕まえて、然るべき報いを与えます」

「……へへっ、ま、まあ待つてくれや。俺あこんな稼業うんざりだつたんだ。足を洗う。もうしねえ。だから……な？」

卑屈な半笑いで男は見上げてくる。少女も、その内心を隠すように作り笑顔を張りつけた。

「それでは私の質問に答えてくれますか？」

「……ああ！ なんだつて答える！」

「男の子を捜しています。私と同じ髪と目の色をした、可愛らしくて、その場上優しく賢く、正直な子です。その場しのぎの嘘とは無縁の、あなたとは正反対な」

凶星を当てられて男の顔がぎくりと強張る。にこやかな幼貌の異様な圧力に押し出されるよう、洗いざらい吐き出し始めた。

活気はある。だが、街路にはゴミと汚物が散乱し、行き交う男達の人相はどれも致命的なまでに怪しい。早くも5人ほどならず者を叩き伏せた。聞きしにまさる治安の悪さだ。

隣国のこと――心を静めるため何度唱えたか、数える気にもならない。

人攫いの男を絞り上げ聞き出した、国境都市ヨハネスノバールでは、裸に剥かれ、鎖と枷で縛められた女や男が、競られ落とされ捌かれていた。

(アンリもこんな風に……家畜みたいに……！)

つとめて無感情を装いながら取引を眺めるが、その心中では強い怒りと焦燥が逆巻いている。

アンリは山岳国家ヴァルクランドの王子であり、ただ一人の弟だ。一年前拐かされ離ればなれになった。

重い武器を軽々と振るわせる身体強化の魔術を頼りに、エルシリアはそのゆくえを追って、放浪を続けている。

弟は少女と紛うほど愛らしい。魔術も戦いに向かない。だが、あの子は溢れんばかりの知恵を隠し持っている。

胸甲に彫られた鳳のレリーフに手を当てる。この鎧が証だ。

かつてエルシリアは、国守の聖獣をも打ち落とす、落鳳」とあだ名され忌

み嫌われたことがある。

武威を示すためと、ある諸侯の進言を受けて、父王が下賜した大鎧が原因だった。顔まで隠す不気味な甲冑を纏って戦うには、姫武者はあまりに強すぎた。

脱げば武威に傷が付く。耐えること以外、何の手も思いつかなかった。

袋小路から連れ出してくれたのは、アンリだった。ある年の誕生日、彼がこの空色の鎧を贈ってくれたのだ。得意満面の弟に請われるまま、優美な具足を身につけ、衆目に顔と肌を晒す気恥ずかしさに頬を染めながらも、国守の務めに向かう。

それだけですべてが反転した。無骨な大鎧に隠されていた可憐は、不自然なほどの広まりようで周知となる。禍々しい、鳳墜としは、その美しさで聖獣を従え胸甲に宿した。鳳のエルシリアに二つ名を変えた。

それ以来、確信している。あるものと言えば山ばかりのヴァルクラントの未来を拓くのは、アンリだ。そしてそれ以上に、リア姉さまと自分を慕い、腰に抱きつき甘えてくる弟は、何よりもの安らぎだった。

腕の中につっぽりと収まる温もりが、触り心地のよいサラサラの髪が恋しくて仕方ない。キラキラと輝く瞳と笑顔が、悲しみに曇っているのかと思うと居ても立ってもいられない。

無事でいて欲しい。早く逢いたい。ただその想いがエルシリアを突き動か

している。

ふと内省から立ち戻り、市に目を戻す。始まったばかりの競りの品は、アンリと同じ年頃の、赤毛の少年だった。気づいたときには手を挙げていた。「相場の倍だとよ」

「お、物陰に向かうぞ。お盛んなこつて」

はやし立てる声を無視して、濃んだ瞳の少年を路地裏に連れ込む。

「……何でもします……だから……ぶたないで」

「では、笑顔を見せてくれますか？」肌を傷めぬよう注意を払って手枷と首輪を素手で碎いた。

偽善であることはわかっている。そもそも弟を見つけるまでは余所事に目をやらないと誓ったはず。目立つ行動は慎むべきだった。

それでも、呆然と縛めの残骸を眺めていた少年の表情が爆発的な歓喜に変わるのを見て、弩の弦のように張り詰めていた気持ちがあふつと緩むのを感じた。

今にも叫び出しそうな少年に顔を近づけ、唇の間に人差し指を置く。年頃の少女らしい、飾らない笑顔で。

はれて解放奴隷となった少年に服を買い与え、封蝋を施した書簡と路銀を渡して送り出し、エルシリアは闇夜の商館に忍び込んだ。

上玉はロクサーヌ商会が高値で買い上げる。人攫いの言葉に従うなら、ア

ンリの足跡はこの堅平な石造りの屋敷にある可能性が高い。

鍵をねじ切り、書庫らしき部屋に入る。視力を限界まで強化。虹彩が猫の目のように輝きだす。片端から書類綴じをあさっていった。

「見つけました——！」

心臓がどくんと鳴った。通し番号、性別、髪色、目の色、そして——日付と価格。奴隷の取引台帳だ。興奮に震える手で失踪した日付まで一気に飛ばし、羊皮紙を繰る。

少女、少女、成人男性、少女、少年、黒髪。成人女性、成人女性、少女、少年赤毛。少年金髪灰目。少女、少女——。

無機質に並ぶ奴隷の特徴に眩暈を覚える。十を超える人数がまだ、一日分の取引にもなっていない。

懐から一粒宝石を取り出す。魔力で砕くと、とたんに思考が冴え渡る。封じた力を発動する代償魔術。先観の二つ名を持つアンリから贈られた、明晰化の呪石だ。

手痛い喪失だが、背に腹は代えられない。一葉に一秒ほどの猛烈な勢いで目を通していく。

少年金髪碧眼。中ほどで特徴の合う取引を見つける。だがその価格はたったのフリオリ銀貨二百枚。私の弟がこんなになんて安いわけがない。また繰り返す。

見つからないかと不安がよぎったが、教典もかくやという厚さの台帳の最終

数ページ前に、あきらかに異質な取引を見つけた。

少年金髪碧眼。特徴の横に大量の備考。端麗無病。文語筆記に会話、ほか数カ国語。算術、会計、弁論修辭器楽兵法——そして八百ドミトリアヌス帝金貨に及ぶ法外な買い取り額。そしてエルシリアにも聞き覚えのある豪商の名前——。

「間違いないですね……」

「あら、見つかったの？ 捜し物」背に差した鉄棍を抜き打ちざま頭上で旋回させ、振り向き、構える。

「——いつの間にならなくなった？ 見つからなかったの？ 甘ったるい香が鼻に付く。こんな物にまで気がつかなかったのか。」

動揺を隠し睨み付ける。「貴女ね？ アンリの愛しいリア姉さまは——」

過剰な艶を含んだ声が耳に障る。とにかく派手な女だった。踵の高い赤の靴。足首が絞られたゆつたりとした朱子のパンタロンは生地が透けているうえに両の腰にスリットが入り、肉感的な脚線が露わになっている。

上半身は紺のビスチェ。扇情的に開いた胸元は不自然なほど盛り上がっている。毛皮のストールから覗く熟れた白い肌に、生理的な嫌悪を催した。

娼婦じみた装いにも負けないほど、顔立ちもけばけはしい。燃えるように波打つ豊かな赤髪。黒々とした睫毛に縁取られた妖しい瞳。口元には悪意を

著者近況

媚で割ったようないやらしい含み笑いが張りついている。

「何よりも苛立ちを誘うのは、じやらんやらと身につけた大量の装身具だ。腕輪に指輪。ご丁寧に十指すべてにつけ爪が施されている。」

「中でも揃いの意匠の首飾りとピアスは別格の輝きを放っている。国の宝物庫にも等しい物はなかったであろう。」

「どれほどの商いを繰り返せばあれほどの品々を身につけられるのか。問答無用で叩きのめしてやりたいと猛る身体をなだめすかし、酷く冷たい声で告げる。」

「目的は達しました。痛い目には遭いたくないでしょう?」

「よく言うわ。痛い目に遭わせてやりたいって顔してるわよ? 美少女が台無し!」

「女などとうに捨てました!」

「じゃあ弟がそれを拾ったのね!」

「……………どういう意味ですか!」

「貴女にそっくりの大きなお目玉をうるうるさせて、オンナノコのほうを虐めて下さいっておねだりするの。とっても可愛かったわ。手放しちゃうのが惜しくなるほど!」

全身が憤怒に総毛立つ。気づいたときには腰の短剣を抜いていた。

木製の柄を握り碎き、なかごを露出させる。棍の先端の溝にはめると、怒りを込めて潰す。穂先近くが握り跡の形にくびれた即席の包丁槍ができあがった。

「……………呆れた。オークだつてもう少し優雅だわ!」

「泣いて詫げればオークより醜い肉塊にならず済むかもしれないよ?」

「悠長なこと。人は殺したことがないのね!」

「嫣然と微笑む女の右手が、いつの間にかピアスに触れている。」

「まただ! 何故気づかない! 普段なら瞬時に詰めて手首ごと切り飛ばしているような、怪しい動きを許したことに愕然とする。」

「ピアスが鈍い光を放ちながら砕ける。崩壊は首飾り、左のピアスと続いた。残光が複雑な模様を描きながら装身具の跡を超えて伸び、やがて円陣を形作る。」

「唐突に槍の重さが増した。いや、槍だけではない。身体の要所を守る鎧もくずおれそうになるほど重い。」

「うふ。これだけ贅沢な魔術は初めて。さすがの、鳳も動けな!」

言葉を持たずに邪魔になった槍を投げ捨てた。遮るように大きな音が鳴る。石床にひびが走った。

「先手を打たれて身体強化を解呪された。あるいはそれ以上、弱体化の魔術かもしれない。今の自分を見目相応少女なみの力しか出せないだろう。」

だが、不用意に槍へ視線を向けた女に確信する。闘技は素人だ。ガシャガシャと無様な音を立てながらも間合いを詰める。視線を左手で遮り、へその露出した腹に右拳を繰り出した。

「い…ぎつ…貴女なんでもまだ…!!」

だが、盾の重さに阻まれて軌道がぶれ、腰骨に当たり、沈黙させることができない。女の問いを無視して軸足を踏みしめる。細首に右足を叩き込もうとするが腿が上がらなかつた。

「魔術が進行している!」

「焦りを思考の脇に追いやつて、とつさに足払いに切り替える。」

「きゃっ!」

「甲高い悲鳴を上げて女が尻餅をついた。無駄に大きな乳房の上に馬乗りになると肩口を左手で押さえ込む。」

「ひつ…ま、待ちなさい!」

恐怖にひきつった顔を潰そうと、右の盾を振りかぶる。

しかし、エルシリアの細腕は背後から忍び寄っていた何者かに掴まれる。そのまま両脇を羽交い締めにされ引き剥がされた。

むき出しの太い手が視界に入る。腕を伸ばして抜けようにも筋肉の壁に挟まれる。有効な手が打てないまま身体は力抜けていき、ついに宙にぶら下げられたまま動けなくなつた。

「な……にをグズグズしてたのよこのノロマ!」

息を切らせてへたり込んでいた女が腰帯に吊つていた短鞭を抜き放ち、エルシリアの頭越しに男の顔を叩く。耳の後ろから破裂音とくぐもつた呻き声が聞こえた。

「それが助けてくれた者への仕打ちですか!」

吐き捨てた王女を、女はほんの一瞬激情を込めて睨みつける。

だが、絶対的優勢に余裕を取り繕うと、まだぎこちないながらも表情に笑みを張りつけなおした。

「う…ふふ。勘違いしてるみたいね。これはご褒美。証拠を見せてあげる。押しつけなさい!」

女の命令により、太股の裏に何か硬い物が当てられた。スカートの生地ごしに、遅れて熱が伝わる。そして首筋にかかる荒い鼻息!」

その正体が、男のアレ。だと察して、思わず短く悲鳴を漏らした。

「あら、可愛い声!」

「……………狂っていますっ!」

「うふふ、そうね。だけど貴女もすぐにわかるわ。その狂った世界の素晴らしさが!」

女が鼻先に左手の小指を近づける。つけ爪が輝きと共に自壊し、エルシリアの意識は闇へと落ちた。

隅に置かれた燭台が、タイル貼りの内装を申し訳程度に照らしている。

薄暗い部屋の中央で王女は目を覚ました。

身体の内側がひんやりと冷たい。床に直接寝せられている。ポルトで固定された鉄枷が四肢を縫いつけていた。

普段なら難なく引っこ抜けるはずだが、ピクともしない。やはり魔術は封

じられたままだ。

肌寒さに、自分が生まれたままの姿であると感じた。

「——っ！」

極限の羞恥と焦燥で、心臓が早鐘を打つ。再び悲鳴を上げそうになり、意地だけでそれを飲み込んだ。

先ほどの女が椅子に腰掛け、愉しげに見下ろしていた。斜め後ろには、奴隷の男が控えている。

異様な風体だった。その顔面は口さえ塞がれたマスクで覆われている。

反して逞しい体躯には、何も身につけていない。股間に垂れ下がったグロテスクな凶器が丸見えになっていた。

男に視線をやらずに済むよう、座る女を強く睨み付ける。

「ご機嫌麗しゅう。エルシリア様」

「……名乗りなさいっ！」

動揺を見透かしていると言わんばかりに嗤う女に、刺々しく誰何した。

「私？ 私はロクサーヌ。この商会の主よ。奴隷の調教と、お薬の調剤をしているわ」

「では貴女なのですね？ 私のアンリを金貨に換えたのは……！」

そうだ。見つけたのだ。弟の足跡。この奴隷商の館で。心の内で激情が燃え上がる。

「そう。今度は貴女の番。それにしても……綺麗な身体ねえ。まるで妖精みたい。とつても可愛いわ」

ロクサーヌと名乗った女は、悪びれもせず頬に手を当てうっとりとして王女を

見やる。

女の言葉通り、少女の裸身はこの上なく美しかった。

重い鉄槍を振るう姿からは想像もできないほど、エルシリアはか細い。

形のよい鎖骨の浮き出る、抱き締めただけで折れてしまいそうな儂げな風情は、同性の目さえ釘付けにする。

かといって、少女の身体は子供のようにやせっぽちというわけでもない。

甘い丸みを帯びた尻にきゅっときゅつとくびれた腰。横寝でたぶんと左に寄った柔乳も王女が年頃を迎えた乙女であることを強く主張していた。

ロクサーヌの思わぬ賞賛に、二の句が継げなくなる。鳳の二つ名を持つ王女に対して、可愛いなどと口にできたのはアンリだけだったのだ。

「……ば、馬鹿にしないで下さいっ！」

「悲しいわ。信じてもらえないなんて……本当、いくらになるか想像もつかないぐらいよ」

「たとえ純潔を奪われたって、貴女の売り物になんてなるのですか！」

安い挑発とはわかっていても、堪えきれず怒鳴りつける。

「お馬鹿さん。花を手折る権利が、一番高く売れるのよ。私のお仕事は貴女の価値を更に出せること。身体の中まで綺麗にしてね」

意味深な言葉に、悪寒が走った。

ふと臀部の違和感に気づく。口にすることも躊躇われる所に何かを差し込まれているような――。

勢い込んで振り返る。背後には金属台にかけられた満杯の革の袋。伸びる管が腰の後ろに向かっている。

「な、なに、何ですかこれは！」

「知りたいの？ 教えてあげなさい」

主人の言葉を受けて、奴隷男が近づいてくる。

何をするつもり？ 袋の中身は何？ 根元の留め具に手がかかる。鉄が擦れるのも構わず手枷を抜こうと暴れる。外れない。外れない！

そうだ。管の先はお尻に。なら息めば――でも、そんなはしたない真似！

思考だけがぐるぐると空回りしているうちに、弁が開放される。生温い液体が腸内に流れ込んだ。

「う……うう……いやあ……っ！」

逆流の恐怖に暴れることもやめ、されるがままに薬液を注入される。得体の知れない何かの身を撫でる感触は、ただひたすらに気持ち悪い。せいぜい二分程度の注腸の時間が、数時間に及ぶ責め苦のように感じられた。

「あうんっ！」

少女の秘すべき花園を踏み荒らした管が抜かれる。そのまま粗相をしてしまふのではないかと恐ろしくなつて、尻たぶにえくぼができるほど括約筋を締めつけた。

器具一式ごと、男が元の位置に戻る。さまは、まるでこれから起こる悲劇から回避させたようで、王女を絶望的な気分させる。

刺激を嫌い、無言で女を見上げる。

縋るような目になってしまふのが、悔しくて仕方なかった。

「不安げなお顔も、とつてもそそのわ。今貴女のお腹に入れたのは特製の流腸液よ。中の汚い物をすばやく溶かしてお肉を柔らかくしてくれるの」

「なんで……こんな……！」

「うふふ。今から貴女のお尻の穴を、殿方にご奉仕するためのエッチなおまんこ穴に改造するの。汚れたままと好む方もいらつしやるけど、大抵は気持ち悪さで萎えてしまふわ。それに、どんな綺麗な子でも身体の中には毒がいっぱい。ちゃんと処理して挿れないと、一分経たずにおちんちんが腫れて痛くなつちゃうの。毒消しの効果もあるのよ？」

そんなことを訊いているんじゃないと怒鳴りつけた。だが、とうにそんな余裕はなくなつていた。

額に脂汗を浮かべ、色みの変わった唇を震わせながら排泄を堪える。身体の末端から血の気が引いては悪寒を走らせ、へその下がきりきりと痛む。

「あら、そんなに我慢しなくていいのよ？ どうせ一回じゃ出し切れないんだから。それとも緊張で出せなくなつちやつたかしら？ そういうときは左の脇腹を下に押し込んでみるといいわ手伝ってあげなさい」

だが、ロクサーヌは抵抗をあざ笑うように再び男に命じた。

「い……いや……っ！」

近づいてくる。股ぐらの芋虫をむく

わくと膨らませながら。理解できない意味がわからない。ぽっこりと膨れた白い下腹に節くれ立った手が触れる。絶叫がこだました。

尊厳を根こそぎにされた気がする。それも繰り返し。水で流された後も籠もる臭気が、自己嫌悪を掻き立てる。油断すると嗚咽を漏らしそうになるのを必死で堪えた。

「……………これしきでっ、わ、私がいなりになり、なると思つたらっ、お、大間違いです……………」

「当たり前じゃない。こんなのはただの下準備よ？」

涙声での強がりさえ軽くないなされる顔が赤くなるのは羞恥のためか怒りのためか、もう自分自身でもわからなかった。

「心配しなくても、これからちゃんと気持ちよくしてあげるわ。待ち遠しくて、自分から進んでお流腸するようにするまでね」

高みの見物を決め込んでいた調教師が初めて近づいてくる。捕らえられたときと同じように、魔術で眠らされた

「もういいわ。起きてちょうだい」

柔らかな手が頬を撫でる。つぶらな瞳をとろんとさせながらも、エルシリアは意識を取り戻す。

頭の上で、じゃらと鎖が鳴る。両手を縛められ、天井に繋がれていた。半身を侵していた不快なぬめりはす

べて清められている。自らが悪臭の発生源になつていくという、耐えがたい恥辱からは解放された。

加えて、いつの間にか絹の下着一揃いを身につけている。先ほどの扱いに比べれば幾分かマシなはずだ。

それでも、胸元に施された鎧と同じ鳳の刺繍だけはどうしても許せない。騎士としての誇りを、アンリとの絆を酷く愚弄するものだった。

「ばっ……………馬鹿にして……………っ！ 私の鎧……………返して下さい……………」

思考がぼやける。ぐずる子供のようにな可愛らしい抗議に口クサー又は歪んだ慈愛を込めて微笑む。

「フリルとレースが女の鎧。あんな無粋な物、貴女にはもう必要ないの。よく似合ってるわ」

確かに純白の下着は吸いつくように身体に馴染んでいて、それが余計に悔しい。

細い腰を更にコルセットで締め上げるビスチエドレスにはお尻が隠れない短さのフリルスカートが縫いつけられている。

肘までの手袋や、清楚なガーターズトッキングも含め、総レースの見事な代物だった。

だが、最も秘すべき聖域を隠すものがない。髪色と同じ金に輝くしげみと、その下の二つの丘に守られる、狭く細い桃色の陰唇だけが露わになつている。ある意味全裸よりよほど扇情的だ。童顔の王女が纏う背徳的な露出下着

は、意匠の少女趣味と相まって、倒錯した色気を醸していた。

頼りない感触が、身体を無意識の内にくねらせる。思い知らせるように、また鎖が鳴った。

「なあに？ 誘つてるの？」

見咎めて愉しげに調教師は王女を詰

る。ビスチエに隠された林檍のような初々しい膨らみの上に、メロンを思わせる爆乳がたぶんと乗せられた。

「やつ……………んっ……………！」

悩ましく反つた背中を、無防備な脇を、女主人が撫で回す。

シルクの滑らかな感触が擦れ、留め紐の隙間から直接に触れられる。甘いこそばゆさが背筋を走らせた。

悪意の柔手は下半身に伸びる。巧みに丸出しの小尻を避け、腰骨を通り、太股へ。

「若い手触り。嫉妬しちゃうわ」

もぎたての葡萄のような張りのある肌を思うさまに堪能し、熟し切った双乳をゆすゆすとすりつける。

硬い蕾を温め開くような優しい愛撫に不自然なほど身体が火照つていく。薄い生地にじんわりと汗が染みみる。

ふいに口クサーが片手を離し、何かを取った。

その正体を確かめるまもなく、柔桃の奥の、密やかな窄まりに押し当てられる。ぬちゃりと粘つく潤滑液が、肌に障った。

「ひっ！ なあにっ!？」

怯えた声を上上げるが、緩みかけた身体は酷く反応が鈍い。

僅かな抵抗さえできず、浄化された内臓器官は、されるがままに未知の道具をぬぶぬぶと受け入れた。

「え……………？ う、うそ……………！ あ、やあ！ やだあ！」

大きな目を更に見開き、寄る辺をなくした子猫のような、悲痛な鳴き声を上げる。

人の指を過剰に長くしたような何かを、調教師は粘膜を傷つけぬよう、くなくにと回した。

「ななななにをいれたんですかやめてくださいぬいてください！」

「スライムを煮詰めて造った張り型よ透き通つて綺麗なの。後で見せてあげる。おちんちんそっくりの感触でしょ？」

「し……………知りませんっ、そんなのっ！ んんっ！」

「もつたいないわ。今からたつぷり教えてあげる」

女の手指が尻たぶを撫で回す。力みできゅつと締まった、それでもなおおふにふにと柔らかい媚肉を更に持ち上げるように揉みこむ。その間も淫具は巧みに体内に固定され、体中に鳥肌を立てせる。

「綺麗にしたからとつても柔らかくなくつてるわ。痛くないでしょう？」

調教師の言う通り、痛みはない。ただ排泄孔を陵辱される異常感覚に翻弄される。

蹴り飛ばして撥ね除けることもでき
るはず。だが、奇妙なだけだるさに、ど
うしても力が入らない。

呼吸が乱れ、女の纏うムスクの香り
が肺に充滿する。余計に身体が火照り、
肌が敏感になつていく。

「変です……っ……この匂い……！」

「女を狂わせる媚薬香よ。中毒にはな
らないから安心してね」

自らもうつつすらと頬を紅潮させなが
ら、尻尻から離れた手で真白の肌をロ
クサーヌは愛でる。

膝頭から内腿を、開いた手のひらが
はい上がる。背骨に沿って親指の爪が
優しく肌を搔く。

その間も、ねち、にちとデイルドが
直腸をこねる。下腹がぎゅうと疼いて
締めまり、掲げられた手を握り締めた。

「やつんっ……こんな気持ち悪いこと
して……何になるというのですかっ」

「気持ち悪い？ それにしては甘あい
お声ね？ それに、お尻は欲しがって
放さないじゃない」

「……………んんうっ！」

女の言葉を否定したいという一心で、
恥じらいを捨て、排泄時のように息む
だが、ぬるりと腸壁をなぞり抜けかけ
た責め具を再びねじ込まれた。

「ひうっ！」

「だめよ。はしたない」

毒婦はくすくすと嗤いながら、菊花
をこね回す。からかわれたのだと気づ
いて、かっ顔が熱くなった。

「もう、なんて可愛い……！」

調教師が興奮の面持ちで艶めかしく
吐息を漏らす。蠱惑的に唇を歪ませな
がら、豊満な肢体を密着させてくる。

たぶたと揺れる熟女の胸肉が、サ
ラサラの生地を通して王女の果実を翹
る。その先端が、若芽が萌えるように
膨らみしこり始めた。

「いやっ……あんっ……違います……こん
なのっ……！」

極度の羞恥に瞳が潤む。はしたなく
漏れる声が悔しくて、泣き出す前の幼
子のように唇を囁んだ。

「何も違わないの。か弱く身体を震わ
せて、可愛いお顔を真っ赤に染めて、
殿方にお情けをねだるのが女の子の本
当の姿。間違っていたのは長物を振り
回してお転婆をした今までの貴女。
だから、ここで気持ちよくなるのも自
然なことなのよ」

尖る胸先の痺れを、火照る肌の疼き
を、巧みに尻穴を翹られる違和感に混
ぜられ、すり替えられていく。思考が
千々に乱れ、言い返すこともできない。
妖しい感覚が腰骨の奥を走る。

怖い。敵意も吹き飛ばさず、未知の
淫らな刺激がただ怖い。

王女の昂りを調教師は目敏く察し、
淫具の動きを大きく速くする。入口の
窄まりがぐちり、ぐちりと回し広げら
れる。

「やつ……あんっ！ やつ……んんっ……
……お、おかしいですっ……ん……！」

背筋を強い震えが駆け上がったいく。
涙が滲んで視界がぼやける。いやいや

「やつ……あんっ！ やつ……んんっ……
……お、おかしいですっ……ん……！」

背筋を強い震えが駆け上がったいく。
涙が滲んで視界がぼやける。いやいや

「やつ……あんっ！ やつ……んんっ……
……お、おかしいですっ……ん……！」

するようには身体を左右にひねると、小
尻が可愛らしく揺れた。

知らずに力がこもり、腕を締めよう
として鎖に阻まれる。背中が反って、
内股になりはしたなく内腿をもじもじ
とすり合わせる。

「気持ちいいのね？ いいのよ？ ほ
ら！ お尻の穴こねこねされておかし
くなっちゃうなさい！」

狭まる後ろの肉洞を、ロクサーヌは
更に速度を上げてこじめる。くちやくち
やくと卑猥な音が耳を翹り、双臀がぶる
ぶると震え出した。

「やめて下さい……！ あっ……な
に!! ふうっ！ んんんんんうっ！」

瞬間、腰がピクンと跳ねた。括約筋
をきゅつと締めつけ、思い切り食いし
ばった口から嬌声を漏らし、絶頂とい
う言葉も知らないまま絶頂した。

何が起こったのかも理解できない。
ひくん、ひくんと細い身体を愛らしく
痙攣させながら、混乱の極みの中、た
だ荒い息をつく。

「初日にイッた子はさすがに初めてよ。
さすがに王女様、ケツマンコ奴隷の才能
もお持ちでいらっしやるのね」

屈辱的ないやらしい言葉に、耳まで
顔を染め、ただ恥じらうことしかでき
なかつた。

「あうんっ！」

「あうんっ！」

狭い肛道をこね回していた調教師が
引き抜かれる。淫薬を刻み込まれた菊
門が名残惜しげにヒクついた。

「……つても可愛かつたわ。ご褒美をあ
げよう」

くつりと身体を弛緩させた王女の目
の前で、何を思ったか調教師は、潤滑
液と王女の腸液でぬらぬらと光る疑似
肉棒を、ぷつぷつりと肉厚の唇に含む
口をすぼめ、表面をしごいてちゅぽん
と抜いた。

あつげにとられ固まっていると、女
主人はぶにぶにと柔らかい頬を両手で
挟み、桜の花びらのような唇を奪う。

「んう……!! や、やめて下さいっ！」

強烈な忌避感が湧き上がり、一気に
陶酔から醒めた。しやにむに暴れ、ロ
クサーヌを肩で突き飛ばす。

「……おかげで目が覚めましたっ」
正直喋ることさえ気持ち悪い。燃
える腫で睨み付ける。

「平気よ。あんなに綺麗にしたらん
だから——ふふ。でも、調教しがいがある
わ。毎日太くしていつてあげる。おチ
ンポはめられるまで広がったら、たく
さんずぼずぼしてあげるから、楽しんで
して下さいね」

恐ろしい台詞に、ぞわりと鳥肌が立
つ。引き抜かれた後も残る官能の残り
火を、必死で意識の隅に追いやった。

長い長い透明の蛇の頭が二度三度と
腸奥をこねると、ずるりと一気に引き
抜かれる。

「きあああああああつ！」

大きく張ったかえしに臓腑を掻きむ
しられ、エルシリアは甲高く絶叫した。
身体中から風邪をひいたように汗が

「きあああああああつ！」

大きく張ったかえしに臓腑を掻きむ
しられ、エルシリアは甲高く絶叫した。
身体中から風邪をひいたように汗が

「きあああああああつ！」



イセリア 英雄戦記

the Legend of the Aespera War



帝国末姫による爆乳調教を受けたフィオナは
ついに非情なる皇帝ギユスターヴに献上される。
国の威信と誇りのために気丈な態度を取るも、
露出過多な恥辱の姿をキャンパスに描かれ、
屈辱の処女喪失を味わう!

第14話 被虐姫破瓜画

せんやよみ
小説 千夜詠 挿絵 ぼたん 牡丹
NOVEL ILLUSTRATION

時代の行く末を暗示するような鉛色の厚い雲に覆われた空。北方の大地に肌突き刺すような凍てつく風が吹き抜ける。煉瓦造りの灰色の街並みに戦時の重苦しさを示すような住人の表情がいくつも過ぎていく。そんな帝国城下の片隅に別世界のような賑わいを見せる一軒の酒場があった。

昼間から荒くれどもが酒を呼んで大声で騒ぎ立てる。落人から傭兵に身をやつし、故郷を思い出してやたら泣く者。その隣のテーブルでは正規兵の団が制服の襟を崩して、派手な女を脇に寄せては猥談で盛り上がっていた。カウンターには流れ者。召し抱えられたの出世を夢見て、現実の厳しさに愚痴を零す。真つ黒なローブに身を包んだ怪しげな男もいれば、盗賊が堂々と賭け事を楽しんでいた。ここは客を選ばず、誰も拒まない場所。自分の身を守る術さえ持つていれば、この国で一番過ぎしやすく、もつとも怠惰な空間だった。

軋むような扉の音を立てて、またひとりがここに足を踏み入れる。ここ数日も通い詰めた常連ならば知っているその姿であるが、そうでない者は興味と驚きを込めた視線で彼女を追った。あまりにも場違いであつたからだ。「にやんにやんにやア、ふにやんにやにや、にやア……」

能天気すぎる鼻歌を口ずさみながら、吹き溜まりを絵に描いたようなこの場所を臆することなく進みゆく。屈強そ

うな男たちの胸元にも届かないちびっ子だった。目を引くのは頭部に近い場所にもふたつ突き出た猫のような耳。愛らしく振られる臀部からも猫の尻尾が伸びていて、歩みの度に左右に揺れた。高貴さを感じさせる赤いドレスに首に鈴を着け、ただ胸元と肩にだけ強固なプレートが張りついている。そして細い二の腕にコックの帽子を被つたぬいぐるみが抱きついていて、濃紺の髪をふたつに結わえた美少女。チラリと視線を送つた途端に、その男の目尻は下がっていく。人殺しに心を痛めぬ輩が、まるで溺愛する孫を見るような眼差しになるのだ。そのくせこげ茶色の気の強そうな瞳にドキッと女を感じさせる。一度カウンターを見上げるようにして、よいしょ、と高い椅子の上に座り込んだ。

「親父、ミルクにや」
「あらかじめわかつていたようにオーダーの直後には彼女の前にジョッキに注がれた牛乳が置かれる。」
「ぐいっとそれを飲み干すと、」
「ぶはっ、この一杯のために生きてるにや……」

黙つてお代わりを注ぎ込むマスター。そんな彼にくだを巻くように大きな猫目を細めて少女は言う。
「この間の情報……、まったくのガセだつたにや。町一番の情報通じやにやかつたのか、まったく……」
「勘弁してくださいよ、ミーニャンさん。淫祇邪教なんて、噂話程度しか聞

こえてこないですぜ。本当にそんなのあるんですかい？」
苦笑いを浮かべる初老の男に、うにゆにゆ、つと唸つてさらに瞳を据える。だがまた一口ミルクで咽を鳴らすと、濃厚な味わいに口角を上げて機嫌の回復を示す気分屋ぶり。そんな表情をコロコロと変えるミーニャンのカウンターに、帝国兵らの噂話が届いた。

「おい、見たか、イセリアの皇女がああばずれ姫に連れられて王宮に入ったのを」
背中越しに聞こえたそれにピクッと大きな猫耳が動く。

「おいおい、滅多なこと言うなよ。あれでも一応、姫様なんだからよ」
「それよりイセリアの皇女さ。ちらつと見ただけだが、これまで陛下のもとに連れてこられた女の中でも、ありや、最高じゃねえか。乳も、へへ、でかつたしよ」

「ああ、清楚で可憐といった顔立ちなのに、すつげえエロい身体つきしてたぜ。ちくしょう！ あれも、陛下にヒイヒイ泣かされるのか」
ほろ酔いかげんの兵士たちは、敵国の姫君が陵辱に喘ぐ淫らな姿の妄想を肴にジョッキを空けていく。愛国と忠誠を誓つた公国の騎士がここにいたならば、鬨気を剥き出しにすぐに剣を抜いてその口を塞いでいたことだろう。

カウンターに向こうではマスターが小さな溜め息をついた。
「やれやれ、最近じゃ、城付の兵まで

昼間つからやつてくる。前線には魔物までいるつていうし、どうなつちまつて……つて、ミーニャンさん？」
いつの間にか小柄な猫耳少女はカウンターから消えていた。乱雑に酒瓶の転がったテーブルとテーブルの隙間を縫つて、彼女は帝国兵らの前に立つ。

「んあ？ 何だお嬢ちゃん」
星の煌めきを全身に纏つたような愛らしい容姿を一度舐め直すように見詰める帝国兵ら。目尻がぐつと下がっては、むさくるしい場所に現れた華の存在にやけるのだ。

「お兄さんたちと一緒に話したいにや。そつち座つてもいい？」
モジモジと愛くるしく大きな瞳で見詰めてくる姿に、父性と男をくすぐられる兵士。猫招きの手の形で頬を撫でる仕草を見せながら、眼差しはドキリとするほど妖艶に流れた。

「ちつちやいのも、これはこれでアリだな。へへ、いいぜ、こつちに来な」
刹那の間、少女は微かに口角を上げる。ニコニコとあどけない笑顔のその裏には、まだ爪は隠されたままだった。

靴底が沈み込みそうな赤い分厚い絨毯。頭上には寶石がちりばめられたシヤンデリアがあつて、壁際の家具やテーブルの上には数多の芸術品が置かれてある。どれも大陸に名を馳せた逸品や亡国王家の宝であつて、どれほどの搾取のもとに成り立っているかを考えるだけでその横暴なる本質が窺えた。

今、フィオナは蛭輪のように全身に這い回る情欲の滾った視線に怖気ながらも、氣丈に目の前の男に抵抗の意思を示した瞳を向けている。彼の名はベリアルドⅡオーギュスタン。ギユスターヴという名でも知られた、悪意の君主、バードベルグ帝国の皇帝である。「……久方であるな、イセリア英雄公国第一皇女フィオナⅡブリティッシュよ。いつぞやの、会谈以来か」

帝国の城の一室に彼が現れてから数分が過ぎてからの、ようやくの言葉だった。向かいあわせた椅子に座ったギユスターヴは、メイベルローゼに退室を命じた後のこれまで、豊満にして若く瑞々しい皇女の肉体をただ舐め回すように見詰めていた。黄金よりも輝かしい髪のひとつひとつ。清純な淑女に無垢さをまだ保ち続けた顔立ち。大人しそうでありながら芯の強そうな瞳。潤いを継続させて、ぶつくりと色香の滲み出る唇。肉体のラインをまざまざと見せつけてくれるレオタードの肢体には、その何倍も視線で捏ね回した。「オーギュスタン皇帝、不眠ですが、まずお聞かせ願えますか。貴方はなぜ故に、戦火を大陸中に広げようとなされるのです。魔物まで使い、村を、国を蹂躪し、他国を虐げる。そのようなこと……」

高揚し頬を赤らめた皇女の言葉を遮るように、その欲望の大きき通りに腹を膨らませた男は言った。「霸道の欲に忠実である。それだけの

こと……。のう、フィオナよ、たかだか人の短い人生にどれだけのことが成し遂げられる。ワシは、望むまますべてを手に入れた。たとえそれが強引な手法であつても、成す力があれば行おうぞ」

「他者を蔑ろにしても、ですか？」

「無論……」

不遜な笑みを浮かべるギユスターヴ。傲慢などす黒い瞳が、お前も欲望の生け贄であるのだと語りかけてくるようだった。美姫の腋の下に嫌な汗が流れ、唇を噛み締めるようにして身体の震えを何とか抑えている。

「さて、ここからは、ワシから質問、いや、命令させてもらおう。我が軍門に下り、絶対なる忠誠を誓え。従属するのならば、お前の国への侵攻を考え直してやらんこともないが」

予測はしていたが、単刀直入であつた。対して、逃げず、媚売らず、反抗の意思で睨みつける。

「お断りします」

額から汗がひとつ流れていく。鼓動は、予期する陵辱に高鳴り、肘掛けの上で拳をぎゅつと握り締めた。

「ほう、数倍の戦力をもつて、貴国に押し寄せようぞ」

「我が敬愛するイセリアの騎士たちは、挫けず、恐れず、何者にも屈することはないでしょう。わたくしは、彼ら、彼女らを信じています」

言ってしまった、という後悔がまったくないわけではない。だが発した言

葉に本心からの偽りはなく、そんな騎士らに報いるためにも、自らが先んじて膝を折ることなどできない。

決意の姫君に、皇帝は満足げな笑みを浮かべた。

「くく、やはりお前は見込んだ通りの、いやそれ以上の女になった。楽しませてもらうぞ、フィオナ」

獲物をいたぶる前の悪魔のような顔つきで、ニタリと口角を上げるギユスターヴ。吐き気を催しそうな脂ぎつた男の体臭は、ひどく猥褻なものに思えて仕方がなかった。

あと十年若かったなら、下着のないそのアリーナレオタードの姿を見ただけで、己の男性を滾らせ、すぐにでも押し倒して強引にでも肉槍を突き立てていたことだろう。

気高く美しく成長を遂げた姫君は、聖人の理性をも乱すほどに官能的な肢体を持っていた。瑞々しい果実のような豊乳は美しい釣鐘状であり、その部分はすでに男を憶え込まされて、どこか淫靡なおいを発するようになっている。自ら先頭に立つて国を動かしてきたせいか、その腰には飽食の陰りもなく、よく引き締まった括れを見せていた。逆にそこから流れるような曲線で隆起していく臀部と、むちむちした太腿は戦士にはない柔らかなほどよい脂肪の付き方をして、この上なく扇情的なのだ。「うっ、はあ、あ……乳房、だめ……」

椅子に座り、グラスを片手にギユスターヴは愛撫され続けるフィオナを見詰めていた。

もはやいつでもその純潔を奪うことはできる。念願の成就を直前にして、彼はその高揚していく気分を楽しんだ。

犯す前に服従させてやる。アリーナレオタード姿のフィオナをベッドに仰向けに寝かせ、その両手と両足を鎖で繋いでやつた。屈辱に顔を顰めた皇女がむしる可愛く見えて仕方がない。全身をねっとり見てやると、何とそれだけで乳首を勃たせるではないか。その時思った、自分から「イかせて」と叫ばせてやると。

「も、もうやめ……て……。んっ、はあ、お股っ、触らないで……」

ベッドの周りを五人のうら若き乙女が取り囲んでいる。皇女に羨望と嫉妬に満ちた瞳を向ける彼女らは、すでにギユスターヴの性奴隷へと堕ちた亡国の姫君や高位の女官である。皆、裸同然の下着姿であつた。

「ほうら、フィオナ姫、太腿の内側が、ぬるぬるになつてましてよ」

「ぬぶ、ちゅ、ちゅばっ……、はあ、さすが名高いイセリアの皇女、乳首もこんなにエッチに発情させて……」

「あらあら、また身体をビクビクさせて……でも、まだイかせてあげませんわよ。ふふ……」

彼女らに命じて、自由を奪ったフィオナの肉体を延々と弄はせている。だが決して一定以上には気を高めさせな

い。絶頂に導かれようとする直前でやめ、呼吸が整い出すとまた繰り返される。無理矢理性悦を染み込ませられるのに、一思いに楽にさせてもらえない皇女は眉をひそめる泣きそうな顔をしながら時折恨めしそうにこちらに視線を向けてきた。

「すでに、五時間……、イクことを憶えさせたと聞いたが、その割によくここまで我慢している。大した精神力と言うべきか」

豊富な肢体を汗ばませ、広げられた股間では、切れ込んだレオタードの脇から、ぬちゃぬちゃと淫蜜が漏れて一帯を光沢させている。全身が朱色に染まり始め、くねくねと腰をくねらせては、時折背を仰げ反らせた。それなのに、皇女の口から屈服の宣言は未だ発せられないのだ。

「強引に鬨るだけでは駄目、ということか？ 何とかして暴いてみたいものだな、あやつの牝を……」

ドンドン、と激しく扉を叩く音が聞こえた。無粋な奴もいたものだと、顔を顰めるが、「入れ」と一言低く発する。「し、失礼します。早急のご報告があったものですから……」

開かれていく扉にフィオナの視線が向かっていった。「ヒコ」と小さく唸って、瞳に潤いが生じていく。美麗な顔がさらに真っ赤に染まって、強い興奮を示すように呼吸が深く、球状を保って急速に隆起した豊乳が上下する。それを見逃すギユスターヴではなかった。

濃厚な若々しい牝の香が充滿しているこの広い部屋に入ってきたのは、若い男性の親衛騎士である。彼は恥ずかしそうにベッドで絡みついた女たちの痴態から目を背けるようにした。

「用件は何だ？」

「はっ、陛下。実は城下にて、我が軍の兵士数名が何者かに惨殺され……」

「そんなことか……。軍のことは息子どもに任せておる」

「しかし、ウォルガード將軍も未だお戻りにならず……」

「小事のことはよい。それよりも、お前も見ていかぬか。なかなかの光景であろう」

非道な蹂躪も話に聞く帝国軍であったが、ウォルガードの影響の濃い部隊にはこういった生真面目な兵も少なくはない。

「わ、私は、そんな……」

だが股間の膨らみは隠しきれない。そんな風に欲望を偽って何が楽しいのかと、皇帝は鼻で笑う。

「命令である。目を背けず、見ていくがよい。そうだな、あの大陸と謳われた美姫、フィオナのオマンコでも見せてやる。今宵のおかずにもですればよからう。くく……」

皇女の顔がそれを聞いて引き曇った。染しげな含み笑いを浮かべる女たちのひとりが、レオタードの下腹部の脇に手をかける。

「や、やめて……、わたくしの不浄なところっ……み、見ないでえっ！」

若い男の唾を飲み込む音が聞こえた直後、ぐいっとレオタードの股間部が脇に寄せられる。

「いやああああ——っ」

きつく瞳を閉じて顔を背けるフィオナ。さらに濃厚な、汗と粘膜と淫蜜の混じった、甘い乳製品のような女陰の香が放たれる。

皇帝も初めて拝むそこは、髪よりも少し濃い色をした恥毛が、ぐっしりりと牝汁に塗れ微肉に張りつき、熱い泥濁と化した肉ピラの粘膜が猥褻な形状に歪んで肌色からサーモンピンクを露出させていた。

「う、うう……見ては……見ては、ありません……。こんな……、ふあ、はああ、ハア、ハア……」

今すぐむしゃぶりつきたい衝動に駆られながら、ギユスターヴはほくそ笑む（そういえば、何度か不特定多数に裸を晒す憂き目に遭ったのだったな。なるほど、そういうことか）

視線に煽られ、どくどくと音を立てるほどに淫蜜が肉裂から吐き出されていく。今は誰も肌に触れぬ状態でありながら、それ以上に身体を弓なりにする敵国の皇女の姿に、おぞましい計画を思いつく皇帝であった。

性的に鬨られたのは最初の日だけで、後の三日間はフィオナの身自体には本当に何も起こらなかった。軟禁された部屋は、意外にもイセリア王宮を思い出させる落ち着いた空間で、だから

らと言って気分が暗れるということはない。当たり前の下着に、当たり前のドレスを与えられたことは、むしろ拍子抜けするほどだ。ただ、ギユスターヴは夜な夜なやってきては、フィオナと同じベッドで別の女を抱いた。決して手を出してはこない皇帝。横たわりながら顔を背け、背中から女の卑猥な嬌声と肉棒を求めぬる哀願を聞かされる。

あの日、絶頂を迎えることのできなかつた身体は火照り、強烈に刺激を求め、何度もこつそりと指先が下腹部へと伸びていきそうになった。女があまりにも男の逸物を欲するので、そんなにいいものなのかとつい考えてしまう。すでに乳房と菊門はその味を知ってしまった。穢れた行為に及ぶのは踏み止まっても、次の日には替えの下着を差し出す侍女に、真っ赤になりながら染み汚した使用済み着を渡している。

「はア、フィオナ、元氣してた」

下着同然のボンデージ服を着たメイベルローゼが顔を現した。このパワードベルグ城内にあつてもそのスタイルを通す彼女に、そんな破廉恥な姿をしていて恥ずかしくないのかと微かな蔑みを瞳に宿してしまふ。

「メイベルローゼ……、ルシイフは無事なのですか？ イセリアは、情勢はどうなってます……」

「はいはい、お喋りの時間はなしよ……ついてきなさい」

もうどんな質問も受けつけなないという雰囲気醸し出すメイベルローゼに



対して、フィオナは大人しくついていくしかない。奴隷扱いされていた旅路と違って、ここ数日の間、比較的まともな扱いを受けていて警戒心が薄らいでいたせいもあった。

灰色の壁をした本丸から一度外に出される。冷たい外気を感じると、オリオでの一件を思い出し、この感覚こそが本来のものなのだと思いと同時に、自分が今正常であるのだと安心できた。

ほどなくして、囚われの皇女はバンドベルグ城の敷地内にあつた迎賓館に入る。通された控え室は質素で薄暗く、そこには数人の、ひどく冷たく、感情を持ちあわせていないような瞳をした、侍女が待っていた。

「ここで、お着替えてもらおうわ。それを素肌身に着けてちょうだい」
皇帝の末姫の視線の先、壁にかけられたそれを確認した途端、フィオナは顔を蒼白にさせる。

「こ、これは……」
動揺を隠しきれない皇女の様子にメイベルローゼは楽しそうに笑みを浮かべ、侍女らに非情の命を下した。

「あはは、さあ、とつととひん剥いて、そいつを着せなさいな」
数本の手にドレスを引き裂かれながら、さらなる辱めの予感に肉の疼きを憶えてしまう英雄国の姫君であつた。

第一級の勅命がバンドベルグ及び同盟国に通達されたのは三日前。伝書

鳩と早駆けの馬を使つての迅速なものであり、それから僅か一日半で彼らが集められたのは、強引な手法と褒美の大ききからであつただろう。

ほとんど休みなく移動させられた彼らの多くは、それでもきらびやかな迎賓館と設けられた壇上を囲むように並べられた無数のイーゼルに設置されたキャンパスを見て、一種の感動を憶えたという。

総勢で百名を超える絵師が国の内外からここにやつてきた。教えられたのは、莫大な褒賞と創作意欲を存分に湧き立たせるモデルが与えられるということだけだつた。

「バンドベルグ皇帝、ペリアルドールオーギュスタン陛下のご登場である」
恰幅がよく畏怖を憶える威厳を備えた男の登場に、それぞれのキャンパスに位置した絵師らは深々と頭を下げる。「よい。頭を上げよ。ぬしらには真つ直ぐとこちらを見てもらわねばならぬのだからな」

集まつた面々にギュスターヴは満足げだ。特に有名な芸術家はもつとも近い場所に陣取らせている。

「では、早速ではあるが、モデルを紹介しよう。さあ、来るがいい」
ギイと重い扉が開かれる。一斉に百名を越えた人間の視線がそちらに集中し、期待を込めて注ぎ込まれた。

逆光の中現れたのは、皇帝の末の娘メイベルローゼである。確かに美しい顔立ちの少女であり、ふむ、と納得の

いったような領き声ももれた。だが、その直後、陛下の御前という状況も忘れて、大きなどよめきが起こつた。

ボンデージ服を着た姫君の持つたロープに繋がれ、後ろからもうひとり少女が現れた。

「おお、と歓喜に似た声をあげ、芸術家らは瞳を輝かせる。」

艶やかに煌めく黄金の髪。無垢な清純さを醸し出す美麗な顔立ちと生まれもつての気品に溢れていた。それなのに何という背徳的な色香のあることか。而腕は頭の後ろで縛り組まされ、濃厚な牝をにおわせる汗ばんだ腋の下が丸見えになっている。首輪を施され、無理矢理引つ張り出されていく彼女の顔は、今にも泣き出しそう、頬を桜色に染め上げ、強烈な嗜虐を煽ってくるのだ。

「み、見たことあるぞ。まさか、イセリアの……フィオナ皇女……」
「あのテイアラ……間違いない。それに、あの鎧は……」

緑色の女性用の簡易アーマーは、まさしくイセリアの王族にのみ、装着の許されたものである。だが今のフィオナには、本来中に着込むレオタードがなかった。無論下着もない。

（誇り高い英雄公国の皇女の証……。たとえ偽物でも、こんないやらしいものに貶められてしまうなんて……）

皇帝の末姫が用意したのは、形だけを似せた本物ではない精霊装甲であつた。それだけを素肌に身に着けさせら

れると、もつとも恥ずかしい鼠蹊部の、一帯は丸見えの状態なのだ。しかも、「おお、何と大きく美しい乳房……。自然にこのような芸術が生まれるとは、まさしく神のみのなせる業」

「乳首と乳輪の大きさもバランスよく、何とエロティシズムに溢れる形。まさしく、最高の素材」

顔の熱がまったく引いていかない。末姫の用意したこの偽の精霊装甲には、胸当ての部分だけがなかった。

キャンパスの隙間を通つて、歩かされ、巨乳はたぶんと揺れて、その柔らかさと重量感を視覚に伝えてしまう。熱すぎる大量の視線に、すぐに身体中が汗ばんでくる。頼りなく無防備な股間も直接外気を感じ、外よりも少しばかり温かい程度なのに、露玉ができそうに蒸れてきてしまう。

（こ、こんなに大勢の人たちに、恥ずかしい姿を見られ……。はあ、身体が震えるのに、何……？ あ、あそこが疼いて……。掻きたい……）

衆人環視で女陰を弄くり回す自分の姿を刹那想像してしまう。カーとさらに顔を真っ赤にして頭を振つた。それでもどんな風に見られているのが気になつて、瞳を細めて周りを見た。爛々と血走つた目が渦巻いている。

ブルツと身を震わせ、身体中に電流が走っていくように思えた。いつの間にか呼吸が乱れ、汗に光沢し出した釣鐘状の肉果実が深い膨張収縮を見せる。

「グズグズしてるんじゃないわよ、牝

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>